

大和田建樹著

通俗日本地理

東京 博文館藏版



序

王政復古以來、三十餘年。文明の進歩、技藝の發達、遂に歐米諸國を凌駕せんとしつゝある我日本帝國は。そもく地球上一つれの方位に坐を占め。いかなる經營をへて。渺茫たる太平洋の東端に頭角をあらはし來れるか。これ苟くも生を我大八洲瑞穂の國に受けたる吾人臣民の。一日も研究を怠るべからざる問題の學科にあらずや。

我國の位置を知らんと欲せば。一片の萬國地理を開きて立どころに會得するを得べし。然れども其内地に於ける地勢、區劃を始とし。行政の現状、人口の多少、人種、生業、さては國家の文備武備。内外交通の有様等を知らんと欲せば。いかなる一部の地理書の教あるところに依らざるを得べき。すでに地理書の吾人に一日も缺くべからざることを此くの如し。あゝ一部の地理書よ。さても吾人の指南車として羅針盤として稱賛する其効はたして幾はくぞ。

それ地理書の百科に連絡して然も其指揮を司るものなる事は。今更いふまでもなければ、特に最も之が援助を仰がざるべからざるは。歴史を讀まんとする人にあり。人もし何故ぞと問はむ。余は直ちに答へんとす。凡そ世には之を遺傳するものありて。はじめて事蹟なるもの存す。歴史に於ても又然り。古事舊蹟の今日に存するあるは。偏へに其地其郷の遺し傳へたるが爲めにあらざるや。概言すれば。記録の存する土地の傳ふるに相待ちて後。はじめて完全なる歴史は得らるべきなり。地理歴史と並び稱へて相離るべからざる所以のものは

即ち是のみと。

今や地理書の世に出でたるもの。實に汗牛充棟も嘗ならず。而して其多くは地理學專攻の士もしくは教育家の手に成れり。然れども惜いかな歴史と連絡の點に就きては。或は之を等閑に附したりやの感なき能はず。よいて余は大に意を此に注ぎ。讀者に聊か満足と與ふるの端緒を開かんと企てつるなり。もとより紙數限りあるの小冊子。及ぶ能はざる遠しといへども、又以て一部の歴史地理とも見らるゝを得ば。編者の意まづ満足すべきのみ。

明治三十三年五月

編者 ころす

通俗百科全書 通俗日本地理目次

總論

- 其一 位置 境界……………一
- 其二 面積 區劃……………二
- 其三 地勢 山脈 河流……………四
- 其四 氣候 動植物……………五
- 其五 人種 人口……………七
- 其六 土地 生業……………一
- 其七 交通……………一五
- 其八 政體 政治……………一七
- 其九 教育 宗教……………一八
- 其十 軍備……………二〇
- 其十一 外交……………二三

第一編

- 畿内……………二五
- 第一章 山城……………二七
- 第二章 大和……………三四
- 第三章 河内……………四〇

第二編

- 第四章 和泉……………四四
- 第五章 攝津……………四六
- 東海道……………五二
- 第一章 伊賀……………五五
- 第二章 伊勢……………五七
- 第三章 志摩……………六五
- 第四章 尾張……………六七
- 第五章 三河……………七三
- 第六章 遠江……………七六
- 第七章 駿河……………八一
- 第八章 甲斐……………八八
- 第九章 伊豆……………九三
- 第十章 相模……………九九
- 第十一章 武藏……………一〇
- 第十二章 安房……………二五
- 第十三章 上總……………二七

第三編

- 第十四章 下總……………一三〇
- 第十五章 常陸……………一三四
- 東山道……………一三七
- 第一章 近江……………一三八
- 第二章 美濃……………一四一
- 第三章 飛驒……………一四三
- 第四章 信濃……………一四五
- 第五章 上野……………一四八
- 第六章 下野……………一五一
- 第七章 磐城……………一五四
- 第八章 岩代……………一五七
- 第九章 陸前……………一五九
- 第十章 陸中……………一六二
- 第十一章 陸奥……………一六四
- 第十二章 羽後……………一六七
- 第十三章 羽前……………一六九

第四編

北陸道……………一七二

第一章 若狹……………一七三

第二章 越前……………一七四

第三章 加賀……………一七七

第四章 能登……………一八一

第五章 越中……………一八三

第六章 越後……………一八六

第七章 佐渡……………一八九

第五編

山陰道……………一九一

第一章 丹波……………一九一

第二章 丹後……………一九三

第三章 但馬……………一九五

第四章 因幡……………一九七

第五章 伯耆……………一九八

第六章 出雲……………二〇〇

第七章 石見……………二〇二

第八章 隱岐……………二〇四

第六編

山陽道……………二〇七

第一章 播磨……………二〇八

第二章 美作……………二一一

第三章 備前……………二一二

第四章 備中……………二一五

第五章 備後……………二一七

第六章 安藝……………二一九

第七章 周防……………二二三

第八章 長門……………二二四

第七編

南海道……………二二七

第一章 紀伊……………二二八

第二章 淡路……………二三一

第三章 阿波……………二三三

第四章 讃岐……………二三五

第五章 伊豫……………二三七

第六章 土佐……………二四〇

第八編

西海道……………二四三

第一章 筑前……………二四四

第二章 筑後……………二四六

第三章 豊前……………二四八

第四章 豊後……………二五〇

第五章 肥前……………二五二

第六章 肥後……………二五五

第七章 日向……………二五七

第八章 大隅……………二五九

第九章 薩摩……………二六一

第十章 壹岐……………二六二

第十一章 對馬……………二六三

第十二章 琉球……………二六四

第九編

北海道……………二六六

第一章 渡島……………二六八

第二章 後志……………二七〇

第三章 石狩……………二七一

第四章 天鹽……………二七二

第五章 北見……………二七三

第十編

第六章 膽振……………二七四

第七章 日高……………二七五

第八章 十勝……………二七六

第九章 釧路……………二七六

第十章 根室……………二七八

第十一章 千島……………二七九

臺灣

龍頭目次

本邦著名高山一覽……………一

本邦著名火山一覽……………六

本邦著名鑛坑一覽……………六

本邦二十五里以上河流……………八

本邦著名湖水一覽……………二二

本邦著名温泉一覽……………二三

本邦著名瀑布……………一九

本邦開港場一覽……………二〇

土地及屬島數一覽……………二一

周圍一覽表……………二二

面積一覽表……………二二

本籍人口……………二四

面積及び現住戸數人口……………二六

族籍男女別人口……………二九

人口壹萬以上都邑……………三一

人口壹萬以上都邑に於ける現在戸數並に一戸に付人口一覽表……………四一

古今人口比較……………五二

全國汽車線路各驛一覽……………五五

全國街道及宿名一覽……………七〇

内外航路運數……………一〇三

國縣里道延長……………一三三

東京日本橋より廳府縣元標に至る里程……………一三〇

郵便線路……………一三三

電信線路……………一四三

陸軍管區……………一四九

步兵聯隊現役兵徵集聯隊區區分……………一五三

陸軍配備……………一五六

憲兵管區……………一五九

海軍管區……………一六〇

陸軍軍人軍屬總員……………一六二

諸隊配置人員……………一六六

海軍軍人軍屬總員……………一七二

軍艦及乘組人員……………一七六

水雷船艇……………一九七

輸出入物品元價……………二〇二

爵位勳章……………二〇三

舊藩主領地一覽……………二〇六

官國幣社一覽……………二一九

二十二社及全國一宮……………二二一

日本地理問題……………二二四

通俗日本地理本欄及龍頭目次終

通俗日本地理

大和田建樹編

○本邦著名高山一覽

新高山	富士山	御嶽	赤石山	白根山	駒ヶ岳	大蓮華山	蓮華山	錫杖岳	八ヶ岳	乗鞍山	前岳	白山	四阿山
信濃	山梨	飛騨	駿河	駿河	甲斐	越後	越後	信濃	甲斐	飛騨	信濃	加賀	信濃
九二六	三三〇	三三六	二一四	二二二	一九〇	一八七	九六八	九二四	九二一	九一〇	九一〇	八九四	八九〇
尺													

總論

其一 位置 境界

讀者試みに一枚の世界地圖を取り。眼を開いて之を熟視せよ。まづ認めらるゝは東西の兩半球なりん。更に東半球に眼を凝らさば如何。球の東岸すなはち亞細亞洲の東に位し。北にはオホクシク海を隔て、露領の東塞加半島と樺太島とを左右に睥睨し。西は日本海、支那海を隔て、露領西比利亞および支那、特に近くは一帯帯水を間にして朝鮮を叩へ。南臺灣の諸島によりて西班牙領フィリピン群島に連なり。東は渺茫たる太平洋を隔て、遙に北亞米利加洲を望み。弓状をなして羅列せる一群島を見出だすべし。その形あたるも神龍の波上に現はれ出でし。四邊に浮べる惡魚ともの隙を狙ひつゝあるの威を起さしむるものなからずや。これ何者ぞ。誰も知らん。上は皇統連綿たる萬世一系の至尊を戴き奉る。下は忠君愛國の眞心深く。仁義に長じ勇氣に富みたるの人民を以て充たされたる我大日本帝國

地藏ヶ岳	甲斐	八八五七
國司岳	甲斐。信濃。	八五五三
金峰山	甲斐	八五四九
蓼科山	信濃	八三四九
高妻山	信濃	八三二〇
寶永山	駿河	八三三三
淺間山	信濃	八三三〇
男體山	下野	八一九五
横手山	信濃	七九五四
烏帽子山	同	七八四五
駒ヶ岳	同	七八〇八
香妻山	同	七七七八
大無間山	駿河。遠江	七六九三
岩倉山	信濃	七五七二
惠那山	美濃。信濃	七三九三
小子岳	信濃	七二六四
七面山	甲斐	七三三〇
御月山	越後。上野	七二二二
苗場山	越後。信濃	七二二二
赤碓山	下野	七〇九五

なる事也。
 更に地球の經緯線に照らして我帝國の位置を見れば。南端なる臺灣の南極は。北緯二十一度五十三分に當りて既に熱帶中に屬し。北端なる千島の阿頼度島は同じく五十度五十六分に當りて。將に寒帶中に入らんとしつゝ。猶距ると十五度半のところにあり。而して西端なる澎湖列島の高島は東經百十九度二十分に位し。東端なる千島の占守島は同じく百五十六度三十二分に位せり。
 各島の位置を更に委しくいへば。本土、四國、九州の三大島は相並びて日本群島の中心となり。本土の東北には蝦夷島あり。其更に東北には千島三十二島點々として蕃布し。九州の西南には琉球五十五島あり。東北に於ける千島の如く。長く羅列して遂に南端臺灣島に接近す。臺灣の西には澎湖諸島あり。また本土の西北には佐渡、隱岐の二島あり。東南には小笠原群島あり。四國の東には淡路島あり。九州の西北には壹岐、對馬の二島あり。此他小屬島を合算すればすべて五百以上を達す。此等の位置は更に各島にて詳説すべし。
 其二 面積 區劃
 日本群島の面積を一覽表に作りて示せば左の如し。
 本土……………一四五七一方里二二

笠山	信濃	七〇八八
白根山	信濃。上野	七〇六九
十文字峠	武藏。信濃	七〇五五
黒坂山	信濃	六九一四
湯輪尾山	北見	六九〇〇
大平山	羽後	六八九七
鳥海山	羽後	六八八五
雁坂峠	甲斐。武藏	六八六九
駒ヶ岳	岩代	六八三二
岩手山	陸中	六七九七
月山	羽前	六七八〇
黒岳	豐後	六六九九
大島帽子山	越後。上野	六六六四
雲取山	武藏	六六五六
高野山	紀伊	六六三〇
八甲田山	陸奥	六五五三
後志山	後志。膽振	六五三〇
石槌山	伊豫	六四七二
鳥居峠	信濃	六四五〇
赤安山	岩代。上野	六四二〇
香妻山	岩代	六四一八

四國……………	一一八〇方里六七
九州……………	二六一七方里五四
蝦夷(北海道本地)……………	五〇六一方里九〇
千島三十二島……………	一〇三三方里四六
佐渡……………	五六方里三三
隱岐……………	二一方里八九
淡路……………	三六方里六九
壹岐……………	八方里六三
對馬……………	四四方里七二
琉球五十五島……………	一五六方里九一
小笠原二十島……………	六方里三八
臺灣……………	二二五九方里九〇
澎湖列島……………	八方里二〇
總計……………	二七〇六二方里四六

これを支那に比ぶれば殆んど其三十分の一に當り。更に露西亞に比ぶる時は實に其六十分の一たるに過ぎず。然れども轉じて之を朝鮮に比ぶれば。我國の大さ彼の二倍にして。露西亞の如きに至りては。およそ我が九分の一に過ぎざるを見る。而して殆んど同じきは英

大菩薩峠	甲斐	六三八八
割引山	越後	六三五六
宮ノ浦岳	屋久島大隅	六三四五
朝日岳	羽前	六三三九
赤城山	上野	六三二五
茶臼山	下野	六三一〇
早池峰	陸中	六二七〇
阿蘇山	肥後	六二三七
剣山	阿波	六一二二
八海山	越後	六一〇五
煤山	岩代	六〇八〇
大山	伯耆	五八七七
盤梯山	岩代	五八六四
大日山	越前	五八〇〇
霧島山	日向	五五〇〇
神威山	日向	五四〇〇
積丹山	後志	五三〇〇
森吉山	羽後	五三〇〇
立山	越中	五〇四〇
鶴見山	豊後	五〇〇〇
高原山	下野	五〇〇〇

吉利これなり。全國を大別して畿内、東海、東山、北陸、北海、山陰、山陽、南海、西海の一畿八道とし。更に之を分ちて八十五國となす。古へは七道なりしものも今は北海道加りて八道となり。六十餘州の稱を以て日本を代表せしは過去に屬して。現今は八十五箇國の數に上りたるなり。但し新版圖なる臺灣のみは獨り未だ此區劃の數に入らず。各道の位置、境界等は。各編に於て詳説すべければ此にはいはず。

其三 地勢 山脉 河流

我帝國の地勢たる。幅狭くして縦長きが故に。従つて山脉また北より南に延長せるは。地圖を見ても知らるべし。一帯の大山脈は樺太島より來りて北海道を南北に貫き。千島より來りたる火山脈は之と交錯して十字形をなし。兩山脉共に一度海に没して再び本土の北端に現はれ。相並びて西南に走り本土の脊梁をなしつゝ。九州を貫きて支那海に去れり。而してこれに幾多の支脈あるはいふまでもなし。

されば地面の大勢は。大山脈を中央にして兩側に傾くこと恰も『へ』の字を爲すが故に。河流は其方向を二途にし。本土の如く山脉の東西に亘れるところは。南海に注ぐものと。北海に注ぐものと別あり。

岩木山	陸奥	四九〇〇
葉山	羽前	四八〇〇
天城山	伊豆	四五〇〇
遊樂都山	渡島	四四〇〇
金剛山	河内	四二九〇
小松山	日向	四一六五
丹澤山	相模	四〇〇〇
金北山	佐渡	四〇〇〇
飯豐山	岩代	三九九〇
櫻島岳	薩摩	三六三六
英彦山	豊前	三三六六
祖母岳	豊後	三二六四
船通山	出雲	三〇〇〇
安達太郎山	岩代	三〇〇〇
御神樂岳	岩代	二九五〇
筑波山	常陸	二八九七
比良峰	近江	二八八〇
比叡山	山城	二七三三
木葉山	肥後	一八二〇
戸上山	豊前	一七七八
國頭岳	沖繩	一四三二

り。國の幅廣からざれば大河、長流をなすに至らずといへども。傾斜の度甚だ強きが故に急流甚だ多し。火山脈縱横に貫通せるを以て。地質多く硫黄、炭酸、鹽類等を含み。従て温泉、礦泉の噴出する所極めて少なからず。我國に地震の多きも。また此火山脈に當たれるが故のみ。

其四 氣候 動植物

臺灣島の半部は熱帯に屬し。千島の北端は殆ど寒帯に入らんとし。南北緯度の差甚だ大なれば。温度にもまた大なる差あり。今左に各地方最近數年間平均の温度を示さん。

函館 (北海道渡島)	一月(攝氏)	零下三度九	八月(攝氏)	二十一度三
秋田 (東山道羽後)	同	二度		二十三度八
金澤 (北陸道加賀)	同	二度		二十五度六
東京 (東海道武藏)	同	二度六		二十五度六
京都 (畿内 山城)	同	二度二		二十六度四
廣島 (山陽道安藝)	同	三度四		二十六度九
和歌山 (南海道紀伊)	同	四度四		二十六度九
長崎 (西海道肥前)	同	五度六		二十七度

山王時 岩代 七二〇

○本邦著名火山一覽

現火山	國名	壞火山	國名
淺間山	信濃	富士山	駿河
阿蘇山	肥後	榛名山	上野
三原山	伊豆	箱根山	相模
那須山	下野	恐山	陸奥
鶴見山	豐後	霧島山	大隅
焼山	陸奥	櫻島岳	薩摩
駒ヶ岳	渡島	磐梯山	岩代
惠山	同		
鑛坑	國名	種類	
芹野	日向	金	
保川	甲斐	金	
金北山	佐渡	金	
大土山	陸前	金	
半田山	岩代	銀	

○本邦著名鑛坑一覽

院内	羽後	銀
生野山	播磨	銀
西小畑	陸中	銀
小阪	陸中	銀
八森	羽後	銀
八摩	石見	銀
佐摩	石見	銀
十石山	越後	銀
畑佐	美濃	銅
太瓦	羽後	銅
足尾山	下野	銅
尾去澤	陸中	銅
別子	伊豫	銅
阿仁	羽後	銅
金堀山	美作	銅
永盛山	攝津	銅
上向	陸中	銅
間瀬。草倉	越後	銅
川口	羽後	銅
吉岡	備前	銅
高島	肥前	石炭
岩内	後志	石炭

那覇 (西海道琉球) 十五度八 二十度六

氣候に此くの如き大差あるは。緯度の差素より其重なる原因なれども。また南面に臺灣附近より來れる黒潮の暖流に洗はれ。北部はオコック海より來る寒流を受くるにもよれり。

氣候の寒暖に従うて動植物の異なるべきはいふを俟たず。まづ植物よりいへば。琉球臺灣等には檳榔樹、鳳梨、芭蕉、肉桂、甘蔗、蘇鐵、荔枝、龍眼、蜜柑、榴梿等の熱帶植物を産し。九州より本土に入りては。此等の植物次第に減少し。松、杉、檜、柏、樺、椎、楊梅、櫻、梅、楡、茶、竹等繁茂す。本土の北部には胡桃、櫻、栗、赤松の類多く其他の喬木も少なからずといへども。概ね冬は落葉するもの多し。北海道に入りては杜松、白檜、五葉松、樺、開柏等到處に鬱々たる森林をなす。然れども此等植物の區域は。劇然たる境界あるにあらず。また地勢によりて特例少なからず。一例をあげれば。白檜は寒冷の地に適するものなるが故に。北海道に多しといへども。本土の東北部。東海北陸の高山にも生じ。四國なる伊豫の石槌山、阿波の劍山にも少しく發生するを見る。

動物の區域に至りては。植物よりも一層判然たらず。要するに温暖

其五 人種 人口

我國の人種は。分ちて三種族とするを得べし。日本種族、アイヌ種族、臺灣種族すなはちこれなり。

日本種族とは。純粹なる日本人の種族にして。皮膚は黄色を帯び毛髪、眼球は黒く。身の長大五尺より五尺四五寸に至る。言語、風俗は地方によりて差異あれども。特別なる心性即ち忠君、愛國、義勇等の念に富める事は皆同じ。國史によれば。此種族は天神の苗裔にして。神武天皇の御東征以來次第に東方に擴がり。遂に今日に至りしものとす。されば三千年來歴代の皇恩に浴し來り。我國と我皇室との關係最も深きは此種族なり。

アイヌ種族は。骨格概して日本種族よりも偉大にして。皮膚の色淡

三池	筑後	石炭
石狩石灰山	石狩	石炭
白水	磐城	石炭
鷹取山	攝津	石炭
白糖石灰山	勝島	石炭
惠山	波島	硫黄

この他銅鑛には土佐國(各所にあり) 石炭鑛には肥前國(各所にあり) 鐵鑛には備後國(各所にあり) 安藝國(各所にあり)ありて。何れも有名なり。

○本邦二十五里以上河川

河川	國名	里丁
石狩川	石狩	一六七〇〇
信濃川(上流干)	越前	一〇四〇〇
北上川	越前	七六二七
荒川(下流國)	武藏	七四〇〇
利根川	上野	七〇〇〇
天鹽川	下總	七〇〇〇

く全身毛を生じ。髯は頗る長し。此種族初めは本土に蔓延し。日本種族の東漸に抵抗を試みたりといへども。優勝劣敗の勢如何ともすること能はず。次第に北方に驅逐せられて。今は唯北海道の僻地に部落をなし。僅に餘命を保てるのみ

臺灣種族は。新版圖書の人民をいふ。此種族は人類學上の調査研究未だ行き届かざるを以て。詳細を知ること能はずといへども。此内支那より移住したるものと。土着の番人との二種あり。番人は性質最も凶暴にして。常に移住支那人を襲撃し。互に其取りたる首級しゅきゅうの多きを誇るの風ありしといふ。我國の版圖に入りてよりも。先づ襲來して内亂をなすは。敵愾心に出づるにあらざして。全く其殺伐凶暴の悪性によるなるべし。

以上三種の外。琉球の人民を以て別に一種族と稱する人類學者もあり。されど其調査研究未だ詳細ならざるを以て。暫く日本種族の一部とす。

参考のため左に最近の各府縣別人口表を掲ぐ。

府縣	男	女	計
東京府	七三七、九九一	七三〇、六六三	一、四六八、六五四
大阪府	六四〇、四九九	六四〇、〇四三	一、二八〇、五四二

最上川	羽前	六二〇〇
千曲川(下流信)	信濃	六〇〇〇
日高川	紀伊	五五一八
保津川(下流桂)	丹波	五五〇〇
阿武隈川	磐城	五〇〇〇
江川	石見	五〇〇〇
大井川	遠江	四六〇〇
川内川	薩摩	四六〇〇
大津川	十勝	四四〇〇
豊居川	十勝	四〇〇八
射水川	越中	四〇〇〇
益田川(下流飛)	飛騨	三九〇〇
多摩川(下流六)	武藏	三八〇〇
忠見川	岩代	三七一八
高田川	美作	二八〇〇
クスリ川	備前	二八〇〇
追川	鋼路	二七〇〇
木曾川	尾張	二七〇〇
筑後川(上流干)	美濃	三五〇〇
筑後川(上流十)	伊後	三五〇〇
熊野川(上流十)	紀伊	三四〇〇

府縣	男	女	計
京都府	四五七、〇二七	四五七、三二一	九一四、三三八
神奈川縣	三七八、五八五	三七五、八六五	七五四、四五〇
埼玉縣	五七二、四九三	五七六、八二九	一一四九、三二二
千葉縣	六二六、九三三	六二一、〇一〇	一二四七、九四二
茨城縣	五五六、五三七	五四五、四三三	一一〇一、九七〇
栃木縣	三八〇、二三八	三七九、四六七	七五九、七〇五
群馬縣	三七三、〇五六	三七六、八六四	七四九、九二〇
長野縣	六一一、七二一	六〇〇、四六六	一二一二、一八七
山梨縣	二四五、一四六	二四五、九〇七	四九一、〇五三
静岡縣	五九四、〇八六	五七九、八三九	一一七三、九二五
愛知縣	七七七、八五一	七七九、二六八	一、五五七、一一九
三重縣	四九一、二〇三	四八五、六三五	九七六、八三八
岐阜縣	四九九、九六八	四八一、六三八	九八一、六〇六
滋賀縣	三四九、〇九二	三五三、五二五	七〇二、六一七
福井縣	三一五、四一五	三一七、一六三	六三二、五七八
石川縣	三八九、七三八	三九二、八〇八	七八二、五四六
富山縣	四〇〇、三二七	四〇〇、三二七	七八九、五二五
新潟縣	八九九、八〇三	八九七、八九二	一、七九七、六九五

大野川	豐後	三四〇〇
遊樂部川	豐後	三四〇〇
宮川	伊勢	三二〇八
長柄川	美濃	三三〇〇
九頭龍川	越前	三三〇〇
富士川	甲斐。駿河	三二〇〇
津山川 <small>(下流東大川)</small>	美作。備前	三二〇〇
三次川	備前	三二〇〇
五箇瀬川	日向	三〇〇〇
一瀬川	日向	三〇〇〇
利別川	後志	三〇〇〇
西別川	根室	三〇〇〇
常呂川	北見	三〇〇〇
揖斐川	美濃	三〇〇〇
天龍川	信濃	三〇〇〇
犀川	信濃	三〇〇〇
片品川	上野	三〇〇〇
鬼怒川	下野	三〇〇〇
那珂川	下野	三〇〇〇
渡良瀬川	下野	三〇〇〇
江合川	陸前	三〇〇〇

福島縣	五二一、〇〇二	五〇七、五二二	一、〇二八、五一四
宮城縣	四一六、七五六	四〇〇、三三五	八一七、〇九一
山形縣	四〇七、八八五	四〇〇、九五八	八〇八、八四三
秋田縣	三九三、七六五	三六一、二六二	七五五、〇二七
岩手縣	三六一、六三四	三三九、五九七	七〇一、二三一
青森縣	三〇四、三三〇	二八九、五五五	五九三、八八五
奈良縣	二六四、七六五	二六一、七六八	五二六、五三三
和歌山縣	三三八、〇九〇	三三八、一八五	六六六、二七五
兵庫縣	八二二、五六三	七九六、二二三	一、六一八、七八六
岡山縣	五七七、五九二	五三一、六四四	一、〇〇九、三三六
廣島縣	七二二、三二二	六八八、三七〇	一、四〇〇、六八二
山口縣	四八九、四九四	四七八、〇九九	九六七、五九三
島根縣	三六三、一一〇	三五〇、八六五	七二三、九八五
鳥取縣	二〇九、六一四	二〇四、七七七	四一四、三九一
徳島縣	三四七、四八一	三四一、三五九	六八八、八四〇
香川縣	三四八、九一八	三三六、九三〇	六八五、八四八
愛媛縣	四九四、二四五	四七八、六七二	九七二、九一七
高知縣	三一〇、二七二	二九〇、一〇七	六〇〇、三七九

御物川	羽後	三〇〇〇
大阿仁川	羽後	三〇〇〇
神通川	越中	三〇〇〇
和知川 <small>(下流由良川)</small>	丹波	三〇〇〇
紀伊川	紀伊	三〇〇〇
那賀川	阿波	二八一二
矢矧川	三河	二八〇〇
美々津川	日向	二八〇〇
利根川	上野	二八〇〇
大川 <small>(上流高橋川下流河瀬川)</small>	備前	二八〇〇
在田川	紀伊	二七二八
古座川	紀伊	二七二八
玉川	羽後	二七二八
阿武隈川	磐城。岩代	二七〇〇
新冠川	天鹽	二六〇〇
吉田川	安藝	二六〇〇
吉野川	阿波	二六〇〇
大丸川	日向	二五〇〇
大淀川	日向	二五〇〇
鳴瀬川	陸前	二五〇〇
馬淵川	陸奥	二五〇〇

我國の土地は。古來悉く皇室の御所有なりしかども。明治の初年改めて官有地、民有地の二種に分れたたり。其細別を表に作れば。

其六 土地 生業

長崎縣	三九七、五〇五	三九八、五四〇	七九六、〇四五
佐賀縣	三〇四、八一九	二九七、四〇一	六〇二、二三〇
福岡縣	六六四、二〇〇	六四九、八六九	一、三二四、〇六九
熊本縣	五五三、五三八	五五八、七三四	一、一一二、二七二
大分縣	四一三、四九四	四〇九、〇四八	八二二、五四二
宮崎縣	二二三、五七二	二一五、七九五	四三九、三六七
鹿児島縣	五三八、二四三	五三七、九五四	一、〇七六、四九六
沖繩縣	二二七、九〇七	二二二、九八二	四四〇、八八九
北海道	二六四、六七七	二四三、八一四	五〇八、四九一
總計	三、五五九、八〇〇	三、一四七、一七九	四二、七〇六、九七九

官有地

- 第一種 皇居、離宮、御陵、神社等の境地。
- 第二種 皇族邸地および官用地(府縣廳、裁判所等)。
- 第三種 山野、河湖、道路、公園等の民有地ならざるもの。
- 第四種 寺院、學校、病院等の民有地ならざるもの。

民有地

- 第一種 田、畑、宅地、山林、原野、鹽田、礦泉、池沼等。
- 第二種 郷社、墓地、道路等の官有地ならざるもの。

米代川	羽	後	二五〇〇
足羽川	越	前	二五〇〇
安宅川	紀	伊	二五〇〇
物部川	土	佐	二五〇〇
渡川	土	佐	二五〇〇

○本邦著名湖水一覽

湖水	國	名	周回里	丁
琵琶湖	近	江	七三三	一
霞ヶ浦	常陸	下總	三六〇	〇
サルマ湖	北	見	一八〇	〇
猪苗代湖	岩	代	一六二	一
中海	出	雲	一六一	一
八郎瀨	羽	後	一五〇	〇
北浦	常	陸	一五〇	〇
フウシレ沼	根	室	一五〇	〇
宍道湖	出	雲	一三〇	二
印幡沼	下	總	一一〇	〇
十和田湖	陸	奥	一〇〇	〇
小河原沼	陸	奥	一〇〇	〇
洞釜湖	勝	振	一〇〇	〇

而して官有地の内第一種と第四種とは無税。第二種と第三種とは通常無税なれども特に有税たる事あり。民有地の第一種は有税にして。第二種は無税なりとす。

面積の比例をいへば。官有地は全地面積の五分の三を占め。民有地は残り五分の二なり。而して我國民の生業中最も多數なる。農の作業地たるは田畑とは。民有地の半ばに滿たず。全地面積十分の一、七に當れり。但し臺灣は未だ此内に入らず。

我國は古來豐稔原産種の國と稱へ來り。農を以て國の基とせしかば。種々なる生業の内。最も多數を占むるは農業なり。農産物の重なるものは米麥にして。全國到る處に産せざるはなし。而して米の産出高最も多き地は。木曾川。筑後川沿岸の平野を第一とし。次は畿内山陽道、四國にして。質の最も良きは肥後と越中となり。臺灣にては一年二回の收穫を得。

麥は。關東八州に最も多く産し。山陽道、四國、九州等之に次ぐ。

米麥に次ぎて産出多き農産物は。豆、粟、黍、蕎麥、甘藷、馬鈴薯、蔬菜等にして。此外飲料とする茶。砂糖の原料たる甘蔗。衣服の原料たる綿、麻。染物の原料たる藍。養蠶に必要な桑等は。其寒暖の性に從ひて。至る處盛に栽培せり。

中禪寺湖	下	野	八〇〇
喜内沼	十	勝	八〇〇
瀧沼	常	陸	七〇〇
網走沼	北	見	七〇〇
支笏湖	勝	振	七〇〇
長部沼	勝	振	七〇〇
オンネトウ沼	根	室	七〇〇
鷹架沼	陸	奥	六二〇
河北瀨	加	賀	六二〇
十三瀨	陸	奥	六一八
牛久沼	常	陸	六〇六
品井沼	陸	前	五二四
池田湖	陸	前	四二九
加茂湖	佐	摩	四二三
諏訪湖	信	濃	四二〇
赤間沼	下	野	四〇〇
ノトロ沼	北	見	四〇〇
ワクトウ沼	十	勝	四〇〇
ユクウシ沼	十	勝	四〇〇

○本邦著名温泉一覽

農業に次ぐの生業は。林業、鑛業、牧畜業、漁業、製鹽業、工業、商業等なり。以下順次に説明せん。

農業者の田畑に作業する如く。林業者は山林に入りて木材、薪炭の原料を得るなり。我國山林の面積は。殆ど田畑の三倍に當り。到る處鬱鬱たる森林を見ざるはなけれども。最も有名なるは信濃の木曾にして。之に次ぐは奥羽地方、大和、紀伊の境なる諸山、越中の立山および九州の南部等なり。

我國は鑛山の數多きが故に。之が採掘の業に従事するものまた極めて多し。鑛物の重なるものは金、銀、銅、鐵、石炭、硫黃等にして。其産出高の最も多きは石炭なり。肥前の高島、筑後の三池、石狩の幌内等を著名なる産地とす。次は銅にして著名なる産地は下野の足尾、伊豫の別子等なり。其他金銀は。佐渡の相川、但馬の生野等に。硫黃は銚路の硫黃山に最も多く産す。産出の最も少きは鐵にして。外國より輸入し漸く國用を充たすなり。

我國の農家は。大抵戸毎に牛馬の何れかを飼養して。運搬、耕作の勞に役し。殊に近年牛肉、牛乳の需用益々増加するより。牧畜の業に従事するものいよ／＼多くなれり。牛は中國、九州に最も多く。馬は奥羽および九州の西南部を良種とす。

温泉	國名	泉質
東京寺	大和	流化水素硫酸鹽花
平野	攝津	明礬鹽氣
修善寺	伊豆	硫氣
靈泉寺	信濃	未だ詳ならず
有馬	攝津	鹽酸の氣
熱海	攝津	大湯は鹽酸、加田湯は硫酸、河原湯は硫酸、平左衛門湯は硫酸、大湯の四箇湯に分たる
湯本	相模	鐵氣
塔の澤	相模	朱砂鹽氣
河原	上野	硫黃丹礬
柳本	大和	鹽化硫酸鹽化鐵硫化水素
實塚	攝津	鹽氣
湯の山	伊勢	硫氣
湯村	甲斐	硫氣
伊豆山	伊豆	硫氣鐵氣
蓮臺寺	伊豆	藤原湯、及び上條湯は硫黃、鹽味あり。蓮臺湯は硫酸二氣、前湯は硫酸二氣に分たる
蘆の湯	相模	硫黃鹽鐵四氣
芝原	武藏	未だ詳ならず
鹿島	美濃	硫氣

我國の沿海は。また海産物に富むを以て。漁業に従事するもの多し。其最も漁獲多きは九州、中國、四國、東海道の海濱なり。されども我國は。斯業の發達未だ幼稚にして。僅に沿岸の小漁場のみ満足し。萬里遠征の大漁隊を作るの勇氣なく。北海の鰐虎、鰻轔鱒の如きも。空しく外國密獵船の奪ひ去る所となるは。遺憾の極ならずや。

製鹽業は近來益々隆盛に赴き。全國一年の産額六百五十萬石に達す。瀬戸内海の沿岸は最良の産地にして。香川、山口、兵庫、廣島の各縣れのく百萬石内外を製出す。

工業の隆盛は製造會社の數と比例すべきものなれば。製糸會社、織物會社の我國に最も多きは。やがて製糸、織物業の最も發達せる證なり。製糸業は東京、大坂、岡山等に盛にして。織物は京都、栃木、山梨等の府縣を最上とす。其他陶器、磁器、漆器、錫物、煉瓦、セメント、紙、油、酒、燐寸等の製造日を追ふて各國に盛なり。

維新前は交通機關の備はらざりしがため。商業は誠に振はざりしかども。海軍、海船の便一度開くるに及びて。斯業は急に盛運に向ひ。商業會議所、株式會社、保險會社、國立私立の銀行等年を追ふて増加し。外國貿易も之に従ひて愈々盛昌を極む。國內商業の中心

平湯	飛彈	泉味餘美
蒲田	飛彈	硫氣
白絲	信濃	硫黃石炭氣
野澤	信濃	硫磺二氣
堂ヶ島	相模	硫磺二氣
小河内	武藏	硫氣
湯島	常陸	硫氣
栗元	美濃	硫氣
大洞	飛彈	未だ詳ならず
大飼	信濃	硫氣
下諏訪	信濃	硫磺二氣
別所(五箇湯に分たる)	信濃	硫磺二氣
草津	上野	硫黃丹礬綠礬
上澤渡	上野	硫氣
入の湯	上野	硫氣
中禪寺	下野	硫氣
古町	下野	礬鹽氣
川治	下野	礬鹽氣
板室	下野	硫氣
板室	下野	硫氣
東山	岩代	礬氣
青根	陸前	礬氣

は關東に東京。關西に大坂なり。外國貿易の中心は横濱、神戸、長崎、新潟、函館いはゆる五港なりとす。

其七 交通

我國の道路は國道、縣道、里道の三つに分れたたり。國道とは。東京より伊勢大神宮並に各府縣廳、北海道廳、各開港場に通ずるもの。及び府、縣、道廳と師團本部との間に通ずるものをいひ。縣道とは。各府縣の間、師團と分營との間、および市街に通ずるものをいふ。里道とは各村落の間に通ずるものこれなり。

鐵道は明治五年初めて東京と横濱との間に敷設し。爾來漸次に増加して。今日はすでに本土の北端青森より西は三田尻まで通じ。西端馬關までは僅に十餘里を殘せるのみ。これまた年を賒えずして開通せられんとす。豈盛ならずや。九州は北端門司より南は八代に至り。北海道は小樽より室蘭に至りて。南北を貫通し。此等には多くの支線ありて。全國合計殆ど三千二百哩に及べり。僅々二十五六年間に三千哩の鐵道を敷設したるは。世界各國の驚嘆するところなり。

郵便は明治四年初めて東京、京都、大坂の三府間に開通せしものなるが。今日にては郵便局の數三千六百箇所に達し。全國如何なる山間

酸湯	陸奥 硫黄
下風呂	陸奥 硫黄
小野山	羽前 鹽氣
湯の谷	羽後 硫黄
粟津	加賀 硫黄
西鐘釣	越中 硫黄
湯澤	越後 鹽氣
岩室	越後 硫黄
板尾股	越後 味微酸を帯ぶ
三石	備前 未だ詳かならず
矢の村	備後 硫黄
湯の島	但馬 硫黄 <small>硫黄水素瓦斯所産硫黄 土及び石等</small>
三朝	伯耆 硫黄
玉造	出雲 未だ詳ならず
龍神	紀伊 鐵氣
道後	伊豫 硫黄
別役	土佐 硫黄
伊香保	上野 硫黄
荒湯	下野 硫黄
福渡戸	下野 鹽氣
那須湯	下野 硫黄

僻陬の地といへども。居ながらにして音信を通ずるを得るに至れり。また外國郵便物は。歐洲行のものは横濱、神戸、馬關、長崎より上海に送り。支那、朝鮮行のものは直ちに長崎より發送せらる。電信は明治二年初めて東京と横濱との間に架設し。それより次第に全國に及び。今日にては電信線の延長三千八百里に亘り。各國主要の市街に殆んど通せざる所なきに至れり。また海底電線は。本土と九州、本土と四國、本土と北海道、本土と佐渡。および九州と朝鮮、九州と臺灣との間に通じ。此外上海より長崎に來りて浦羅斯德に達したる線と。支那福州より臺灣に通じたる線とあり。電話は明治十八年初めて東京に架設し。今は東京と横濱との間。大阪と神戸との間。および其他大都會の市内に通せり。陸上交通の便は前の如し。海上の航路は如何。横濱は内外航路の中心となりて。東海沿岸の諸港はいふに及ばず。西は長崎、臺灣、朝鮮、支那の各港へ。東北は根室、千島、浦羅斯德へ。南はマニラ、サイゴン、爪哇、孟買、布哇等へ往復の汽船あり。此他外國船は悉く去來するを以て歐洲各國への渡航自在なり。關西に於ては神戸、大阪中心となり。東は横濱に至るまでの諸港。西は中國、四國、九州沿岸の各港を往復し。大に運漕の便を極む。神戸はまた横濱と

甲子	盤城 鹽鐵硫黄
盤梯	岩代 泉味甘酸
作並	陸前 金鑿二氣
川度	陸前 硫砂氣
酢川	陸中 金砂氣
新湯	陸中 金氣
切明	陸奥 綠鹽氣
湯田	陸奥 硫氣
田川	羽前 鹽氣
田澤	羽後 鹽氣
和倉	能登 硫鹽二氣
西仙人	越中 硫鹽二氣
出湯	越後 硫鹽
關山	越後 硫鹽二氣
湯原	美作 鹽硫二氣
上熊谷	備中 未だ詳ならず
吉和	安藝 未だ詳ならず
湯村	但馬 硫氣
湯の關	伯耆 硫氣
三澤	出雲 硫氣
川湯	紀伊 硫氣

其八 政體 政治

同じく。出入する外國船の煙絶ゆる事なし。上には萬世一系の天皇を戴き。下には忠實勇武なる四千萬の臣民あり。君臣の關係父子の如く。一國の狀態一家の如き我日本國は。明治二十二年 今上天皇親しく憲法を制定し給ひ。東洋唯一の立憲君主國とはなれり。即ち天皇は一國の統治權を總攬し給ひ。行政の事務は國務大臣補弼の任に當り。立法および財政は帝國議會之を協賛し。司法權は 天皇陛下の御名に於て裁判所之を行ふ。行政事務の中樞なる内閣は。内閣總理大臣および其他の國務大臣を以て組織す。而して其下に外務、内務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、逓信の九省あり。大臣すなはち各省の長官たり。別に宮内省ありて宮内大臣を長官とす。樞密院は 天皇陛下の諮詢に應へ奉る顧問府なり。地方は。行政上區劃を立て、臺灣、北海道および三府四十三縣とし。臺灣には總督、北海道には長官、各府縣には知事を置きて。其管内を統轄せしむ。而して北海道と各府縣は更に市、郡、町、村に細別して。各長官之が行政を掌る。別にまた府縣會あり。自治制を布ける市、郡、町、村には市、郡、町、村會ありて。公共の事務を商議

湯の谷	伊豫	硫氣
圓行寺	土佐	硫氣
湯町	筑前	硫氣
濱脇	豊後	未だ詳ならず
柄崎	肥前	炭酸鹽及びボツタ ス食鹽ソロリン等
石村	肥後	硫酸氣
高原	日向	鹽二氣
殿湯	大隅	湯性溫和にして虚弱 の人に効あり
湯河内	薩摩	鹽
妻山	渡島	硫水素
大山谷湯	石狩	硫水素少量
湯の平	豊後	硫二氣
湯野	豊後	未だ詳らかならず 冷温相應じて百病を 治すと云
山鹿	肥後	硫酸氣
地獄	肥後	鹽氣
鹽浸	大隅	鹽氣
硫黄谷	大隅	硫氣
摺濱	薩摩	鹽氣
雷電	後志	硫水素
登別	膽振	硫氣

す。臺灣は我版圖に入りてより日尙淺く。風俗習慣大に内地と異なるを以て。特別の政治を行ひ。總督は天皇陛下の親任によつて。大權の一部を取り行ふ。

帝國議會は貴族院と衆議院との二つに分たる。いはゆる兩院院制度なり。而して貴族院は。皇族、華族および勅撰せられたる議員と多額納税者より互撰したる議員とより成り。衆議院は。各府縣に於て公撰せられたる議員より成る。議員の数は兩院各々三百人を限りとす。すべての法律は皆此兩院の協賛を要するなり。故に内閣を行政部と呼ぶに對して帝國議會を立法部といふ。

行政部立法部に對して。臣民の權利を擔保するを司法部といふ。司法部には四等の段階ありて。最高なるを大審院といひ。控訴院、地方裁判所、區裁判所これに次ぐ。故に區裁判所の判決に不服なるものは更に地方裁判所に控訴し。地方裁判所の判決に尙不服なるものは。又更に控訴院の判決を乞ひ。此の如くにして大審院に至り。以て終審とす。又別に行政裁判所ありて。行政官廳の違法處分に關する訴訟を審判す。

其九 教育 宗教

維新以來教育の道は著しく進歩し。全國至る處に必ず小學校の設

○本邦著名瀑布

瀑布	國名	高さ
千刃瀧	加賀	二〇〇丈
岩井瀧	美作	一八〇
中の瀧	大和	一五〇
石狩瀧二條	石狩	一五〇
高瀧	伊豫	一三〇
横谷の瀧	飛騨	一二〇
布引瀧	越後	一二〇
大瀧	越後	九六
布引瀧	伊勢	九〇
米子瀧二條	信濃	六〇
那智瀧	紀伊	八四
不動瀧	越後	七五
大瀧	越後	七〇
布引瀧	丹後	六六
鷄鳴瀧	羽後	六五
那智瀧	備後	六五
布引瀧	羽前	六三
千丈瀧	筑前	六〇

あるに至れり。現今學制の主要をいへば。子女滿六歳より十四歳に至る間を學齡兒童といひ。其保護者たるものは之をして必ず就學せしめ。尋常小學校四箇年の課程を卒へしむるの義務を有す。而して疾病其他やむを得ざる理由あるにあらざれば。不就學又は半途退學することを許さず。而して其就學と不就學との割合は。年を追ひて漸次に増加し。今日にては全國の平均學齡兒童百分の六十五餘は就學するに至れり。かくしつゝ百分の七十に及び。八十九十に及び。全國を通じて義務教育を受けざるの民なからしめん事を願はしけれ。

さて尋常小學校の義務教育を卒へ。餘力あるものは更に高等小學校に入る。而して更に進んで中等教育を受けんとするものゝために。各府縣一箇乃至數箇の尋常中學校の設あり。尋常中學校の上には高等學校ありて。専門の學術を修めしめ。或は進んで大學に入るものゝ豫備をなさしむ。大學は學術の淵奥を考究する最高の學校にして。其卒業者の更に一事物に就きて研究せんとするものゝために。更に大學院の設あり。

また實業に従事せんとするものゝためには。商業學校、高等商業學校、工業學校、商船學校等の設あり。小學校の教員を養成せんため

大瀨	越後	六〇
不動瀨	紀伊	六〇
百間瀨	大和	六〇
三重瀨	伊勢	五〇
風折瀨	伊勢	五〇
不動瀨	遠江	五〇
大連瀨	武藏	五〇
逆巻瀨	信濃	五〇
百間瀨	上野	五〇
銚子瀨	羽後	五〇
檜山瀨	羽後	五〇
白糸瀨	越後	五〇
直津瀨	越後	五〇
千尋瀨	因幡	五〇
横瀨		
函館		

○本邦開港場一覽

函館	新瀉	越後
大阪	長崎	肥前
横濱	神戸	攝津
大坂	長崎	肥前
函館	新瀉	越後

には師範學校あり。師範學校、尋常中學校の教員を養成せんために高等師範學校あり。女子中等教育には女學校、高等女學校あり。其教員を養成するためには師範學校、女子高等師範學校あり。其他學習院、美術學校、音樂學校、盲啞學校および各種の專門學校等一々列擧するに遑あらず。

教育の進歩と共に書籍、新聞、雜誌等の出版事業盛なるべきはいふを俟たず。現今圖書の發行せらるゝもの一年數萬部に及び。定時刊行の新聞雜誌殆ど八百種に達するは。國家のため慶賀すべきなり。學校以外に於て人の徳性を涵養し。道義心を堅固ならしむるは。宗教の力與つて少きにあらず。我國上古は宗教と稱すべきものなく。唯祖宗の威靈、古今の偉人を尊敬するため。神社を設けて祭祀するのみなりしが。欽明天皇の朝佛教渡來して。過去現在未來の三世を説き。因果應報の理を述ぶるに及びて。宗教といふもの初めて我民心に生じたり。後佛教は更に天台、眞言、淨土、日蓮、眞宗、禪宗等の數宗に分れ。謂はゆる神道なるもの説き出だされたり。近世に至りて耶穌教また歐米各國より入り來り。共に並び行はる。

其十 軍備

下ノ關	長門	博多	筑前
嚴原	對馬	佐須奈	對馬
四日市	伊勢	三角	肥後
口の津	肥前	室蘭	肥後
小樽	後志	門司	豊前
下の關	長門	伏木	越中
唐津	肥前	銅路	越中
博多	筑前	教賀	越前
境	伯耆	濱田	石見
官津	丹波		

○土地及屬島數一覽

本州	一六六・五
四州	七四・五
九州	一五〇・〇
北海道	一三〇・〇
千島(三十二島)	一

弱肉強食の世界に立ちて。國の安寧幸福を増進せしめんには。必ず軍備の助なるべからず。我帝國の陸海軍は大元帥陛下親しく之を統御し給ひ。全國皆兵の制にして。即ち帝國臣民の男子たるものは。滿十七歳より四十歳まで悉く兵役に服するの義務を有す。而して兵役を三種に分ち。常備兵、後備兵、および國民兵とし。常備兵は更に分ちて現役と豫備との二つとす。現役は滿二十歳に達したる壯丁を徵集して之に服せしむ。年限は陸軍三年海軍四年なり。現役を終りたるものは更に豫備役に服す。其年限陸軍は四年海軍は三年なり。現役豫備役の常備兵役を終れば。更に後備兵役に服す。其年限は陸海軍とも五年間なり。十七歳より四十歳までの男子にして。常備、後備の兵役に服せざるものは。すべて國民兵役に服する法なり。國民兵は常時に於て服役せざれども。戰時危急の場合に臨みて徵集に應ずるものとす。

帝國陸軍の編制は近衛および十二師團にして。之を全國十三の師管區に配置す。其區域並に師團司令部所在地は左の如し。

師團	司令部所在地	師管區
第一師團	東京	東京府五區三郡、埼玉縣六郡、栃木縣、茨城縣、千葉縣
第二師團	東京	東京府十區六郡、豆南諸島、神奈川縣、山梨縣、群馬縣、埼玉縣十二郡、長野縣

地方	本籍人口		合計
	男	女	
東京	737,991	730,663	1,468,654
神奈川	578,888	575,865	1,154,753
埼玉	572,993	576,829	1,149,822
千葉	626,933	621,010	1,247,943
茨城	556,637	549,433	1,106,070
栃木	530,238	539,946	1,070,184
群馬	611,721	600,666	1,212,387
長野	599,086	595,907	1,194,993
山梨	599,086	595,907	1,194,993
静岡	599,086	595,907	1,194,993
愛知	777,681	779,268	1,556,949
總計	7,631,481	7,630,998	15,262,479

○本籍人口 明治二十九年末日 調査

せ来り。遂に徳川氏の鎖國主義を一變して。開國主義と化せしめたり。すでにして徳川幕府の王政復古するに及び。開國進取を以て國是と定め給ひしより。廣く世界の列國來りて交際を結ぶもの多し。今日にては條約國の數すべて二十あり。左の如し。

佛蘭西 北米合衆國 和蘭 葡萄牙
 瑞西 白耳義 丁抹 伊太利
 日耳曼 澳太利 西班牙 瑞典、那威
 布陸支 那露西亞 秘露
 朝鮮 暹羅 墨西哥 英吉利

而して此等諸國との條約は。大抵開國の初に取り結ぶたるもの多し。彼に利にして我に不利なる事甚しければとて。條約改正の議論朝野に喧しくなり來り。漸く兩三年前に成功して。明治三十二年七月より改正の條約を實施する事とはなりぬ。それと同時に外國人の内地に雜居する事も許されんとするに至れり。

以上の條約國へは。かのく公使、領事と派遣して。其國に對する一切の交渉事務を司らしめ。兼ねて彼我の交際と親密ならしむ。各國もまた同じく。公使領事を送りて我國に駐在せしめつゝあり。

第一編 畿内

畿内は。山城、大和、河内、和泉、攝津の五箇國より成る。よりて一に五畿内とも云へり。畿内の文字。一に「うちづく」とも訓じ。古へ帝都のありし近國を指したる稱に起れるなり。本土中央部より西南の方にありて。京都、大阪の二府および兵庫、奈良、二縣に管轄せらる。

東北は。鈴鹿山脈に添ひて。東海道の伊賀伊勢の兩國に境せられ。引きて比叡山脈により東山道の近江に接す。

南方の一帶は。南海道の紀伊にして。西北は山陰道の丹波、山陽道の播磨、兩國と相連なる。

地勢をいへば。西方の一面は弓の形して大阪灣を成し。東西は短くして南北は稍長し。

又東南北の三面は悉く山脈に包まれ。中にも大和の南部と攝津の北部とは。諸山群峰或は高く或は低く。その様頗る峻し。

和泉と攝津との二箇國は。廣く大阪灣を抱きて遠く淡路島を望み。淀川沿岸の地と大阪灣を圍める地とは。大方平坦にして地味肥えたり。

地方	本籍人口	合計
三重	491,203	976,838
岐阜	499,968	981,606
滋賀	349,093	702,617
福井	315,412	631,278
石川	389,738	782,546
富山	400,337	809,674
新潟	522,003	1,044,006
福島	416,756	833,512
宮城	407,888	815,776
山形	395,768	791,536
秋田	361,634	723,268
岩手	361,634	723,268
青森	361,634	723,268
京都	600,000	1,200,000
大坂	600,000	1,200,000
奈良	264,768	529,536
和歌山	264,768	529,536
兵庫	338,090	676,180
岡山	823,565	1,647,130
広島	777,681	1,555,362
山口	777,681	1,555,362

地方	面積	現住戸数	人口
東京	一、三三〇・〇〇	四、〇〇〇・〇〇〇	一、九〇七・一七〇
神奈川	一、五五五・六七	一、四四〇・七七六	八五三・二八三
埼玉	三、三六九・九九	一、七六八・〇〇〇	一、一四七・七三三
千葉	三、三三六・一五	二、一〇七・七九	一、三三九・六六〇
茨城	三、八五一・一八	一、八〇〇・四七四	一、一〇一・五五〇
栃木	四、一〇七・七	二、〇三三・九	七八一・八六四
群馬	四、〇七二・五	一、五三二・〇七	七九七・八七〇
長野	八、三三三・七六	三、二八六・〇三	一、三三三・一三三
山梨	二、八二九・八五	八三二・五九	四八九・四二二
静岡	三、〇三三・八二	二、〇七五・五五	一、一六二・六三三
愛知	三、三三三・七	三、三三〇・八七二	一、五七五・三三〇
三重	三、六八八・五五	一、七六八・七	九六三・六六八
滋賀	六、七〇一・四	一、八一三・三	九六〇・五〇二
福井	二、五八八・四四	一、三三三・六	六八七・七三
石川	二、七二二・四〇	一、一六三・三六	六二九・二七三
富山	二、七〇七・二	一、四三三・八四	七五五・七三四
新潟	二、六六・四一	一、四七二・一九六	七六二・八九二
福島	八、二四・五九	二、九〇・三九八	一、七三六・四五六
宮城	八、四六・〇七	一、五七・六七〇	一、〇四一・二九四
山形	五、四〇・七九	一、三〇・〇七〇	八三三・三三
秋田	六、〇〇・二五	一、一八・七三三	八〇〇・六三三
北海道	七、五四・〇〇	一、二四・二七四	七四八・三三
北陸	三、三三三・三	三、三三三・三	一、三三三・三
近畿	三、三三三・三	三、三三三・三	一、三三三・三
中国	三、三三三・三	三、三三三・三	一、三三三・三
四国	三、三三三・三	三、三三三・三	一、三三三・三
九州	三、三三三・三	三、三三三・三	一、三三三・三

○面積及び現住戸数人口

氣候は。海に沿ひたる處をほかた暖く。殊に攝津の須磨、明石、舞子の邊。冬も療養に行く人多し。然れども。山間に入りたる土地は夏甚だ暑くして冬甚だ寒く。比叡山より吹きおろす嵐の烈しく寒き事は人の知る處にして。名づけて比叡嵐といへり。大和の吉野山中も冬すてふる寒き土地とす。

人口は。およそ二百九十六萬餘あり。人家稠密のところ多く。従つて水陸諸種の運搬融通。また甚だ便利にして。陸には汽車の往來するもの十二線の多きに達せり。

其一は東海道より來りて。山城を經。攝津に入り。神戸に至りて止むもの。其二は神戸に起りて山陽道に走るもの。其三は大坂市内を梅田より淡路に至れるもの。其四は同じく梅田より安治川に至れるもの。其五は大坂より和泉に至り。將に紀伊に走らんとするもの。其六は大坂より大和の關井。および奈良に至れるもの。其七は大和の高田より五條に至れるもの。其八は紀伊の橋本より來りて大和の五條に至れるもの。其九は攝津の寶塚より尼崎に至れるもの。其十は京都より大和の奈良に至れるもの。其十一は京都市内より嵯峨に至れるもの。其十二は攝津の片町より河内の長尾に至れるもの。其十三は河内の富田林より柏原に至れるものこれなり。いかに盛なるものならずや。

第一章 山城

山城の國は。畿内の東北隅に在り。面積およそ七十三方里餘。これを。京都市。および。高野郡。豐後郡。乙訓郡。紀伊郡。宇治郡。久世郡。綴喜郡。相樂郡の一市八郡に分つ。

此地。古へは大和の都より山の背面に當れりて。山うしろの「う」音を略して「やましろ」と稱へ。山背の文字を書きたりしが。桓武天皇の延暦十三年。都を今の京都の地に定め給ひしより。勅して山城の文字に改め給へるは。山河襟帯自然に。城郭を爲すの地勢によりて。かのちから合はたるめだき文字を撰び給ひしなり。此時また。京都を名づけて。平安京と稱し給ひぬ。

東は近江に接し。北は丹波に連なり。西は丹波と攝津とに隣し。南は伊賀、大和、河内の三國を受けたり。而して其河内に接する西南

地方	面積	現住戸数	人口
神奈川	一、五五五・六七	一、四四〇・七七六	八五三・二八三
埼玉	三、三六九・九九	一、七六八・〇〇〇	一、一四七・七三三
千葉	三、三三六・一五	二、一〇七・七九	一、三三九・六六〇
茨城	三、八五一・一八	一、八〇〇・四七四	一、一〇一・五五〇
栃木	四、一〇七・七	二、〇三三・九	七八一・八六四
群馬	四、〇七二・五	一、五三二・〇七	七九七・八七〇
長野	八、三三三・七六	三、二八六・〇三	一、三三三・一三三
山梨	二、八二九・八五	八三二・五九	四八九・四二二
静岡	三、〇三三・八二	二、〇七五・五五	一、一六二・六三三
愛知	三、三三三・七	三、三三〇・八七二	一、五七五・三三〇
三重	三、六八八・五五	一、七六八・七	九六三・六六八
滋賀	六、七〇一・四	一、八一三・三	九六〇・五〇二
福井	二、五八八・四四	一、三三三・六	六八七・七三
石川	二、七二二・四〇	一、一六三・三六	六二九・二七三
富山	二、七〇七・二	一、四三三・八四	七五五・七三四
新潟	二、六六・四一	一、四七二・一九六	七六二・八九二
福島	八、二四・五九	二、九〇・三九八	一、七三六・四五六
宮城	八、四六・〇七	一、五七・六七〇	一、〇四一・二九四
山形	五、四〇・七九	一、三〇・〇七〇	八三三・三三
秋田	六、〇〇・二五	一、一八・七三三	八〇〇・六三三
北海道	七、五四・〇〇	一、二四・二七四	七四八・三三

大分	熊本	福岡	佐賀	長崎	高知	愛媛	香川	徳島	鳥取	島根	山口	廣島	岡山	兵庫	和歌山	奈良	大阪	京都	青森	岩手
分	本	岡	賀	崎	知	媛	川	島	取	根	口	島	山	山	庫	真	阪	都	森	手
三〇、七〇三	四六、五〇七	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一	一〇〇、七〇一

の地を除きては。山もて塞がれぬは無く。峰もて塙せられざるは無し。その東方に峙ちて近江の國に跨れるは。比叡山なり。海面を抜く事二千七百餘尺。桓武天皇。傳教大師をして。一大寺を山上に建て。皇都の鎮護たらしめ給ひしは。即ち此山なり。山中に三塔あり。其一を東塔といひ。其二を西塔といひ。其三を横川といふ。源義經の家臣辨慶の。西塔の武藏坊と名のれるは。始め西塔の下に住みたる僧なりしが故なり。

比叡山につらきて。屏風の如く。北方より西方に立ち廻れるは。大慈、鞍馬、愛宕の三山なり。鞍馬には毘沙門天を祭れる寺ありて。鞍馬寺といふ。義經の幼時。倉那王といへりし頃。稚兒となりて修行せしは此寺なりき。中にも高きは愛宕にて。三千尺に達し。峰には。伊弉册尊、火産靈命を祭れる社あり。

近江の琵琶湖より來りて。宇治の地を過ぐる水を。宇治川といひ。それより桂川と木津川とを合せつゝ。名を淀川と改めて。遂に攝津に入る。其上流は近江の瀬田川にして。下流は攝津の安治川と木津川とに分るゝもの是なり。伏見より發して大阪に至る大小の船舶は。皆この川によりて進まざるは無し。淀の川瀬の水車」と。小見の

宮崎	鹿兒島	沖繩	北海道	總計
四八、七三三	六〇、三三二	一五、六九一	六、〇九五	一三〇、八〇一
八五、一九九	二〇、六三六	八八、二五三	一四、九一〇	二四〇、〇〇〇
一〇九、一八三	一〇、六九七	一〇〇、二六三	六、九八一	二二七、〇〇〇

○族籍男女別人口 (明治二十九年末日調査)

華族	士族	平民	合計
一、四八二	二、二二二	四、三七五	六、八八〇
四〇四、六三八	二九、〇八九	六三八、二八三	九六五、九八七
二、〇六七	九、九七七	二、〇六七	九、九七七

限にも歌ふなるは。昔し此川に作り掛けられたるものなりけり。桂川は。丹波の保津川の下流にして。山城に入りて大堰川と名のり。京都市の西を流れて。更に桂川と稱へ。遂に加茂川を合せて淀川に注ぐ。加茂川は。鞍馬山の麓なる貴船山附近の地より出で。京都市を過ぎ。南方に走りて桂川に流れ入る。木津川は。伊賀と大和との間より來れる水なり。

山城は。千有餘年間。皇居のありたる地なりしが故に。御歴代の山陵ごとくに多し。今詳かに之を數ふれば。紀伊郡の内に。桓武、仁明、白河、鳥羽、近衛、仲恭、後深草、伏見、後伏見、崇光十帝の御あり。宇治郡の内に。天智、陽成、醍醐、朱雀、冷泉、後一條、後白河、六條、高倉、後鳥羽、順徳、後二條、花園、光明十四帝の御あり。京都東山泉涌寺の後山に。後堀河、四條、後光嚴、後圓融、後小松、稱光、後土御門、後柏原、正親町、後陽成、後水尾、明正、後光明、後西院、靈元、中御門、櫻町、桃園、後櫻町、後桃園、光格、仁孝、東山、孝明二十四帝の御あり。葛野郡の内に。淳仁、嵯峨、文徳、清和、光孝、宇多、村上、圓融、花山、一條、三條、後朱雀、後冷泉、後三條、堀河、崇徳、二條、龜山、後宇多、後嵯峨、後龜山二十二帝の御あり。乙訓郡の内に。淳和、土御門、二帝の御あり。京都は。山城の中央に位して。加茂川その東を流れ。桂

平	民		合	計	無籍人	合	計	家	合	計	戸	主	合	計
	男	女												
	七、四三三、九七四	五七四、五四〇												
	一三、〇七八、七七九	一九、五四三、四八八												
	四〇、六三〇、七八一													
	一、九六四	一、八六二												
	一、二八五													
	一、二二三	六二												
	一、二八五													
	二一、五六一、〇三三	二一、一四七、二四一												
	二一、三四五、七五〇	二〇、九二四、八七〇												
	四二、七〇八、二六四													
	二一、一二二、八九九	二〇、九〇六、四六五												
	四一、八二三、二一五													
	二〇、九〇六、四六五	二〇、四八一、八四八												
	四一、三八八、三二三													
	二〇、七五二、三六六	二〇、三三七、五七四												
	四一、〇八九、九四〇													
	二〇、五六三、四一六	二〇、一五五、二六一												
	四〇、七一八、六七七													

川(上流は大堰川)その西を流る。加茂川を隔て打ち向はるは、「蒲園きて寐たる姿や東山」と吟せられたる東山にして。比叡山の麓に屬し。桂川のかたに眺め渡さるは、馬の鬣に似たりと形容せらる。西山にして。愛宕山の麓に屬す。かの有名なる。祇園、清水、智恩院、黒谷、眞如堂、銀閣寺等の神社佛閣は。皆東山の内に含まれ。春の花秋の紅葉とて。もてはやさる。嵐山、高雄山は共に西山の内に含まれたり。而して北は何くぞ。鞍馬山その代表者と爲りて。北山の名の下に稱へらる。

京都は。古へ平安城と稱へられし以來。今上陛下の東京に遷らせ給ひしまで。一千七十五年間。都となりたる土地にて。實に我國文教百工の主府たりし事は。人の知るところなり。府縣の制を定められしより。京都府を置かるも此地にして。また市制により。京都市を置かるも。謂はゆる京都の町なるがかし。東京の出で來たる後は。これに對して。一名を西京とも呼ぶ。

顧みれば千五百年の昔。桓武天皇の始めて此地に都を敷かせ給ひし時は。其規模すこぶる壯大にして。東西三十二町。南北三十八町。東西におのく京極あり。中央に朱雀大路あり。東を以て左京とし。三十坊ありて左京職これを司り。西を以て右京とし。三十坊ありて右京職これを司る。南北にわたりて九條の通あり。一條より二條に至るまで相距ること十町。二條より九條に至るまで相距ること各四町。皇居は一條と二條との間にあり。東西京極距ること各十二町。その廣さ。東西八町。南北十町。皇居の東西に各四門。南北に各三門あり。東なるを都門、待賢門、陽明門、上東門といひ。北なるを達智門、偉門、安嘉門といひ。西なるを上西門、殷富門、藻門、醜門といひ。南なるを皇嘉門、朱雀門、美福門といふ。而して。朱雀門は其正門として直に大路に向ひ。二條より九條までの通と朱雀大路と稱す。大路の廣さ二十八丈。城門坊毎に。垣あり門ありて整然亂れずといへり。以て如何に平安城の盛大なりしかを。想像するに足るべし。

かくの如く。始は京都の町を。左京右京に分ちしが。後三條通を中央にして。それより北部と上京とし。南部を下京と稱へたり。今京都市を。上京區下京區の二區に分てるは。即ち此古稱によれるなり。又時として。京都の町内を洛内と稱へ。町外を洛外と稱ふることもあり。

京都市内の人口およそ三十四萬。道筋の正しくして基磐の目の如くなるは。古より今に至るまで替る事なし。市街の北部には。舊内裏

都	邑	現住人口	明治廿七年		明治廿六年		明治廿五年		明治廿四年	
			男	女	男	女	男	女	男	女
東京(武藏國)市		一、二九九、九四一	二一、一二二、八九九	二〇、九〇六、四六五	二〇、四八一、八四八	二〇、三三七、五七四	二〇、一五五、二六一	二〇、五六三、四一六	二〇、一五五、二六一	
大坂(攝津國)市		五〇三、六九〇	二〇、九二四、八七〇	二〇、四八一、八四八	二〇、三三七、五七四	二〇、一五五、二六一	二〇、五六三、四一六	二〇、一五五、二六一	二〇、一五五、二六一	
京都(山城國)市		三四一、一〇一	四二、七〇八、二六四	四一、三八八、三二三	四一、〇八九、九四〇	四〇、七一八、六七七	四〇、七一八、六七七	四〇、七一八、六七七	四〇、七一八、六七七	
合	計		二一、一二二、八九九	二〇、九〇六、四六五	二〇、四八一、八四八	二〇、三三七、五七四	二〇、一五五、二六一	二〇、五六三、四一六	二〇、一五五、二六一	
合	計		二〇、九〇六、四六五	二〇、四八一、八四八	二〇、三三七、五七四	二〇、一五五、二六一	二〇、五六三、四一六	二〇、一五五、二六一	二〇、一五五、二六一	
合	計		四一、八二三、二一五	四一、〇八九、九四〇	四〇、七一八、六七七	四〇、七一八、六七七	四〇、七一八、六七七	四〇、七一八、六七七	四〇、七一八、六七七	

○人口壹萬以上都邑
(明治二十九年末日調査)

棄兒は滿十三年以下にして。人の養子女とならざる者のみを掲ぐ。

人口壹萬以上都邑

山 城

名古屋(尾張國)市	二四二、〇八五
神戸(攝津國)市	一八四、一九四
横濱(武藏國)市	一七九、五〇二
廣島(安藝國)市	一〇七、六八五
金澤(加賀國)市	八五、九一六
仙臺(陸前國)市	七七、四七六
長崎(肥前國)市	七二、三九〇
函館(渡島國)市	七〇、八三一
福岡(筑前國)市	六二、二二二
徳島(阿波國)市	六一、四八九
富山(越中國)市	五八、九七五
和歌山(紀伊國)市	五七、三六六
岡山(備前國)市	五七、二一〇
熊本(肥後國)市	五六、八二四
鹿児島(薩摩國)市	五三、八九五
新潟(越後國)市	五一、三三五
堺(和泉國)市	四九、〇六三
福井(越前國)市	四四、二九〇
静岡(駿河國)市	三九、九五〇
赤間關(長門國)市	三六、五七〇
宇都宮(下野國)市	三六、四三八

あり。今なほ皇居として保存せらる。その外郭は。寺町通を東にして。烏丸通を西にし。南は丸太町に墾して。北には今出川を帯びたり。面積二十五萬餘坪。御苑を繞る稍の色まで。仰ぎ見る人をして悉くも懐舊の情に堪へざらしむ。

また二條堀川の西岸に臨みて峙てる二條離宮は。もと二條の御城と稱へ。永祿十二年。織田信長の築きたるものなりしが。其のち明智光秀の亂に焼かれ。徳川家康あた、び之を造り。遂に現今に傳へて。悉くも離宮となるの榮を蒙れりき。その壯觀の如何に京都市を裝ふものあるかは。就いて仰ぎ見たる人の知る處ならん。

その他。官廳學校等には。京都府廳より。京都帝國大學あり。第三高等學校あり。同志社大學あり。帝國京都博物館あり。

京都市内および京都近郊の著名なる神社には。京都に都し給ひし頃の。皇室の御産土神として。加茂川の川上に宮居し給ふところの上加茂神社。および下加茂神社。境内の夜櫻を以て知られたる平野神社。伏見にて名高き稻荷神社。西山なる松尾神社。南のかた京都を距る四里二十五町の山上に鎮座して。源家の祖神と仰がれ給ふ男山八幡宮。以上は官幣大社の社格を有し。維新前には祇園と呼ばれ給ひし八坂神社。菅原道真を祭れる北野神社。および吉田、貴船、大原

甲府(甲斐國)市	三五、七三八
高知(土佐國)市	三五、四七〇
松江(出雲國)市	三四、六二五
大津(近江國)市	三四、五五六
松山(伊豫國)市	三四、五三五
高松(讃岐國)市	三四、二七四
那覇(琉球國)區	三四、一一七
札幌(石狩國)區	三三、九八七
長野(信濃國)町	三三、一四一
山形(羽前國)市	三三、一五一
水戸(常陸國)市	三二、〇六四
盛岡(陸中國)市	三一、九八九
弘前(陸奥國)市	三一、二九五
姫路(播磨國)市	三一、一八二
岐阜(美濃國)市	三一、〇七五
前橋(上野國)市	三〇、八八三
高岡(越中國)市	三〇、八四六
津(伊勢國)市	三〇、七四八
松本(信濃國)市	三〇、一三〇
佐賀(肥前國)市	二九、八九三
高崎(上野國)町	二九、八四五

野の諸神社は官幣中社たり。なほ他に別格官幣社として著るしきは。和氣清麿を祭れる護王神社。織田信長を祭れる建勳神社。豊臣秀吉を祭れる豊國神社あり。是等を始として。御歴代皇室の尊崇し給ひし大小の神社。ことごとく數ふるに追めらす。

佛閣にては。光孝天皇の御創建にて御代々法親王の住ませ給ひし萬野郡の仁和寺。(一に御室とも稱す)。坂上田村麿の建立にかゝる東山の清水寺。源三位頼政の討死と共に名を知られし宇治の平等院。足利將軍義滿の金を鑿めて作りたる北山の金閣寺。同じく義政の銀を鑿めて作りたる東山の銀閣寺。近世御歴代山陵の置かせる、東山の泉涌寺。および、東寺、高臺寺、智恩院、南禅寺、妙心寺、誓願寺。謂はゆる京都の五山。すなはち。天龍寺、相國寺、建仁寺、東福寺、萬壽寺。さては嵯峨の清凉寺。太秦の廣隆寺。鞍馬の鞍馬寺。醍醐の醍醐寺。宇治の黄檗山。東西本願寺などいと多し。

人は曰ふ。日本は世界の公園なりと。而して又曰ふ。京都は日本の公園なりと。知るべし風景に富むの地なる事と。たゞに風景に富むのみならず。山として川として神社として佛閣として。最も趣味的なる歴史を物語らざるは無きを。

人情は。概して古風を守る方にて進取の氣慨少く。服装容貌を飾

奈良(大和國)町	二九、七〇九
米澤(羽前國)市	二九、六七七
難波(攝津國)村	二八、五九〇
鳥取(因幡國)市	二八、二九四
久留米(筑後國)市	二七、四五七
千葉(下總國)町	二七、二八三
秋田(羽後國)市	二七、一一四
宇治山田(伊勢國)町	二六、七八五
八王子(武藏國)町	二六、四四六
天王寺(攝津國)村	二六、〇二二
谷山(薩摩國)村	二四、九二六
首里(琉球國)區	二四、九二二
横須賀(相模國)町	二四、七九五
若松(岩代國)町	二四、七九二
佐世保(肥前國)村	二四、六五七
青森(陸奥國)町	二四、二二二
上田(信濃國)町	二二、四二二
栃木(下野國)町	二二、九五四
門司(豐前國)町	二二、七七八
四日市(伊勢國)町	二二、六一一
酒田(羽後國)町	二二、五七六

るに長じて。食物に吝なる傾あり。風俗の優美雅致に富めるは。以て謂はゆる美術國に適せしむ。従つて美術的工藝また大に其長所たり。

市街の南端。七條といふ處に停車場あり。東海道線、奈良線、嵯峨線の瀟車に乗るを得べし。東京市へは十五時間。大坂市へは一時間にて行かるゝなり。

市街を南に距ること三里にして伏見あり。淀川その南を流れ。大坂と奈良とに通ずる要路に當れり。稻荷神社の鳥居前に停車場あり。稻荷停車場と呼ぶ。

山城の物産にて著名なるは。

- 西陳織 縫箔 友禪染 金銀箔 清水焼
- 京紅 京白粉 京人形 伏見人形 京扇
- 砥石 石材 宇治の菊 稻荷山の松茸
- 加茂川の鶯不知

などの類なり。

第二章 大和

大和の國は。畿内の南方に位し。面積およそ二百万里餘。ほとんど

明石(播磨國)町	二二、四三七
額田(薩摩國)村	二二、三〇四
尾道(備後國)町	二〇、四〇〇
鶴岡(羽後國)町	二〇、三五一
東南方(薩摩國)村	二〇、二九六
桐生(上野國)町	二〇、〇二三
熱田(尾張國)町	二〇、〇一〇
高田(越後國)町	一九、九二一
桑名(伊勢國)町	一九、七一一
彦根(近江國)町	一九、六二一
大垣(美濃國)町	一九、五四九
小倉(豐前國)町	一九、五二一
濱松(遠江國)町	一九、二五一
川越(武藏國)町	一九、二一四
申木野(薩摩國)村	一九、一一九
丸龜(讃岐國)町	一九、〇一〇
豊橋(三河國)町	一八、七四九
福島(岩代國)町	一八、六四七
石巻(陸前國)町	一八、二八〇
足利(下野國)町	一八、〇五〇
萩(長門國)町	一七、九七二

畿内の半を占む。これを、添上郡(古はソフノカミ)、添下郡(古はソフノシモ)、山邊郡、廣瀬郡、平群郡、式上郡(古はシキノカミ)、式下郡(古はシキノシモ)、宇陀郡、十市郡(古はトナチ)、高市郡(古はタケチ)、葛上郡(古はカツラノカミ)、葛下郡(古はカツラノシモ)、忍海郡(古はオシヌミ)、宇智郡、吉野郡の十五郡に分つ。

此地。草昧のはじめ。居處いまだ定まらず。人民た山に據つて寓せしにより。山戸を名づくとも云ひ。又は開闢のはじめ土地濕りて乾かざりしかば。山路を登るに人の跡あらはるゝに依つて。山跡と稱ふ。とも云へり。兩説いづれも臆断にして取るべからず。近世の國學家は。四面山もて繞らしたれば。山壺の意ならんとも。或は山處の意ならんとも解釋す。これも強ちに信すべきには非ざれども。とにかくに山國を意味する言葉より出でたる事は。相違なきが如し。古はオホヤマトと稱して。大倭もしくは大養徳と書きたる事もありき。今は大和の文字に定まれり。

地勢は。南北に長くして。東西に狭く。既にいへるが如く。四面とてころとして山ならざるはなし。東は。室生、大臺ヶ原、備後の諸山に堺せられて。伊賀、伊勢、紀伊に連なり。南は。群峰疊嶺相つらなりて。遂に紀伊に接し。西は生駒、葛城の山々。屏風の如くにな

大牟田(筑後國)町	一七、七七五
撫(阿波國)町	一七、七七四
新(陸中國)町	一七、六九一
伏見(山城國)町	一七、六一九
品川(武藏國)町	一七、三二九
神奈川(武藏國)町	一七、一二五
岡崎(三河國)町	一七、〇七〇
戸太(武藏國)町	一六、六五五
敦賀(越前國)町	一六、四八八
和庄(安藝國)町	一六、四一五
足尾(下野國)町	一六、二二八
本銚子(下總國)町	一六、一五四
東平野(攝津國)町	一五、九二七
小田原(相模國)町	一五、七三八
指宿(薩摩國)村	一五、七二二
福山(備後國)村	一五、六六三
阿久根(薩摩國)村	一五、五九五
米子(伯耆國)町	一五、五五六
中津(豐前國)町	一五、四七九
知覽(薩摩國)村	一五、四七九
千住(武藏國)町	一五、四〇七

りて河内に隣り。北は。山城に面して。その山脈ながく。國境を縁取りたり。肥前せよ。此群山連峰もて圍まれたる中央の平地にこそ。萬世不朽の建國の基は開かれたるを。

山は壁の如く。平地は底の如く。こゝに一の大きな壺の形を作りたるは。添上、添下、式上、式下、廣瀬、十市、高市の間にある。その底なる平たき處に。鼎足をなして離れ立てるは。謂はゆる大和の三山にして。西なるは畝傍山。東南は天香山。共に高市郡に屬し。北なるは耳無山。十市郡に屬せるものこれなり。此畝傍山の麓に於て。我皇祖神武天皇は。恐多くも天津日嗣の御位に即かせ給ひしなり。名づけて橿原の宮といへり。

また我國の文學大に開け。制度いぢるしき進運を興へたる時代として。歴史家に歡迎せらるゝ藤原の都は。此三山の間を立てられしと云ふ。

この處より。遠く西に見やらるゝは萬城山なり。萬城山脈の最高峰を金剛山ともいふ。楠正成は。此山の西麓なる河内の國より出で、後醍醐天皇に仕へ奉り。此山に城を築きて。足利尊氏の兵と戦ひ。寡兵を以て。よく數百萬の大軍を惱ましたる事は。人のあまねく知るところなり。その北に續きて。二上嶽、信貴山あり。信貴山は。

伊作(薩摩國)村	一五、三六二
武生(越前國)町	一五、三二三
尼ヶ崎(攝津國)町	一五、一八〇
仁保島(安藝國)村	一四、九二七
高山(飛騨國)町	一四、八六〇
川邊(薩摩國)村	一四、八〇四
伊敷(薩摩國)村	一四、六三〇
垂水(大隅國)村	一四、六二一
加世田(薩摩國)村	一四、四三五
西加世田(薩摩國)村	一四、三三三
相川(佐渡國)町	一四、三七四
一宮(尾張國)町	一四、二三四
今治(伊豫國)町	一四、〇六六
水俣(肥後國)村	一四、〇四三
小松(加賀國)町	一四、〇三一
飯田(信濃國)町	一三、八九〇
曾根崎(攝津國)村	一三、八三六
魚津(越中國)町	一三、七六六
山口(周防國)町	一三、七六四
白河(磐城國)町	一三、六八九
上野(伊賀國)町	一三、六四〇

その母正成を生まんとして祈りたりといふ毘沙門天。その山上にあり。二上嶽の東麓には。中將姫の尼になりて住みたりといふ當摩寺。今も物さびて立てり。

更に進みて北に見やれば。白雲かゝれる生駒山を認めん。神武天皇はじめ大和に入らんとて越えさせ給ひしは。此山なりき。然れども。土賊長髓彦の抗戦せしに依り。轉じて道を跡に取り。遂に廻りて紀州より入り給ひしなり。

吉野山は。南方に遠く離れて。群山に圍まれつゝ立てり。満山の櫻花を以て。其名聞えたるのみならず。山中には。南朝三代五十餘年間行在所の遺跡。かよび。楠正行のかへらじと兼ねて思へば梓弓

なき數に入る名を予とむむる。一首の辭世を。嶽の先して其扉に刻みたる如意輪堂など。千古の歴史を語りつゝ。男兒の勝を斷たしむる多し。吉野の奥には。金峰山、山上嶽ありて。いはゆる吉野十二峰を成せり。東に錦ゆる大臺原山は。大和國中の高山にして。五千四尺に達し。此山より出で、北西に向ひ。吉野山の麓をながれて。紀伊に走る水を吉野川といふ。紀伊に入りては紀の川と呼ばれたり。

都城(日向國)町	一三、五八五
倉橋島(安藝國)村	一三、五三四
能代港(羽後國)町	一三、五二二
熊谷(武藏國)町	一四、四三三
大分(豊後國)町	一三、三〇六
廣(安藝國)村	一三、二六〇
浦賀(相模國)町	一三、二四一
新宮(紀伊國)町	一三、二二五
松坂(伊勢國)町	一三、一三六
新發田(越後國)町	一三、一三三
西宮(攝津國)町	一三、八三四
上福島(攝津國)村	一三、七八六
宇和島(伊豫國)町	一三、五九九
小松島(阿波國)村	一三、四七〇
津島(尾張國)町	一三、四三四
觀音寺(讃岐國)町	一三、三七四
石岡(常陸國)町	一三、三三八
郡山(大和國)町	一三、三三三
氷見(越中國)町	一三、二六四
小林(日向國)村	一三、二四九
土崎港(羽後國)町	一三、二〇〇

既にいへる三山の東にあたりて。初瀬山あり。その山より出づる川を初瀬川といひ。遂に西流しつゝ大和川と呼ばれ。龍田山の麓を過ぎて河内に出づ。古へ龍田川と稱へたるは是ならんとの説もあり。山上嶽より出で。大和の西南部を流れ。紀伊に出づるを十津川といふ。紀伊にて熊野川といふもの是なり。以上の二川はいづれも船舶を往來せしむるの便ならず。

北は山城に接して。地圖の上都に位するは添上郡なり。而して其西北隅を占めたる町を奈良となす。

奈良は。和銅二年に元明天皇はじめて都し給ひし以來。つゞきて元正、聖武、孝謙、淳仁、稱徳、光仁と。七代帝王の皇居となりたりし地なりしかば。名所舊跡も少なからず。桓武天皇都を山城に遷させ給ひし後。その南に當る舊都なるを以て。南都の稱おこりぬ。人口およそ二萬七十餘。町の東には。春日山、三笠山ありて。其麓には。春日神社、興福寺、東大寺あり。春日神社は官幣大社にして。その社地のあるところ。即ち古への春日野なり。社鹿牝鹿四時に群れ居て遊ぶ。興福寺は古へ山階寺と稱せし寺。しばしば火災に遇ひたりとて。今のこの建物は。南圓堂、北圓堂、東金堂、五重の塔の類に過ぎず。五重の塔の下に湛へたる水を。狹澤の地といふ。東大寺は聖武天皇

船橋(下總國)町	一三、一七三
徳山(周防國)村	一三、一六八
北野(播磨國)村	一三、一〇八
加治木(大隅國)村	一三、〇一九
坂出(讃岐國)町	一二、九九四
東市來(薩摩國)村	一二、九七三
横手(羽後國)町	一二、九四三
東加世田(薩摩國)村	一二、八〇七
鹿沼(下野國)町	一二、八〇三
沼津(駿河國)町	一二、七〇八
末吉(大隅國)村	一二、七〇二
北種子(大隅國)村	一二、六七八
佐原(下總國)町	一二、六六八
南千住(武藏國)町	一二、六五四
湊(常陸國)町	一二、六四八
新庄(羽前國)町	一二、六〇四
八戸(陸奥國)町	一一、五八六
津山(美作國)町	一一、四四四
三田尻(周防國)村	一一、四〇九
大川(筑後國)町	一一、四〇八
土浦(常陸國)町	一一、三六五

の御建立にて。爾はゆる奈良の大佛を安置す。大佛は座像にして其長五丈三尺五寸。堂の高十五丈六尺あり。其膝下を以て奈良博覽會の陳列場に充てたるを見ても。大きき想像するに餘あるべし。今は奈良町に停車場ありて。汽車の便を借らば。京都には一時五十分間。大坂には一時間餘にて達するを得べし。

奈良坂は町の北にありて。山城に出づる街道にあたり。佐保川は町の北西を流れて。末は奈良川となり。西大寺は町の西にありて。東大寺を相對しつゝ。奈良の東西を護れり。

此他。名色に郡山、五條あり。神社に山邊郡の石上神社、大和神社、龍田山の龍田神社、廣瀨郡の廣瀨神社、三輪の大神神社、多武峰の談山神社、飛鳥の里の飛鳥神社、葛城山の一言主神社、吉野山の金峰神社あり。佛閣に奈良の般若寺、新藥師寺、法華寺、唐招提寺。平群郡の法隆寺、初瀬山の長谷寺、高市郡の岡寺、橋寺。葛下郡の達磨寺あり。中にも法隆寺は。舊名を斑鳩寺と呼び。千有餘年の久しき。少しも其舊形を改めざるが故に。建築の壯麗なる。境域の嚴森なる。苟くも美術工藝の模範を取らんとするものは。就いて研究せざるはなし。

また山城に次ぎて。山陵の多く存するは。大和の國なり。今一々に

九條(攝津國)町	一一、二九四
豐島(相模國)村	一一、二九一
西有家(肥前國)村	一一、二〇一
結城(下總國)町	一一、一六八
十津川(大和國)町	一一、〇九〇
田沼(下野國)町	一一、〇〇五
瀬戸島(安藝國)村	一一、〇〇四
江田島(安藝國)村	一一、〇〇二
須賀川(岩代國)町	一〇、九六八
七尾(能登國)町	一〇、九一三
西南方(薩摩國)村	一〇、八六四
長田(駿河國)村	一〇、八四五
磯濱(常陸國)町	一〇、八一八
大森(武藏國)村	一〇、七九六
島田(駿河國)村	一一、七三六
直江津(越後國)町	一〇、六八三
古河(下總國)町	一〇、五九六
吉野(薩摩國)村	一〇、五六九
上出水(薩摩國)村	一〇、五三四
川南(攝津國)村	一〇、五三〇
三國(越前國)町	一〇、四三五

之を擧ぐれば。まづ高市郡に。神武、綏靖、安寧、懿德、孝元、宣化、齋明、欽明、天武、持統、文武、十一帝の御あり。葛上郡に。孝昭、孝安、日本武、二帝一皇子の御あり。葛下郡には。孝靈、顯宗、武烈、三帝の御あり。添下郡には。垂仁、安廉、成務、神功、孝謙、四帝一后の御あり。添上郡には。開化、元明、元正、聖武、光仁、平城、六帝の御あり。式上郡には。崇神、景行、舒明、三帝の御あり。十市郡には。崇峻天皇の御あり。また吉野郡には。後醍醐天皇の御あり。

大和の物産にて著名なるは。
 吉野葛 吉野紙 三輪素麺 奈良晒布 奈良漬
 奈良人形 奈良墨 織物 木材
 等を始として猶多し。

第三章 河内

河内の國は。畿内の中央に位し。面積およそ四十四方里。もとは之を。交野、讚良、茨田、河内、高安、若江、湊川、大縣、安宿部、志紀、古市、丹北、丹南、八上、石川、錦部、の十六郡に分てりしが。今は。南河内郡、中河内郡、北河内郡の三郡となす。

長濱(近江國)町	一〇、四二六
家西(周防國)村	一〇、三六四
臼杵(豐後國)町	一〇、三六一
淵(肥前國)村	一〇、三五五
喜入(薩摩國)村	一〇、三三三
湯鏡(紀伊國)町	一〇、二九二
輪島(能登國)町	一〇、二八二
平野(信濃國)村	一〇、二五八
八代(肥後國)町	一〇、二五六
郡山(岩代國)町	一〇、二二三
滑川(越中國)町	一〇、一九六
東志布志(日向國)村	一〇、一九六
鹿屋(大隅國)村	一〇、一八二
三條(越後國)町	一〇、一七八
中出水(薩摩國)村	一〇、一七三
宮之城(薩摩國)村	一〇、一四一
高城(薩摩國)村	一〇、〇四六

總計 七、〇二四、二三五

○人口壹萬以上都邑に於ける現在戸數。並びに一戸

此國。古は凡河内と稱へしが。元正天皇の御宇に。凡の文字を除きて河内の國となれり。
 東は。生駒、暗嶺、信貴、二上、葛城、金剛の山々を隔て、大和に接し。西南は。藏王嶺を以つて和泉に隣す。西北は。や、平坦にして攝津に連なり。淀川これを横ぎりて、其の國境を區劃せり。

大和より來りて。國の中央を横斷し。和泉に出づる水を。大和川といふ。
 楠正成の。金剛山の麓より起りて。勤王の兵を擧げたる事は。既に大和の處に於て述べたる如し。正成の先づ據りて賊軍に抗したる赤坂の城は。石川郡にあり。上赤坂、下赤坂の二城に分れ。山に依り谷に臨みたる地を占めたり。史に曰く。笠置既に破れ。鎌倉の賊兵大に至り。蟻附して上る。城もとより釣堀を設けたれば。即ち其綱を斷つ。壓され死するもの幾千人。賊また城に鉤す。正成長柄の杓を作り。熱湯もて之に灌ぐ。死傷甚だ多し。賊兵大に懼れ。軍を舒めて之を圍む。城中糧盡く。將士戦ひ死せんと請ふ。正成許さずして曰く。忠臣身を以て國に殉ずるは固より其分。然れども天歩艱難賊氣なほ熾なり。今は其鋒を避け。以て後舉を謀るべしとて。一

凡付人口一覽表

都邑	現在戸數	付人口
東京市	二九八、九〇二	四・三五五
大阪市	九五、六六二	五・二七
京都市	六七、五一八	五・〇五
名古屋市	五五、〇七三	四・四〇
神戸市	四五、八二四	四・〇二
横濱市	三〇、四七四	五・八九
廣島市	二九、〇六六	三・七〇
金澤市	二五、〇四六	三・四三
仙臺市	一四、七六三	五・二五
長崎市	九、五九〇	七・五五
函館區	一六、二七六	四・三六
福岡市	一九、九七三	六・二四
徳島市	一二、四九七	四・九二
富山市	一三、九三三	四・三三
和歌山市	一三、二九二	四・三二
岡山市	一一、二一〇	五・一〇
熊本市	一三、〇八二	四・三四
鹿児島市	九、三〇二	五・七九

大城を城中に穿ち。充たすに薪草を以てし。僮屍數十を取つて其中に置き。一夜風雨に乗じて。將士と潜に出づ。一卒を留め。之に命じて曰く。衆の去る遠きを待ちて。火を縦ちて散じ去れど。正成賤者の甲を着て逃る。守者思へらく馬驚ならんと。射て其針に中つ。正成遂に山中に逃れ。既にして城裡火起る。賊軍鼓噪して登り。焦骸を見て正成死せりと思ひ。成を置きて歸る。とある即ち此のとこそ。

正成の次ぎて築きしは。千劍破の城なり。城は同じく石川郡にして。金剛山の半腹にあり。四面谷の深きこと。東は百丈。西は七十五丈。南は八十丈。北は三十丈に至り。東南は高嶺峻岳峽々として天に聳ゆ。史に又曰く。既にして賊軍西上し。吉野赤坂皆陥り。賊將高直時治等が兵百萬。千劍破に集まる。城中兵わづかに九百餘。外に一甲の援なし。然れども正成固く守つて動かす。賊その城小さく勢孤なるを侮り。備を設けずして進む。山城じくして列を爲す能はず。城上より矢石雨の如くに下る。死する者五六千。退き築いて山下に對壘し。隊を分ちて圍み守る。別に名越某を遣して。一軍に將として澗に沿うて陣し。以て水汲む道を絶たしむ。正成もとより山中水乏しきを慮り。五派山の泉に就きて營築し。且つ大槽數百を造りて

新潟市	一〇、〇二二	五・二二
堺市	九、四五七	五・一九
福井市	一〇、一八六	四・三五
静岡市	八、四九三	四・七〇
赤間關市	七、二〇四	五・〇八
宇都宮市	六、九九一	五・二一
甲府市	七、一五三	五・〇〇
高知市	八、四九〇	四・一八
松江市	七、七八〇	四・四五
大津町	五、五六七	六・二一
松山市	八、二二二	四・二一
高松市	七、六七五	四・四七
那覇區	八、六〇三	三・九七
札幌區	五、五八九	六・〇八
長野町	五、四〇一	六・一四
岡山市	四、八二四	六・六六
水戸市	五、二八五	六・〇七
盛岡市	六、六四二	四・八二
弘前市	六、三八〇	四・九一
姫路市	八、五八八	三・六三
岐阜市	六、二〇一	五・〇一

水を貯へ。淳するに糞土を以てし。又溜溜を數十桶に縮め。外焚攻を禦ぎ。内炊飯に給す。よりて未だ嘗て澗水を汲まず。數日にして。守者すこしく懈りしかば。城兵襲つて之を破り。旗幕を奪つて歸る。明日これを城上に陳し。さしませぬと白く。來りて取れど。名越急りて兵五千を督して奮登す。多くは矢石の爲めに傷けらる。正成また藁人數十を縛し。甲を撰し杖を執らしめ。曉霧に乗じて林薄に植て。壯士をして高きに登つて大に呼ばしむ。賊果して來り撃つ。因つて巨石を擲して數百千人を殺しぬ。賊雲梯を造り騰り入らんとすれば。城兵炬を擲つて之を焚く。梯折れて深谷に顛墜し。死するもの數千人。賊また近づき攻めず。柵をめぐらして之を守ると。旅人もし其天守の跡を探らば。老松三株。とこしなへに矢叫の聲を傳ふるを聞かん。

四條畷は讚良郡にあり。楠正行兄弟の高師直と戦ひて。忠死せし處なり。これより北十餘町の處に。四條畷神社あり。明治二十二年の創建に係り。別格官幣社として。正行以下一族の戦死者を祭る。山陵には。仲哀、應神、允恭、雄略、清寧、仁賢、安閑、用明、敏達、推古、孝徳、後村上、十二帝の御あり。名邑は。八尾、枚方の二處に過ぎず。

前橋市	六、一九八	四、九八
高岡市	七、〇五三	四、〇三七
津市	五、七六八	五、〇三三
松本市	六、二八一	四、八〇〇
佐賀市	四、九二一	六、〇〇七
高崎町	五、〇四三	五、九二二
奈良町	五、四三五	五、四七
米澤市	五、三一九	五、五八
難波村	一〇、〇〇五	二、八六
鳥取市	五、九八六	四、七二
久留米市	四、五六一	六、〇二
千葉町	四、〇五六	六、七三
秋田市	六、六三四	四、〇〇九
宇治山田町	五、八六一	四、五七
八王子町	四、八八三	五、四二
天王寺村	四、五九九	五、七一
谷山村	四、四九三	五、五五
首里區	四、九八六	五、〇〇
横須賀町	三、九五五	六、二七
若松町	四、五一九	五、四九
佐世保村	四、三四三	五、六八

鐵道の此國を走れるもの二つ。その一は大坂より來りて大和の櫻井
 および奈良に至れるもの。此間に八尾。柏原の停車場あり。その二
 は攝津の片町より來り長尾に至れるもの。此間に四條畷等の停車場
 あり。而して其一に屬する支線を。柏原、富田林間とす。
 河内の物産は。
 米 木綿織 金剛砂
 の類なり。

第四章 和泉

和泉の國は。畿内の南端に位して。東は河内、紀伊に。北は攝津に。
 南は紀伊に連なり。西は大坂灣に臨む。面積およそ三十三方に過
 ぎず。古は河内の内なりしが。孝謙天皇の御宇より。分れて和泉の
 國となれり。もとは大鳥、泉、南、日根の四郡なりしが。今は分ち
 て。堺市、泉北郡、泉南郡の一市二郡となす。
 山嶽は。河内の堺に。妙見山あり。紀伊の堺に。横尾、七越、牛瀧
 葛城、飯盛の山々あり。大和川は。河内より來りて。國の東を横
 り。攝津の國境を爲す。なほ他に。石津、大津、春木、津田、近義、
 出見、瓦屋、岡田、男里、等の川々ありて。何れも大坂灣に打ち注

青森町	五、一四七	四、七〇
上田町	四、一一一	五、四五
栃木町	三、六四二	六、〇三
門司町	三、五五〇	六、一三
四日市町	三、九〇九	五、五三
酒田町	三、四七五	六、二一
明石町	四、四二三	五、八五
額埴村	四、一三五	五、一五
尾道町	四、六七四	四、三六
鶴岡町	三、〇一〇	六、七六
東南方村	三、九三九	五、一五
桐生町	三、二五三	六、一五
熱田町	四、七九三	四、二七
高田町	三、七三九	五、三三
桑名町	三、六三一	五、四三
彦根町	三、二六九	六、〇〇
大垣町	三、八一二	五、一三
小倉町	二、七八〇	七、〇二
濱松町	三、四六二	五、五六
川越町	三、三三二	五、七八
申木野村	三、三八一	五、六五

堺市は。國の北部にありて。およそ四萬七千餘の人口を有す。此地
 攝津の堺に當れるが故に此名を得。古へ享祿天文の頃は。南海四
 國の要衝たりしが故に。諸國の船舶多く此浦に輻輳し。葡萄牙人な
 ども屢ば來りて。互市場となりたりしが。天正十三年豊臣秀吉そ
 の營を北莊に移すに及び。小西行長をして和泉一國の政事を司
 らしめ。來りて此地に居らしめしより。ますく繁榮の一市街とな
 れり。大坂を去ること三里十七町。涼車にてすれば。二十分間にし
 て達するが故に。夏日暑を避けんとして。大坂より來り遊ぶもの多
 し。之に次ぎての名邑を岸和田とす。既に大坂より來りて紀伊に入
 らんとする鐵道の通せるあり。
 なほ山陵には。仁徳、履中、反正、三帝の御あり。神社には。日本武
 尊を祭れる大鳥神社。紀貫之の和歌を獻じて其名知られたる蟻通神
 社あり。これ彼貫之家集に。紀伊の國より上洛の道にて。俄に馬の
 煩ひて死ぬべきあつかひをするに。道ゆく人見て曰く。此處にいま
 す神の所爲ならん。年頃社もなく知れる人も侍らず。いとうくし
 ておはします神なり。と申しければ。さて御幣も無ければ。たゞ手
 を洗ひ。ひざまづきて。山に向ひて。そもく何神と申すと問へば。

九龜町	四、八一〇	三、九五五
豐橋町	四、六七三	四、〇〇一
福島町	三、四五二	五、四〇〇
石巻町	三、一一四	五、八七〇
足利町	三、七六六	四、七九
萩町	三、九五六	四、五四
大牟田町	二、九九七	五、九三
熊襲町	三、〇八二	五、七七
新湊町	四、三三七	四、〇〇八
伏見町	三、三八二	五、二二一
品川町	三、五四六	四、八九
神奈川町	二、九一〇	五、八八
岡崎町	四、二五七	四、〇〇一
月本町	三、六三六	四、五八
教養町	二、九四八	五、五九
和庄町	三、五六八	四、六〇
足尾町	三、三八四	四、八〇
本鏡子町	二、八〇〇	五、七七
東平野町	三、一八〇	五、〇〇一
小田原町	三、一六五	四、九七
指宿村	二、九三七	五、三五

蟻通の神となん申すといふなり。よりに歌を奉る。
かきくもりあやめも知らぬ大空に
ありと星をば思ふべきかは

とある神社すかし。なほ蟻通と名づけし謂を知らんと欲せば。清少納言の枕草子を一讀せよ。
和泉の産物は。
茶 煙草 蜜柑 松茸 堺段通 袋真田
和泉石 櫻鯛 刀劍類 鐵砲 貝細工
の類なり。

第五章 攝津

攝津の國は。畿内の東北隅に位し。其東北は河内、山城および丹波に。南は和泉に。西は播磨に連なり。西南には大坂灣を抱きて、平坦の地多し。面積およそ九十三方里。これを。大坂市、神戸市、西成郡、東成郡、三島郡、豊能郡、武庫郡、川邊郡、有馬郡、の二市七郡に分つ。
山嶽は。國の西方に。武庫山(六甲山)、摩耶山、鐵拐峰、鷹取山あり。

福山町	四、〇三九	三、八八
阿久根村	三、〇六六	五、〇九
米子町	三、二八四	四、七四
中津町	二、六七四	五、七九
知覽村	三、一六八	四、八九
千住町	三、二二三	四、七八
伊作村	二、六八四	五、七二
武生町	三、五九二	四、二七
尼ヶ崎町	二、六九九	五、六二
仁保島村	二、八七七	五、一九
高山町	三、六五九	四、〇六
川邊村	二、六七五	五、五三
伊敷村	三、三四一	四、三八
垂水村	二、五四九	五、七四
加世田村	二、四二七	五、九五
西加世田村	二、三一五	六、二〇
相川町	二、四八七	五、七四
一宮町	二、七七五	五、一三
今治町	三、〇五七	四、六〇
水俣村	二、四九四	五、六三
小松町	二、七四六	五、一一

源平の合戦に名を知られたる鴨越、一谷は。共に鐵拐峰の南麓にして。有馬の温泉と鼓の淵とは。武庫山の西北麓に屬せり。
淀川は山城より來りて河内の堺を流れ。神崎川、安治川、十三川の三つに分れて共に大坂灣に出づ。安治川は大坂市内に入りて。更に木津川、尻無川の支流を有せり。
大坂市は。大坂灣の北岸に位し。三方に平野を受けて山遠く海近く。古は難波津または大江の坂とも稱して。人烟稀なる地なりしが。豊臣秀吉この地に大坂城を築きしより。漸次盛大におもひき。田畝開け人口殖え。徳川氏の時はますます繁榮を極め。今日に及びては。商業工業全國に比類を見ざるに至りぬ。其廣さ東西ほとんど二里。南北一里に餘り。五十萬三千餘の人口を有す。分ちて。東區、西區、南區、北區の四區となせり。
運河縱横に通じて。二百内外の橋梁を架せしめ。殊に市街の通路直線を爲したれば。運搬交通の便いはんかたなく。安治川口に出入する般船の賑。實に名状すべからざるものなり。
大坂府廳は。安治川に臨みて其岸を占め。大坂城は市街の東北に築えて。今は陸軍省に屬し。現に中部都督部および第四師團司令部を置かれたり。

飯田町	二、九四三	四、七二
曾根崎村	二、八四八	四、八六
魚津町	三、三一九	四、一五
山口町	二、五八五	五、三二
白川町	二、二五四	六、〇七
上野町	三、八六七	四、七六
都城町	二、三八三	五、七〇
倉橋島村	二、一六四	六、二五
能代港町	二、八一二	四、八一
熊谷町	二、二二二	六、〇八
大分町	二、三三二	五、七一
廣村	二、五一一	五、二七
浦賀町	二、一五四	六、一五
新宮町	一、八七九	七、〇四
松坂町	三、〇〇六	四、三七
新藤田町	二、二四一	五、八六
西宮町	二、四八五	五、一六
上福島村	二、五一一	五、〇八
宇和島町	三、〇一〇	四、一八
小松島村	二、三九六	五、二〇
津島町	二、七七四	四、四八

天満の天神は。北區にありて。市内第一の大社と祭られ。それに次ぎては。南區の生國魂神社、高津神社あり。謂はゆる攝津の住吉明神は。市より南の方およそ三里の處に立たせ給ふ。市の東南隅に位せる四天王寺は。聖德太子の御創立にかゝり。我國佛寺の濫觴なりとて。其名世々に高かりしもの。東西南北に四大門ありて。境内の廣き。縦八町横六町。中にも人の目を驚かすは。五重の塔なり。塔は南大門の中にありて高く聳え。その結構の壯大なる。我國まれに見るところすかし。太子大連守屋と戦ひ給ひし時。白膠の木を切り。御手づから四天王の像を造り。祈誓し給はく。今もし我をして敵に勝たしめ給は。必ず一大寺を建立して安置し奉るべしと。後にはたして全勝を得給ひしかば。此寺つひに成れりしなり。始は玉造の地なりしを。推古天皇の元年。今の處に移しなりといふ。難波寺と古人の呼びしは是なり。

鐵道は。東海道線の貫通せるもの。其停車場梅田にあり。和泉に至るもの。其停車場難波にあり。大和に至るもの。其停車場淡町にあり。河内に至るもの。其停車場片町にあり。なほ市内を走るものには。梅田淡町間あり。梅田安治川間あり。東京までは百四十四里。淡町にては。十七時間を越えずして至るを得べし。

観音寺町	二、二〇三	五、六二
石調町	二、二一一	五、五八
郡山町	二、〇三六	六、〇六
水見町	二、六五七	四、六二
小林村	二、二二四	五、五一
土崎港町	一、九九一	六、一三
船橋町	二、〇三〇	六、〇〇
徳山村	二、四一七	五、〇三
北野村	三、〇七四	三、九四
加治木村	二、三四七	五、一一
坂出町	二、〇九五	五、七三
東市來村	二、四五一	四、八八
横手町	一、九六七	六、〇七
東加世田村	一、七六一	六、七〇
鹿沼町	二、〇一一	五、八七
沼津町	二、〇〇七	五、八三
末吉村	二、一二九	五、五〇
北種子村	二、五七五	四、五四
佐原町	二、一八五	五、三四
南千住町	二、四八五	四、六九
淡町	二、二六九	五、一三

神戸市は。大坂灣の西岸に位し。日本五港の一にして。横濱に次ぐ繁盛の互市場たり。その廣さ東西二十町。南北一里十八町。およそ四萬七千の戸數を有す。もとは市の中央を貫流せる淡川を境にして。以北の地を神戸と稱し。以南の地を兵庫と呼びたるが。今は併せて神戸市の管する處となれり。此地に兵庫縣廳を置かる。

淡川は補正成の戦死せしところにして。其傍に之を祭れる神社あり。別格官幣社にして。淡川神社と呼ぶ。かの水戸光圀が。嗚呼忠臣楠子之墓と記し。裏面には明の人朱舜水の撰文を刻み。以て願忠の誠意を表せし碑面は。實に此境内にあるなり。

市内に又生田神社あり。その後の森を生田森といふ。壽永年間の合戦に。梶原源太景季が。籠に梅の花を挿して。花やしき功名せしは此處なり。

市の西南に突き出でたる沙濱を和田岬といふ。舊時の砲臺現時の燈臺などありて。風景たぐひなし。

市の北に布引瀨あり。摩耶山の麓にして。瀨のある處を布引山といふ。その雌瀨なるものは。高さ七丈三尺、幅二間。雄瀨は高さ十五丈、幅十三尺。むかし在原行平この地に來りて。

ぬきみだる人こそあるらし白玉の

新庄町	一、六三九	七、〇八
八戸町	二、一五二	五、三三八
津山町	二、四四六	四、六八
三田尻村	二、〇八七	五、四七
大川町	一、八四九	六、七一
土浦町	一、九五八	五、八〇
九條村	三、〇七七	三、六七
豊島村	二、一四八	五、二六
西有家村	一、九二五	五、八二
結城町	一、七四五	六、四〇
十津川町	二、〇三三	五、四五
田沼町	一、六三一	六、七五
瀬戸島村	一、八六〇	五、九二
江田島村	一、七九四	六、一三
須賀川町	一、八四〇	五、九六
七尾町	二、三五五	四、六三
西南方村	二、〇三五	五、三四
長田村	一、七三〇	六、二七
磯濱町	二、三二二	四、六六
大森町	一、八三五	五、八八
島田町	一、九七五	五、四四

間なくも散るか袖の袂きに
と詠せし和歌は伊勢物語に見ゆ。
この行平が住みたりとて歌書の上に其名高く。平教盛が討死せり
とて戦記の内に特書せられたる須磨の浦は。市の西南にありて近く。
名所古跡を尋ね風光教養を受するの客。つねに絶ゆる事なし。東海
道線の鐵道は此市にて終り。山陽線の鐵道は此市に始まる。
尼崎町は。神戸の東五里三十三町にありて。神崎停車場を距ること
一里なり。元龜年中荒木村重の居城ありしが。今は全く破壊して。
僅に石垣の壊れ。城堀の跡を残せるのみ。
西の宮町は。神戸と大坂との中間にありて戸數二千五百餘。伊丹町
と共に。醸酒業極めて盛なり。東海道線の停車場あり。大坂へも。
神戸へも。二十五分にして達するを得べし。
西宮と神戸との中間。沿海の地に御影村あり。有名なる花崗石の産
地なり。花崗石を削じて。御影石といふは。全く此地の名産なるが
故なり。
此御影村に赤女塚といふ古墳あり。延元年中新田義貞。此邊に足利尊
氏と戦ひ。馬に付れてまことに戦死せんとする時。其臣小山田高家。其
乗馬を義貞に與へ。遂に花をしく討死せり。

直江津町	一、九二〇	五、五六
古河町	二、三八〇	四、四四
吉野村	一、八六一	五、六八
上出水村	二、一四八	四、九〇
川南村	一、九二一	五、四八
三國町	二、二五七	四、六二
長濱町	二、二六五	四、六〇
家室西方村	二、〇三三	五、一〇
白杵町	二、一〇五	四、九二
淵村	一、七〇五	六、〇七
喜入村	一、九一二	五、四〇
湯淺町	一、八五四	五、五五
輪島町	一、九一一	五、三八
平野村	一、二一一	八、四七
八代町	一、九九八	五、二三
郡山町	一、八六〇	五、四九
滑川町	一、九八八	五、二三
東志布志村	一、九七〇	五、一八
鹿屋村	二、三〇七	四、四一
三條町	一、七八六	五、七〇
中出水村	二、一九四	四、六四

攝津の物産は。
伊丹、灘の酒 花崗石 神戸の牛肉 瓦煎餅
紡績品 樺寸 有馬細工 有馬筆
草綿 大根 蕪菁 銅
鹽 池田炭 煙草 煙管
煙草入 水砂糖 水飴

の類なり。

宮之城村	二、〇一六	五、〇三
高城村	一、九五六	五、二四
總計	二、四四五	一〇四、八六

○古今人口比較

天皇一推古	年號二十八年庚午	距今年數	一、二八七
人口		相距年數	四、九八八、八四二
增加人口		平均二年	一一六
平均二年		增加人口	三、〇二一、一五八
增加人口		平均二年	二二、八九八
天皇一聖武	年號二十八年丙子	距今年數	一、一六一
人口		相距年數	八、〇〇〇、〇〇〇
增加人口		平均二年	一一六
平均二年		增加人口	三、〇二一、一五八
增加人口		平均二年	二二、八九八
天皇一應元	年號一延享元年甲子	距今年數	一、一六一
人口		相距年數	八、〇〇〇、〇〇〇
增加人口		平均二年	一一六
平均二年		增加人口	三、〇二一、一五八
增加人口		平均二年	二二、八九八

第二編 東海道

東海道は。畿内の東より。太平洋に沿ひて。細く伸びたる一帯の地域にして。北は東山道と腹背相接す。これを十五箇國に分つ。伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸すなはちこれなり。東京府および三重、愛知、静岡、山梨、神奈川、千葉、茨城、埼玉の一府八縣に管轄せらる。

太平洋に臨める南方一帯の地は。海岸の屈折極めて甚しく。従ひて港灣の大なるもの多し。

十五箇國中。海に臨まざるは。伊賀、甲斐の二國のみ。志摩は西方の一端のみ伊勢に連なりたる半島にして。三河の伊豆古輪と共に。伊勢海の口を扼し。伊豆は北方の一端駿河と相模とに連なりたる半島にして。一面は遙に遠江の御前崎と相對して。駿河灣を抱き。一面は遠く安房の半島と相應じて。相模灘をなす。東京灣は。相模灘の更に深く。武藏、下總、上總の間に。曲り入れるところなり。

海岸の屈折多き時は。浪荒からずして。海の眺望も面白き事明かなり。されば本道沿岸の地は。極めて風景に富み。海水浴に適する

二千四百四年	距今年數	一五三	
人口	二五、六八二、二一〇		
相距年數	一、〇〇八		
增加人口	一七、六八二、二一〇		
平均二年		一七、五四一	
增加人口		一七、五四一	
天皇一桃園	年號一寶曆六年丙子	距今年數	一四二
人口	二六、〇六一、八三〇		
相距年數	一一三		
增加人口	三七九、六二〇		
平均二年		三二、六三五	
增加人口		三二、六三五	
天皇一今上	年號一明治五年壬申	距今年數	二五
人口	三三、一一〇、八二五		
相距年數	一一六		
增加人口	七、〇五八、九九五		
平均二年		六〇、八五三	
增加人口		六〇、八五三	
天皇一今上	年號一明治十五年壬午	距今年數	二五
人口	三三、一一〇、八二五		
相距年數	一一六		
增加人口	七、〇五八、九九五		
平均二年		六〇、八五三	
增加人口		六〇、八五三	

の地最も多く。鎌倉、大磯、小田原、沼津、三保崎など。療養の客常に絶ゆることなし。

氣候極めて温和なるは。北方の山脈。寒冷の氣を遮るに由るといへども。また太平洋の暖潮が。靜に打ち寄る故にもあるべし。されども。東京近傍の平野の地は風烈しく。甲斐其他山多き處は。寒氣意外に強きもあり。

人口は殆ど千五十萬あり。氣候の温和前の如く。水陸交通の便また大なれば。人口の稠密を來すべきこと。自然の勢といふべし。

相模の國に箱根峠あり。古へ此所に關所を設けて。これより東。相模、武藏、安房、上總、下總、常陸の六國に。東山道の上野、下野の二國を加へ。之を關東八州の平野と稱す。箱根以西にも。平坦の地多し。就中。尾張より東山道之美濃に亘れる。濃尾平原最も大なり。

本道は。我國の首都東京のある處なるが故に。鐵道の利便最も多く開通し。二十線を以て數ふるに至る。

其一は。東京の新橋より起りて。攝津の神戸に至れるもの。いはゆる東海道線これなり。其二は前の線路の品川より分れて赤羽に至れるもの。其三は東京の上野より發して。陸奥の青森に至れるもの。其

二千五百四十二年	距今年數	一五
人口	三六、七〇〇、一一八	
相距年數	一〇	
增加人口	三、五八九、二九三	
平均一年ノ增加人口	三五八、九二九	
天皇(今上)		
年號(明治二十年丁亥)		
距今年數	一〇	
人口	三九、〇六九、六九一	
相距年數	五	
增加人口	二、三六九、五七三	
平均一年ノ增加人口	四七三、九一五	
天皇(今上)		
年號(明治二十五年壬辰)		
距今年數	五	
人口	四一、〇八九、九四〇	
相距年數	五	
增加人口	二、〇二〇、二四九	
平均一年ノ增加人口	四〇四、〇五〇	
天皇(今上)		
年號(明治二十八年乙未)		

四は前の線路の大宮町より分れて上野の前橋に至れるもの。其五は同じく上野より。常陸の水戸に走れるもの。其六は東京の飯田町より。八王子町に達し。其七は。本所より下總の佐倉に至れるもの。以上七線は。共に東京を起點として。四方へ分派せるものなり。其八は武藏の西部なる國分寺より。北部の川越に至れるもの。其九は國分寺の西三哩なる立川より。日向和田に至れるもの。其十は下總の佐倉より。佐原に通せるもの。其十一は同じく佐倉より。利根川口なる鏡子に至れるもの。其十二は下總の千葉より一宮に至れるもの。其十三は相模の大船より横須賀に至れるもの。其十四は尾張の名古屋より近江の草津に走れるもの。其十五は伊勢の津と山田との間に通せるもの。其十六は同じく津と龜山との間に通せるもの。其十七は同じく伊勢の彌富より。尾張の津島に通せるもの。其十八は尾張の大府より武藏に至れるもの。其十九は三河の豊橋より新城に達せるもの。其二十は伊豆の三島より大仁に通せるもの。これなり。是等文明の利器は。遠を變じて近とし。險を變じて易とし。昔は東海道之五十三次とて。十數日の長旅程なりしものも。今は僅に。十數時間にて達するに至り。無双の天險を稱せられし間はゆる箱根八里の峻険也。一本の卷煙草を蒸らす間に。やすくと過ぎらるゝや

二千五百五十五年
距今年數 四五、四〇五、三三五
人口 四五、四〇五、三三五
相距年數 三
增加人口 四、三二五、三九五
平均一年ノ增加人口 一、四三八、四五五

○全國汽車線路各驛一覽

新橋	品川	大森	川崎	鶴見
神奈川	横濱	程ヶ谷	戸塚	大船
藤澤	茅ヶ崎	平塚	大磯	國府津
松田	山北	小山	御殿場	佐野
三島	沼津	鈴川	岩淵	蒲原
興津	江尻	静岡	焼津	藤枝
島田	金谷	堀内	掛川	袋井
中泉	天龍川	濱松	舞坂	鷺津
二川	豊橋	御油	蒲郡	岡崎
安城	刈谷	大府	大高	熱田
名古屋	清洲	一宮	木曾川	岐阜
大垣	垂井	關原	長岡	米原
彦根	河原	能登川	八幡	野洲
草津	馬場	大谷	山科	稻荷

(一)東海道線 官有鐵道

第一章 伊賀

伊賀の國は。東海道の西端にありて。東は伊勢に接し。西の半部は畿内の山城に。他の半部を南と北は大和に。北は東山道の近江に接し。四面山岳の圍繞せられたり。面積をよそ七十三方里餘。これを阿山郡、名賀郡の二郡に分つ。三重縣の管轄に屬せり。大和の境には。青蓮寺山、茶臼山、鷹塚山あり。近江の境には高旗山あり。伊勢の境には布引山あり。いづれもさまで高からねど。其支脈ひろく蔓延して。沿河の地を除きては。國中全く平坦の地な

京都	向日町・山崎	高槻	茨木
吹田	大坂	神崎	西宮
三宮	神戸		住吉
大船	(二)大船橋須賀間	官有鐵道	
	鎌倉	運子	横須賀
三島	(三)三島南條間		豆相鐵道
田京	三島町	大場	厚木
	大仁		南條
吉田	(四)吉田新條間		豐川鐵道
長山	小坂井	牛久保	豐川
	東上	新條	一宮
大府	(五)大府武豐間		官有鐵道
	龜崎	半田	武豐
名古屋	(六)名古屋網島間		關西鐵道
桑名	愛知	蟹江	彌富
龜山	富田	四日市	河原田
三雲	關	加太	(柘植)
島ヶ原	石都	草津	佐奈具
祝園	太河原	笠置	加茂
四條畷	田邊	長尾	津田
	住蓮	徳庵	放出
			網島

川の著名なるものは。伊賀川、名張川なり。伊賀川は。近江より來れる河合川と。伊勢より流れ入れる柘植川との合したるものにして。更に服部川、長田川などの小流を合せ。山城に入りて。木津川に注ぐ。名張川は。伊勢より發したる東川と。大和より來れる西川との合したるものにて。同じく山城に入りて。木津川に注ぐ。上野町は。阿山郡の西南部にあり。國中第一の繁華の地にして。三千二百餘の戸數を有す。此町に。俳人芭蕉の墓あり。遠國よりわざわざ來り訪ふもの多く。香の煙絶ゆることなし。名張町は。名賀郡の西南部にありて。上野町を距ること四里半なり。戸數は。上野町の三分の一ほどなれども。大和街道の衝に當れるを以て。其繁華上野町に譲らず。鐵道は。國の北境柘植より。上野町を過ぎて。國中を南北に貫き。大和の奈良に達す。物産にて著名なるは。伊賀焼、萬粉、菓子油、茶、松茸、雲母、石灰、蒟蒻。

彌富	(七)彌富秋原間		尾西鐵道
萩原	佐屋	津島	六幡
龜山	(八)龜山津間		同上
山田	下庄	一身田	津
徳和	(九)津山田間		參宮鐵道
加茂	阿漕	高茶屋	六軒
	相可	田丸	宮川
			備前橋
	(十)加茂大佛間		關西鐵道
	大佛		
	(十一)米原富山間		官有鐵道
米原	長濱	高月	木本
柳瀬	尾田	教賀	杉津
鮭波	武生	鯖江	大土呂
森田	新庄	金津	細呂木
動橋	小椋	美川	松任
津幡	石動	福岡	高岡
富山			小杉
津幡	(十二)津幡七尾間		七尾鐵道
	宇野氣	高松	寶達
			敷波

伊勢の國は。東海道の西部に位し。面積およそ二百三十餘方里。これを。津市、桑名郡、員辨郡、三重郡、鈴鹿郡、河藝郡、安濃郡、一志郡、飯南郡、多氣郡、度會郡の一市十郡に分つ。地形。南北に長くして。北は尾張、美濃に接し。西は近江、伊賀、大和に接し。南端は紀伊に連なる。東部は中間凸出ありて。其先に志摩あり。凸部より北は伊勢海に臨み。南は太平洋に面す。此國は。天照天照大神を祭り奉れる皇太神宮の所在地なれば。歴史上最も大切なる國とす。されば伊勢といへば。直に太神宮を連想して御伊勢様といひ。太神宮に參ることを。伊勢參と稱へ。遠近東西より。數百千人組をなして此の國に入り込むもの。年中絶ゆることなし。國の北端美濃の境に。高く聳えたるは多度山(一名箕山)なり。西南遙に伊勢海を望み。山上の眺望極めて可なり。其脈伸びて西南に至り。藤原岳、御在所山、入道山の諸峰をなして。近江の境をなし。

第二章 伊勢

五倍子 鮎 傘 などの類なり。

羽咋	千路	金丸	能登部	徳田
七尾	(十三)高岡城端間	中越鐵道		
高岡	二塚	戸出	出町	高儀
福野	福光	城端		
七條	(十四)七條奈良間	奈良鐵道		
新田	伏見	桃山	木幡	宇治
奈良	長池	玉水	榎倉	木津
京終	(十五)京終櫻井間	同上		
三輪	帶舞	櫻井	丹波市	柳本
京都	(十六)京都七條園部間	京都鐵道		
嵯峨	大宮	丹波口	二條	花園
湊町	(十七)湊町奈良間	大坂鐵道		
柏原	今宮	天王寺	平野	八尾
柏原	王寺	法隆寺	郡山	奈良
道明寺	(十八)柏原富田林間	海陽鐵道		
	古市	喜志	富田林	

國內にては。筆捨山、鈴鹿山の二嶺を起す。筆捨山はさまで高からねども。奇岩、怪石、突兀として峙ち。恰も畫中の山の如きさまなれば。四方文人の登山するもの常に多し。此山の名は。有名なる畫人狩野元信。曾て此山の景を寫さんとして成らざりしため。遂に其筆を捨てしより起りしなりといふ。鈴鹿山は箱根につぎたる峻嶺にして。弘仁年中坂上田村麿の。此山に鬼神を退治せしといふ事。昔く人口に膾炙するところなり。

伊賀の境には。布引山、尼岳、大洞山あり。其支脈一志郡の中央に起りて。矢頭山となる。

大和の境には高見山、白倉山、大臺原山ありて。就中大臺原山最も高く聳へ。志摩の境には朝熊山ありて。二見浦に近く。其眺臺のすやれたるがため。特に名高く著る。

有名なる木曾川は。源を信濃の木曾山中に發し。尾張、美濃の境を流れ。佐屋川、揖斐川其他の諸川を合せつゝ。國の北部に入りて。伊勢海に注ぐ。流程五十五里にして。實に東海道三大川の一なり。宮川は國內第一の長流にして。源を大和國境の大臺原山に發し。東流し北流して伊勢海に注ぐ。

第二の長流は榎田川なり。同じく大和國境の高見山より發し。宮川

王寺	(十九)王寺櫻井間	大坂鐵道		
高田	下田	高田	歌傍	櫻井
高田	(二十)高田五條間	南和鐵道		
北字智	新庄	御所	掖上	葛
五條	五條	(廿一)五條橋本間	紀和鐵道	
	二見	隅田	橋本	
	(廿二)湊町大坂(梅田)間	同上		
湊町	天王寺	桃山	玉造	京橋
櫻宮	天満	大阪		
	(廿三)大阪安治川口間	西成鐵道		
大阪	福島	野田	安治川口	
	(廿四)難波堺間	阪堺鐵道		
難波	天下茶屋	住吉	大和川	
堺	(廿五)堺和歌山間	南海鐵道		
堺	湊	濱寺	大津	岸和田
貝塚	佐野	樽井	尾崎	箱作
深日	和歌山			

と殆ど並行して。伊勢海に入る。

其他の川を北より順に數ふれば。町屋川、朝明川、三重川、(河口に四日市港あり)鈴鹿川、安濃川、雲出川、稻本川、朝熊川あり。

五十鈴川は。一名を御裳瀧川ともいふ。志摩の國境に近き、神路山より發し。朝熊川に會す。其流程三里餘の小流なれども。川上に皇太神宮の祭られ給へるを以て。文に書かれ歌によまれ。其名最も著し。藤原經信の歌に。

君が代はつきじとぞおもふ神風や
みもすそ川のすまんかざりは

是等の川々を受け入るゝ伊勢海は。國の東部にある一大灣にして。尾張の羽豆崎一名師崎を境として。三河の渥美灣と相對し。志摩の東端と。三河の伊良古崎とば。此兩灣の口を成せり。

阿漕浦は。伊勢海西方の一部にして。海濱には白砂青松相映じ。風光極めて明媚なり。古歌に

あふことを阿漕の島に引く鯛の
たひかさならば人知りぬべみ

とあるは。蓋し古へ漁獵禁制の地なりし故のみ。

二見浦は。同じく伊勢海の一部にして。志摩の境に近き處なり。著

和歌山	布施屋	田井ノ瀬	船戸
大小路	西村	狭山	瀨谷
尼崎	大物	長洲	神崎
伊丹	池田	中山	賢塚
武田尾	道場	三田	廣野
藍本	古市	篠山	大山
谷川	柏原	石生	黒井
作田	福知山	石生	黒井
神戸	兵庫	須磨	鹽屋
舞子	舞子公園	明石	大久保
加古川	阿彌陀	姫路	網干
那波	有年	上郡	三石
和氣	萬富	瀬戸	長岡
庭瀬	倉敷	玉島	鴨方
大門	福山	松永	尾道
三原	本郷	河内	白市
八本松	瀬野	海田市	廣島
			横川

名なる二つ岩は。海岸より数間の處に並立す。大なるものは高さ三丈に近く。小なるものも一丈餘あり。其色蒼黒にして神と云ふ。見るものをして。おのづから襟を正さしむ。二岩の間には注連を張り。朽つれば新に取りかへて。常に絶ゆることなきが故に。一名を注連掛岩ともいふ。此地日の出を見るに最も適せるを以て。毎年一月一日の如きは。諸人群集して。立錫の地を餘すすといふ。伊勢海には。桑名、四日市、賢崎、松崎、大淀、神社等二十餘の港あれども。就中桑名、四日市を最も良港とす。

桑名町は。國の北部榎斐川の河口にありて。戸數およそ三千五百。商業繁盛。殊に米穀の取引最も盛にして。東京の麹屋町と大坂の堂島とを除きては。全國比類なしといふ。港内には船舶常に輻湊して。實に東海の一要津たり。

四日市町は。桑名の南三里半餘の處にありて。特別輸出港の一なり。戸數僅に二千四百餘なれども。商業の盛なること桑名に譲らず。横濱、神戸往復の汽船は。常にこゝに寄港し。關西鐵道は。此處を起點として東西に走り。一は尾張の名古屋にて。一は近江の草津にて。共に東海道線に接続す。町内の重なる建物は。郡役所。警察署、裁判所、郵便電信局、關西鐵道會社等なり。

己斐	五日市	廿日市	宮島	玖波
大竹	岩國	藤生	由宇	大島
柳井津	田布施	岩田	島田	下松
徳山	福川	宮海	三田尻	
飾磨	(三十)飾磨生野間		播但鐵道	
京口	天神	龜山	豆腐町	姫路
福崎	野里	仁豐野	香呂	溝口
生野	甘地	鶴居	寺前	長谷
廣島	宇品			山陽鐵道
門司	(卅二)門司八代間		九州鐵道	
折尾	大里	小倉	大藏	黒崎
香椎	速賀川	赤間	福間	古賀
源田	箱崎	博多	雜餉隈	二日市
矢部川	田代	鳥栖	久留米	羽大塚
木葉	渡瀬	大牟田	長洲	高瀬
宇土	植木	池田	熊本	川尻
鳥栖	松橋	小川	有佐	八代
	(卅三)鳥栖長崎間		同上	
	中原	神崎	佐賀	久保田

『伊勢は津でもつ。津は伊勢でもつ』。と語はれて有名なる津市は。一名を阿濃津ともいひ。四日市より八里半の南にありて。殆ど國の中央に位し。東は風光明媚なる阿濃浦に臨み。南には賢崎の小良港を擁し。阿濃川、岩田川其南北に流れて。運送の便大によし。戸數は六千に近く。實に當國第一の都會なり。三重縣廳は此處にありて。國の全部および。伊賀の二郡、志摩の一郡、紀伊の内北半、南半の二郡を併せ管す。此地圓融天皇の朝。平正盛の祖父阿濃津三郎の管治せしところなりしが。戰國時代に至りて。細野、織田、富田の諸氏。相繼いで此處に居たり。富田信高の妻馬上に薙刀を揮うて勇戦せしは此處なり。徳川家康政權を執るに及び。藤堂高虎の封地となれりしが。城樓今は悉く破壊し。堀端の老松ひとり昔を語るに似たり。

市内には津公園あり。もと藩主藤堂氏の別業なりしが。明治十年修理せられて公園となりぬ。また聖徳太子の御建立にかゝれる四天王寺。阿濃浦にて漁夫の網にかゝりし觀音の像を祭れりといふ觀音寺。慶長元年僧侶の創めたる天然寺。其他願王寺、西來寺、大寶院等。みな市内の名刹なり。

津の近傍に結城神社あり。南朝の忠臣結城宗廣の一族を祭れり。史

牛津	山口	北方	武雄	三間坂
有田	三河内	早岐	南風崎	川棚
彼杵	松原	大村	諫早	喜々津
大草	長興	道尾	長崎	
早岐	(卅四)早岐佐世保間	同上		
	佐世保			
若松	(卅五)若松大隈間	同上		
小竹	折尾	中間	植木	直方
	鮫田	飯塚	白井	大隈
直方	(卅六)直方金田間	同上		
	中泉	金田		
小倉	(卅七)小竹幸袋間	同上		
	幸袋			
行橋	(卅八)小倉行橋間	同上		
	城野	曾根	苅田	行橋
中津	(卅九)行橋宇佐	豊州鐵道		
	新田原	椎田	松江	宇島
行橋	今津	四日市	宇佐	
伊田	(四十)行橋宮床間	同上		
	豊津	尾川	油須原	香春
	後藤寺	宮床		

に曰く。宗廣病篤くして將に歿せんとする時。近臣諸子への遺言を傳へんとす。宗廣奮起して曰く。我す七十の長壽を保つ。一身また何ぞか望まん。たゞ恨むらくは。國家のために逆賊を誅する能はざることを。わがために親朝(宗廣の子)に語れ。國家多難の際。父の佛事を修むるなかれ。速に逆賊の首を斬つて我墓前に供へよと。言ひ終つて憤死せり。時に延元三年九月十日なりしと。文政七年時の藩主藤堂高亮。新に碑を建て。自ら結城神君之墓の六字を書き。儒臣津坂孝純をして碑文を撰ばしめしが。明治十四年社殿を造營し。遂に別格官幣の社格に列せられたり。

津市より南四里二十二町の處に松坂町あり。汽車に乗れば。四十分にて達するを得べし。戸數二千五百餘。此地も藩生民郷の領地なりしが。後服部一忠、古田重勝の領に移り。最後に紀伊藩主徳川頼宣に屬して明治維新に及べり。有名なる國學者本居宣長は。此地の人なりき。

宇治山田町は。國の凸出部。宮川の東にあり。此町はもと間の山成は尾部坂ともいふを境として。西を宇治と稱へ。東を山田と呼び分けしが。明治二十二年町村制の實施と共に。合して宇治山田町となり。町内には皇大神宮、豐受大神宮のおはしますを以て。諸國よ

藤原	(四十一)藤原郡中間	南豫鐵道
	余戸	出合
道後	(四十二)道後松山間	道後鐵道
	松山	
道後	(四十三)道後古町間	同上
	木原町	古町
高濱	(四十四)高濱平井河原間	伊豫鐵道
	三津	古町
久米	平井河原	外側
立花	(四十五)立花森松間	同上
	石井	森松
高松	(四十六)高松琴平間	讃岐鐵道
	鬼無	端岡
坂出	宇多津	丸龜
善通寺	琴平	多度津
		金藏寺
飯田町	(四十七)飯田町八王子間	甲武鐵道
	牛込	四谷
大久保	中野	萩窪
立川	日野	八王子

り参拜するもの年中絶ゆることなし。随つて商業の繁盛なること津市に譲らず。戸數は五千七百餘。神宮司廳、郡役所、區裁判所、警察署、神宮皇學館、神宮教院、神宮大祓局、郵便電信局、製糸場、製茶會社、病院等の建物あり。いでや謹んで兩大神宮の御事を記し奉らん。

豐受大神宮は。舊山田町の南端にあり。皇大神宮を内宮といかに對して。外宮とも稱し奉る。もと丹波の國與佐の具井原におはししとを。雄略天皇の二十二年。此處に移し奉り。豐受大神に瓊杵尊、天兒屋根命、太玉命を合せ祭れり。社殿には。多賀宮、土宮、月讀宮、風宮あり。之を四所の宮と稱し。其ほか攝社十六座、末社八座あり。境内の廣さ八十一町に渉り。神苑の接續せるもの一萬五千餘歩。世又大ならずや。社殿の構造。華美宏壯ならずして素朴清楚なるは。却つて神々しき心地せらる。

皇大神宮は。豐受大神宮を距ること三十町。五十鈴川の上流にして。舊宇治町の南端におはします。山田の外宮に對して内宮とも稱し奉る。天照天照大御神を祭り奉れり。神體は三種の神器の一つなる八咫鏡に予おはします。はじめ天照大御神。天孫瓊杵尊を天降し給ひし時。この鏡を授けまして宜はく。之を見るを尙我を見る

立川	青梅	本所	船橋	四街道	松尾	飯岡	千葉	大網	大東	佐倉	佐原
拜島 福生 羽村 小作	日向和田	平井 小岩 市川 中山	津田沼 幕張 稲毛 千葉	佐倉 八街 日向 成東	横芝 八日市場 千濱 旭町	猿田 松岸 銚子	(五十一)千葉大原間、房総鐵道	本納 茂原 岩沼 一宮	長春町 大原	(五十二)佐倉佐原間、成田鐵道	酒々井 成田 滑川 郡
(四十八)國分寺川越間 川越鐵道											
(四十九)立川日向和田間 青梅鐵道											
(五十)本所銚子間 總武鐵道											

が如くせよと。これより世々の天皇。片時も御側を離れ給はず。齋き祀り給ひけるが。第十代崇神天皇。かくては神威を演し奉らんことを恐れ思召して。神器を大和の笠縫邑に移し給ひ。宮中には。模造の品を留め給ひける。かくて第十一代垂仁天皇の御時。倭姫命。神教を受けて。此五十鈴の川上に鎮め祭り給ひしなり。爾來殆ど二千年。皇室の御尊崇深きのみならず。全國の臣民あたかも皆祖父の廟に對するが如く。東は奥州西は九州より。參宮するもの年々幾千萬人なるかを知らず。宮城は六十七町餘。神苑は一萬歩に近し。別宮には。荒祭宮、月讀宮、荒御魂宮、伊弉諾宮、伊弉册宮、瀧原宮、瀧原並宮、伊雜宮、風日祈宮を始とし。其ほか攝社二十五座、末社十六座あり。

國內の鐵道は。東海道線の名古屋より分れたるものは。四日市を経て草津より來れるものは。柘植を経て共に龜山に會して津に至る。津より宇治山田までの間には參宮鐵道あり。一時三十分にして達するを得べし。此外名古屋、四日市の中間なる彌富より。津島に至れる小支線あり。

物産は。
米 麥 藍 葛 煙草 茶 楮

上野	金町	取手	神立	友部	石神	高萩	泉	四倉	長塚	鹿島	亘理	水戸	河合	上野	茨城	鴻巣
(五十三)上野仙臺間、日本鐵道	田端 南千住 北千住 龜有 松戸 馬橋 柏 我孫子 藤代 牛久 荒川沖 土浦 高濱 石岡 羽鳥 岩間 内原 赤塚 水戸 佐和 大妻 下孫 助川 川尻 磯原 關本 勿來 植田 湯本 綴 平 草野 久濱 廣野 木戸 富岡 浪江 小高 高 原ノ町 中村 新地 坂元 吉田 岩沼 増田 長町 仙臺	(五十四)水戸太田間	太田鐵道	青柳 下菅谷 上菅谷 額田	太田	(五十五)東京前橋間、日本鐵道	田端 王子 赤羽 川口 浦和 大宮 上尾 桶川 吹上 熊谷 深谷 本庄									

第三章 志摩

志摩の國は。伊勢の國の東端凸出部に連り。三面海に瀕したる半島にして。東西三里南北七里。面積僅に二十方里に足らず。本道中最も小き國なり。されども海岸の屈折極めて甚しきが故に。其海岸線は殆ど百里に及ぶといふ。もとは管志、英虞の二郡なりしが。近年合せられて志摩の一郡となり。三重縣の管轄に屬せり。

國小にして海に近ければ。川を稱すべきほどのものあらず。神路川、加茂川などは。溝渠のやゝ大なるものと思ふべし。

山は山伏峠、逢坂山相並びて伊勢の國境に聳え。青峰山は其東に立てれども。共に高峻といふに足らず。

日和山は。國の北部伊勢海近き處にあり。名は山なれども。其實は一小丘にして。海面より高さ僅に百八十尺。日和の名は。舟人

神保原	新町	倉賀野	高崎	前橋
前橋	駒形	伊勢崎	國定	大間々
桐生	小俣	山前	足利	富田
佐野	岩舟	富山	栃木	小山
高崎	山名	吉井	福島	富岡
一宮	南蛇井	下仁田		
越名	佐野	吉水	田沼	多田
葛生				

(五十六)兩毛線 同上

(五十七)高崎下仁田間 上野鐵道

(五十八)越名葛生間 佐野鐵道

(五十九)高崎直江津間 官有鐵道

高崎	飯塚	安中	磯部	松井田
横川	熊平	輕井澤	御代田	小諸
田中	大屋	上田	坂城	屋代
篠井	長野	吉田	豊野	牟禮
柏原	田口	關山	新井	高田
直江津				

(六十)直江津沼田間

の常に巖に上りて。晴雨を觀測するより起りしなるべし。海岸の屈折甚しければ。港灣岬等の多きこといふを俟たず。日和山の麓にあるを鳥羽港といふ。東京より海路百八里。伊勢海の口に當りて。港口には。菅島、答志島、坂手島、牛島等。相並びて天然の波止場をなし。實に國中第一の良港なり。されば遠州灘、紀州灘を航行する船。風雨の慮ある時は。必ず此港に避くるを常とす。

的矢港は。國の東部の矢灣中にあり。港内波穏かにして碇泊に便なること鳥羽港に劣らず。

安乘崎は。的矢港より灣を隔て、突出したる處にして。燈臺あり。以て出入の船舶に便ならしむ。因りてまた燈明崎の一名あり。

大王崎は。國の東南に突出したる處にして。遙に紀伊の南端と相對し。熊野浦の險海を抱く。崎の近傍には。嵯峨山の如く立ちて。押し寄せ來る怒濤と戦ふさま。見るも物凄きばかりなり。

此國地僻して。歴史上に關係少きため。著名なる古跡なし。物産は海産物のみなり。其内名高きものを。

若和布 荒和布 鹿角菜 青海苔 鹿尾菜 鯛 海蝦 鱈 鰻 生海鼠

春日新田	犀潟	瀧町	鉢崎	青梅川
柏崎	北條	塚山	來迎寺	宮内
長岡	見附	帶織	三條	一木戸
加茂	矢代田	新津	龜田	沼垂
上野	田端	王子	赤羽	川口
碓	浦和	大宮	蓮田	久喜
栗橋	古河	間々田	小山	小金井
石橋	雀宮	宇都宮	岡本	氏家
片岡	矢板	野崎、西那須野	黒磯	黒磯
黒田原	豊原	白河、泉崎	矢吹	矢吹
須賀川	郡山	日和田、本宮	二本松	二本松
松川	福島	長岡、桑折	越河	越河
白石	大河原	槻木、岩沼	増田	増田
長町	仙臺	岩切、利府	松島	松島
鹿島臺	小牛田	瀬峰、新田	石越	石越
花泉	一關	平泉、前澤	水澤	水澤
金ヶ崎	黒澤尻	花卷、石鳥谷	日詰	日詰
盛岡	好摩	川口、沼宮内	中山	中山
小島谷	一戸	福岡、三戸	劍吉	劍吉

(六十一)青森線 日本鐵道

尾張の國は。伊勢の國の西にあり。北部一帯は。東山道的美濃に包まれ。西は三河に接し。南は伊勢海を隔て、遙に志摩と相對す。面積百方里餘。之を分ちて。名古屋市。愛知郡、東春日井郡、西春日井郡、丹羽郡、葉栗郡、中島郡、海東郡、海西郡、知多郡の一市九郡とす。

國の形は。匙を立てたるが如く。其柄の部分は知多郡にして。伊勢海と三河灣との中間に斗出す。之を知多半島といひ。其末端を羽豆崎(師崎)といふ。

知多半島(一名衣浦)は。三河灣の一部にして。知多半島に近き處これなり。

濃尾平原の名に因て。高山なきことを推知すべし。されど東南三河美濃の境には。飛驒、信濃諸高山の餘脈相重疊して。やゝ險峻なり。

川の大なるものは。木曾川と庄内川となり。

第四章 尾張

の類とす。

尻内	下田	古間木	沼崎	乙供
野邊地	狩場澤	小湊	淺虫	野内
浦町	青森	(六十二)青森大館間	官有鐵道	
青森	新城	大釋迦	浪岡	川部
弘前	大鰐	碓開	陣場	白澤
大館	(六十三)赤羽品川間	日本鐵道		
赤羽	板橋	目白	新宿	澁谷
目黒	品川	(六十四)小山水戸間	同上	
小山	結城	川島	下館	新治
岩瀬	福原	稻田	笠間	穴戸
友部	内原	赤塚	水戸	(六十五)小山日光間
小山	小金井	石橋	雀宮	宇都宮
砥上	鹿沼	文林	今市	日光
小高	高	原ノ町	鹿島	中村
新地	坂元	吉田	直理	岩沼
				(六十七)岩切鹽竈間
				同上

木曾川は。源を信濃に發し。美濃と伊勢との境を流れて。伊勢海に注ぐ。長流なること。すでに第二章にいへるが如し。

庄内川は。美濃の多治見川、土岐川、をよび三河の猿投川の合したるものにして。國內に入りて。更に木津川、矢田川、五條川の諸流を合せ。處によりて玉野川、勝川、枇杷島川と名をかへつゝ。遂に伊勢海に入る。流程二十二里あり。

名古屋市は。國の中央にありて。町の數三百に近く。戸數殆ど五萬商業の繁盛なること近國に比なく。實に我國三府に次げる大都會なり。愛知縣廳の所在地にして。其他第三師團司令部、控訴院等あり。鐵道の便によれば。東京へは十三時間。神戸へは八時間餘。伊勢の津へは二時三十分にて達するを得べし。

一たび名古屋の名を聞くものは。必ず天主閣の壯觀と金の鯨とに思い及ぶならん。實に名古屋城は我國第一の名城にして。市の北部にあり。今を去ること二百八十餘年。徳川家康の其子義直のために築きたるところにして。加藤清正の設計によるといふ。其棟を照せる金の鯨は。高さ八尺五寸。胴の周圍七尺餘ありて。高く閣上に相對し。金色燦爛として人の目を奪ふ。此城内今は離宮となりて。第三師團司令部は。舊二の丸の跡に置かれたり。

岩切	鹽竈	(六十八)尻内湊間	同上
尻内	八戸	湊	(六十九)手宮室蘭間
手宮	住吉	朝里	錢函
琴似	札幌	厚別	野幌
幌向	岩見澤	清真布	栗山
三川	追分	早來	沼端
錦多峰	白老	敷生	登別
輪西	室蘭	(七十)岩見澤歌志内間	同上
岩見澤	峠延	美唄	奈井江
神威	歌志内	(七十一)砂川空知太間	同上
砂川	空知太	(七十二)岩見澤幾春別間	同上
岩見澤	幌内太	幾春別	(七十三)幌内太幌内間
幌内太	幌内	同上	

市内にある神社佛閣の有名なるものは。東本願寺別院、西本願寺別院、長福寺、眞福寺、總見寺、萬松寺、極樂寺、政秀寺、東照宮、須佐之男神社等なり。

熱田町は。名古屋市の南にある要港にして。街衢名古屋市と相連なり。戸數殆ど五千あり。海陸交通の便極めてよきがため。商業の繁盛なること名古屋市に譲らず。

此地に熱田神宮あり。神體は三種の神器の一つなる草薙劍(始の名は天叢雲劍)にして。祭神は日本武尊を中央とし。天照大御神、素戔嗚尊、宮簀媛命、建稻種命を左右に合祀せり。史に曰く。日本武尊熊襲を平げ給ひてより。幾もあらずして東夷叛けりとの報達せしかば。天皇再び日本武尊に勅して往いて討たしめ給ふ。尊京を出で、伊勢に至り。神宮を拜し。御姨倭姫命に見え給ひしに。命は此時なほ伊勢にありたる天叢雲劍を取りて之に授け給ひぬ。尊進んで駿河國まで至り給ひし時。土賊伴り降りて御獵を勧め。尊の野に入り給ふを待ちて火を枯草に放ち。尊を圍みて焼討にせんとす。尊かの寶劍を抜いて四方の草を薙ぎ拂ひ給へば。火燄反つて土賊に向ひ。或は焚死し或は撃たれてまた餘類なし。草薙劍の號これに始まると。

(七十四)追分夕張間 同上
 川端 瀧上 紅葉山、清水澤
 夕張

○全國街道及宿名一覽(舊道)

(一)東海道

日本橋	品川	大森	川崎	生麥
神奈川	程ヶ谷	横濱道金澤道	(武藏相模境)	
柏尾	戸塚	江島道	藤澤	四谷
大山道	南郷	平塚	花水川	大磯
小田原	伊豆熱海	湯本	箱根七湯め	畑
箱根	(相模伊豆境)	山中	三島	
下田道今	(伊豆駿河境)	沼津	須走道甲	
原	吉原	木市場	大宮道	岩淵
興津	蒲原	由井	倉澤	興津川
阿部川	江尻	小吉田	久能山	静岡
島田	(駿河遠江境)	岡部	藤枝	三軒屋
日坂	掛川	原川	袋井	
二俣	見付	濱松	二俣道光明道	新所
舞坂	荒井	白須賀	(遠江參河境)	

鳴海町は。熱田町の西南殆ど二里の處にあり。謂はゆる東海道五十
 三次の一つなり。鳴海瀧とて。よく歌によまるゝ名所なれども。今
 は濤濱まで一里ばかりの隔たりあり。昔よりの言ひ習はしにて。今
 も然りと心得ることの。實際は意外に變遷せる事こそ世には多け
 れ。有名なる鳴海紋は。此地の産なり。
 龜崎、半田、武豊は。共に知多半島にありて。衣浦に臨める良港
 なり。大府より武豊に至れる鐵道其間を關連して。海陸運輸の便大
 によければ。市街日にますます繁盛に赴く。
 同じく知多半島に常滑町あり。伊勢海に臨めり。陶器の製造盛にし
 て。常滑焼の名世に高し。
 名古屋市の西北二里餘の處に清洲町あり。戸數僅に五百に満たざる
 小市街なれども。織田信長の居城ありしを以て。世に名あり。城趾
 今は荒れはて。丘上の老松たゞ颯々として打ち響くのみ。
 國の北境に大山町あり。戸數千八百餘の小市街なり。此地大山焼と
 いふ陶器を産すれども。其世に名高きは。大山城の天主閣今も尙殘
 れるが故のみ。此城は。天正年中長湫の戰の時。豊臣秀吉の據り
 て本陣とせし處なり。
 國の西南部にある蟹江町は。一小市街にして瀨川一益の城趾今も殘れ

(二)東海道より諸方へ分道

二川	豐橋	御油	赤坂
藤川	岡崎	矢矧	大濱
池鯉鮒	(參河尾張境)	有松	鳴海
宮	古渡	萬場	佐屋
伊勢境	桑名	富田	四日市
追分	石薬師	庄野	龜山
關上野道	坂下	(伊勢近江境)	猪鼻
土山	松尾	大野	水口
田川	石部	梅木	草津
勢田	鳥居川	石山道伏	石場
大津	追分	伏見道	京都

東京芝口より大山を経て甲
 斐大月
 芝口 赤坂 澁谷 長津田 厚木
 大山 別所 神山 竹下 御殿場
 須走 山中 上吉田
 上谷村 大月

神奈川より横須賀及鎌倉江島
 鎌倉 江島
 神奈川 横濱 關村 金澤 横須賀

知多郡の北境三河の國に近き處に。有名なる桶狭間の古戰場あり。
 史に曰く。永祿三年今川義元。大兵を率ゐて尾張に入り桶狭間に陣
 す。勢極めて盛なり。其夜大雨篠つくばかり降りしきりければ。
 義元の軍怠りて備をなすよりしに。織田信長精兵を以て急に襲ひ。
 遂に義元以下の首を斬ること二千級に及びたり。是に於て信長の威
 名俄に近國に振ふ。今川上總介義元戰死所と刻みたる一片の標
 石。茫々たる荒原に立ち。行客をして坐に懐古の情に堪へざらし
 む。
 愛知郡の織豊村に。宇を木下屋敷とよぶ處あり。傳へいふ。豊臣秀
 吉の生れし地なりと。今此處に小祠を建て。號して豊國神社とい
 ふ。
 徳川家康豊臣秀吉兩雄の會戰を以て有名なる小牧山は。國の北部に
 獨立し。水面より高きこと千二百尺。極めて形勝の地なり。史に曰
 く。秀吉山崎の一戰に光秀を誅せしより。威望俄に高く。織田氏に
 代つて天下を制御するの有機となれりければ。信長の庶子信雄快
 からず思ひ。遂に兵をあげて徳川家康に援をもとめけるに。家康直
 に之を諾し。兵を率ゐて尾張に入り。遂に小牧山を望んで曰く。これ

東海道四谷より大山を経て

- 小田原
- 四谷 一宮 田村 伊勢原 大山
- 田原 松田 關本 小田原
- 小田原より熱海
- 小田原 根府川 眞鶴 門川 伊豆山 熱海
- 湯本より箱根七湯廻り
- 湯本 塔澤 宮下 堂島 底倉
- 木賀 蘆湯 箱根
- 三島より下田
- 三島 大場 大仁 修善寺 梨本
- 蓮臺寺 立野
- 三島より今泉
- 三島 佐野 水窪 澤田 船津
- 中里 比奈 今泉
- 吉原より甲斐身延
- 吉原 小泉 大宮 富士山 粟倉
- 北山 上井手 上條 西山 内房
- 萬澤 南部 身延
- 岩淵より甲斐身延

山崎合戦に於ける天王山なりと。進んで此處に本陣を構へたり。秀吉其先んせられたるを悔い。大兵を以て攻め寄せたれども遂に勝たず。續いて家康また自ら出で、秀吉の別軍を長湫に破りたり。秀吉敗報を聞き直に馳せ向ひたるに。家康すでに兵を收めて引き去りたる後なりければ。歎じて曰く。家康は神の如しと。遂に使をやりて和を求めたりと。

さて秀吉が別軍の敗れたる長湫は。小牧山より東南愛知郡の北部にあり。郡内に名高き一村落にして。褐炭を産出す。知多郡の南方に野間村あり。平治の亂に源義朝逃れ來りて。遂に其臣長田忠致のために殺されたる處なり。後賴朝天下に覇たるに及び。父義朝の墓を此處に營みたり。其墓今も尙存す。義朝の墓の南には織田信孝の墓あり。

東海道線の鐵道は。三河より來りて大府名古屋等を過ぎ。美濃に入る。此支線二つあり。一つは名古屋より分れて伊勢に入り。一つは大府より武豊に通じて知多半島の脊骨をなす。物産には。

- 尾張大根 蓮根 甘藷 鮎 鱈
- 海參 鳴海紋 有松紋 名古屋織袴地 佐織縞

- 岩淵 松野 萬澤 南部 下山
- 八日市場 石切 歌澤 青柳 荆澤
- 百々 菲崎

掛川より秋葉を経て御油

- 掛川 森町 一瀬 大居 秋葉
- 雲名 石打 熊村 大平 巢山
- 大野 風來寺 門谷 新城 大木
- 御油
- 濱松より御油
- 濱松 一本松 氣賀 三ヶ日 嵩山
- 金谷 市田 御油

岡崎より伊奈街道信州金澤

- 岡崎 井田 岩津 桑原 中垣外
- 九久平 大島 足助 明川 武藏町
- 根羽 混合 駒場 飯田 市田
- 大島 片桐 飯島 上穂 宮田
- 四日市場 高遠 四日市場 御堂垣外
- 金澤

御油より伊奈街道信州根羽

- 御油 市田 一宮 新城 田代
- 海老 田内 田口 津具 根羽

- 保命酒 七寶燄 豐樂燄 團扇
- などあり。

第五章 三河

三河の國は。東尾張に接し。北は東山道の美濃、信濃に接し。西は一帶遠江に連なる。而して南はゆる遠州灘なり。面積およそ二百餘方里。之を分ちて碧海郡、幡豆郡、額田郡、西加茂郡、東加茂郡、北設樂郡、南設樂郡、寶飯郡、渥美郡、八名郡の十郡とし。愛知縣に管轄せらる。

南部海中に斗出せる渥美半島を切り捨つれば。地形ほとんど正方形をなす。國中に矢矧川、大平川、豊川の三大河あるより三河の名を得たりといふ。

地勢は。三大河の沿岸と渥美半島とを除けば。概ね險峻なり。殊に東北信濃の境は最も甚し。

渥美半島の末端を伊賀古崎といふ。西志摩の國と相對して伊勢海の口を成し。北尾張の羽豆崎（一名師崎）と斜に對して三河灣を抱けり。

三河灣は。中央に凸出ありて二つに分れたり。其渥美半島に近き處

宮	宮より名古屋を経て中仙道垂井
萩原	古渡 名古屋 清洲 稻葉
桑名	起 墨俣 大垣 垂井
大垣	桑名より美濃大垣
追分	香取 高須 今尾 南波
雲津	追分より伊勢山田及紀伊新宮
山田	神戶 白子 上野 津
三瀬	六軒 松坂 明星 小幡
三島	川端 田丸 原 栃原
新鹿	野尻 柏野 眞弓 長島
那知山	馬瀬 三鬼 曾根 二鬼島
關	大泊 有馬 阿田和 新宮
關	關より伊勢津
關	楠原 棕本 久保田 津
關	關より加太越伊賀上野
土山	加太 佐那具 東條 上野
八日市	土山より日野を経て武佐
	鎌懸 日野 石原 岡本
	佐武

を渥美灣といひ。尾張の知多半島に近き處を知多灣(一名衣浦)といふ。

山の最も高きものは風來寺山なり。國の東方遠江の境に近き處にありて、直立五千百餘尺。山の半腹には有名なる風來寺あり。推古天皇の勅願によりて僧利修の創めしものなりとぞ。堂宇の壯大人の目を驚かすが中にも、飛彈の匠の手に成れりといふ開基堂は最も精巧を極めたり。

風來寺山より北に進めば、高山峻嶽相連なりて數かべからず。其著名なるものをあげれば、三國山、本宮山、檜原山、大沼山、明神山、八嶽、段戸山等なり。中にも段戸山最も著はる。

川の最も大なるものは矢矧川なり。源を美濃の國に發し。國の西部に入りて、足助川、巴川、大平川の諸流を合せ。遂に知多灣に注ぐ。流程二十八里餘河口に架したる矢矧橋は、長さ二百八間ありて古來有名の長橋なり。傳へいふ。豊臣秀吉幼時此橋上に臥し。蜂須賀小六に遇ひて遂に盜賊の仲間に入れりと。

第二の長流を豊川とす。源を北境なる明神山より發し。數箇の小流を合せつ。西南に流れて遂に渥美灣に注ぐ。流程十七里半なり。太平川(一名男川又は大屋川)は源を國の中央部に發し。西流して

勢田	勢田より伊賀上野
宇治橋本	關ノ津 櫻谷 龍門 田原
鳥居川	鳥居川より石山を経て伏見
伏見	石山 岩間 醍醐 六地藏
東京本町	(三)奥州街道
大澤	千住 草加 越谷
栗橋	粕壁 杉戸 幸手 越谷
(下總下野境)	(武藏下總境)
新田	野木 中田 古河
宇都宮	小金井 石橋 間々田 小山
佐久山	大田原 鍋掛 越堀 喜連川
白坂	大田原 鍋掛 越堀 喜連川
南根田	白川(下野磐城境) 追分 仙臺
新田	小田川 大田川 踏瀬 大和久
城岩代境	矢吹 名來石 笠根田 (磐)
原田	須賀川 笹川 日出山 小
本宮	郡山 福原 日和田 高倉
八丁目	南杉田 二本松 油井 三本柳
	若松 清水寺 福島 瀬上

遂に矢矧川に合す。

太平川と矢矧川との中間に岡崎町あり。徳川氏創業の地これなり。初め徳川清康(家康の祖父)此地を本領とし。次第に近郷を略收して。子廣忠に至り勢いよく盛なりき。廣忠死するに及び嗣子家康幼なりしかば。今川義元好意を示し代つて領内の政を行ひしが。義元桶狭間に於て織田信長のために殺さるゝに及び。岡崎は再び徳川氏の手歸したり。後家康天下を統一するに至り。本多康重を此地に封じ。以後相ついで明治維新に及びたり。實に國內第一の都會にて戸數四千三百あり。

豊川の南岸には豊橋町あり。戸數人口等岡崎町に相譲らず。此地初は徳川家康の所領なりしが。後に松平信祝の有に歸し。子孫相ついで明治に及び。其城址は今第一師團歩兵第十八聯隊の營所となれり。此地製造の花火は大に好評を博し。近年他の都市へ賣り出だす高極めて巨大なりとぞ。

豊橋町より豊川の流に沿ひ。北に上ること五里半餘にして新城町に達す。戸數僅に八百ほどの小市街なれども。近年豊橋と此町との間に鐵道を敷設し。交通の便大に開け。日にますます繁盛に赴けり。また豊橋町より東海道線の汽車に乗れば。十九分にして御油村に達

桑折羽後山形	藤田	貝田	越川
齋川	白石	刈田宮	(岩代陸前境)
金ヶ瀬	大河原	舟迫	槻木
常陸水戸	増田	中田	長町
道後松島道二日越	七北田	新町	吉岡
道後谷越道あり	三本木	古川	荒谷
	宮野	渡邊	金成
	陸中境	一關	山目
	金ヶ崎	鬼ヶ柳	花卷
	郡山	盛岡	澁民
	(陸中陸奥境)	全田市	三戸
	五戸	傳法寺	藤島
狩場澤	小湊	中野	野内
			野邊地
			青森
			千住より水戸を経て陸前岩沼
			(武藏下總境)
			松戸
			(下總常陸境)
			土浦
			小幡
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神
			小水津
			助川
			下孫
			枝川
			佐和
			石神

熊倉	大鹽	榎原	(岩代羽前境)
網木	關	米澤	糖目
赤湯	川樋	小岩澤	中山
川口	松原	山形	天童
宮崎	長泥	楯岡	本飯田
尾花澤	名木澤	新庄	船方
乃位	(羽前羽後境)	下院内	湯澤
横手	金澤	六郷	大曲
神宮寺	北楯岡	刈和野	境
戸島	久保田	土崎湊	大久保
大川	一日市	鹿渡	森岡
金光山	檜山	鶴形	飛根
小繫	今泉	前山	綴子
大館	釋迦内	(羽前陸奥境)	碓関
弘前	藤崎	女鹿澤	新城
福島	庭板	李平	板谷
米澤	桑折	より山形湯殿山を	經て久保
桑折	藤枝	三軒家	小坂
下戸澤	渡瀬	關	滑津
			峠田

く。近海には暗礁多ければ。航海の危険を避けしめんためて、に燈臺の設あり。

御前崎を除けば。海岸の屈折極めて少なし。但し西方に濱名灣あり。

濱名灣はもと湖なりしが。今より四百五十餘年前明應八年。海嘯のため崩決して遂に海と變ずるに至れり。其灣口を今切といひ。東海道線の鐵道は。此處に橋を架して渡り行くなり。橋の中央に至るころ汽車の窓より眺むれば。前後左右茫々たる海にして。身は恰も汽船にあるの思ひあるべし。

山の高きものは黒法師山、朝日嶽、大日山、龍頭山、秋葉山、光明山等なり。中にも黒法師山は。海面より高きこと七千餘尺にして。國內第一の高山なり。位置は國の北部信濃の境に近き處なり。秋葉山は黒法師山よりや、南にあり。山上には有名なる秋葉神社あり。迦具土神を祭る。

大日山は秋葉山の東部に峙ち。黒法師山と共に三方鼎立の觀あり。海面を抜くこと殆ど三千尺。山腹には金剛院あり。大日如來を祭る。

川の大なるものを大井川、天龍川とす。

湯原	(岩代羽前境)	千浦	上山
松原	山形	船町	長崎
白岩	海吹	追分	水澤
湯殿山	志津	田麥	大綱
鶴岡	若松街道の端にあり	仙臺より松島金花山	
仙臺	馬場	野尻	二口
山形	仙臺より笹谷越山形		
仙臺	鍵取	茂庭	赤石
小野	川崎	野上	笹谷
新山	山形		
東京	赤坂	四谷	内藤新宿
下高井戸	上高井戸	布田國領	
同上石原	府中	日野	八王子
			駒木

大井川は源を信濃の境なる白根山中に發し。南流して東駿河の堺をなし。關澤川、寸又川および其他の小流を合せ。駿河灣内に注ぐ。流程五十里に近く。川幅の最も廣き處は殆ど十二町ありて下流には東海道鐵道の鐵橋を架す。昔し東海道驛路を過ぐる旅人は必ず此川を肩車又は手輿にて渡されしこと錦繪などにて人のよく見る處ならん。

天龍川は源を信濃の諏訪湖より發し。國の中央を貫きて南に流れ。氣田川、阿多古川其他の小流を合せて。遂に遠州灘に入る。流程殆ど大井川に等し。

最も繁華の市街を濱松町とす。國の西南部濱名灣に近き處にありて。戸數は三千五百餘なり。此町初は徳川氏の領所なりしが。移りて。井上氏の有に歸し遂に明治維新に及べり。

濱松町より西四里の處に井伊谷の宮あり。後醍醐天皇の皇子、新葉和歌集の撰者として御名ある宗良親王を祭り奉る。史に曰く。延元三年宗良親王遠江の國井伊谷の城に據りて兵を擧げ給ひぬ。されども當國は直義守護の國なれば。賊軍に應ずるもの多くして。親王を助け奉るもの無かりければ。親王即ち去つて吉野に赴かせ給ひぬ。後尊氏直義西國に走るに及び。親王再び此地におはして恢復を圖り

小佛	(武藏相模境)	小原	與瀬
吉野	關野 (相模甲斐境)	上野原	
鶴川	野田尻 犬目 鳥澤	後橋	
駒橋	大月 下花咲 上花咲	下初狩	
中初狩	白野 黒野田 駒飼	鶴瀬	
勝沼	栗原 川中島 石和	板垣	
府中	葦崎 臺ヶ原 教來石	(甲斐)	
信濃境	葦木 金澤 上桑原	上諏訪	
富部	下諏訪		
(六)中仙道			
日本橋	追分 板橋 碓	浦和	
大宮川	上尾 桶川	鴻巣	
本庄	(武藏上野境) 新町 倉賀野	深谷	
松井田	坂本 (上野信濃境)	輕井澤	
沓掛	追分 小田井		
岩村田	八幡		
望月	長窪 和田 下諏訪		
警川	奈真井 敷原 宮腰		

給ひしが。事未だ成らずして竟し給ふ。新葉集は此間の御つれぐに撰ばせ給ひしなりと。御墓は本社の後にある。山を食ひ濱名灣に臨み。風景極めてよし。其他國內の小市街を數ふれば。御前崎と大井川との中間なる海濱に川崎町、相良町あり。相良町には天正年中高坂彈正の建築したる城趾あり。天龍川の河口より東一里餘の處に山名町あり。町の西一里の處には中泉町あり。古へ國府の置かれし地にして。家康濱松にありける時此處に別邸を設け。しばく來り遊びしといふ。濱名灣の西岸には新居町、鷲津町あり。濱松以西の繁華なる町なり。また濱松より五里半の北に二俣町あり。戸數五百に足らぬ小邑なれども。文龜年中二俣昌長の築きたる城趾の存するを以て。其名近郡に高し。國內の鐵道は。東駿河の國より來れる東海道線の。藤枝、島田、掛川等の小停車場を繞ひて濱松に入り。遂に今切の長橋を渡りて西三河の國に走れる一線あるのみ。物産は。

福島	上松 須原 野尻 三富野
妻籠	馬籠 (信濃美濃境)
落合	中津川 大井 尾張内野
大湫	細久手 御嵩 伏見 太田
河渡	美江寺 赤坂 垂井 美濃近
關原	今須 (美濃近)
江境	柏原 醒井 米原 番場
北國道	鳥居本 高宮 度道 守山
草津	越智川 武佐 鳩川 守山
(七)中仙道より諸方へ分道	
追分	追分より岩槻を経て熊谷
大門	岩槻 篠津 騎西 佐間
熊谷	熊谷より厩橋を経て布施
熊谷	中瀬 境町 伊勢崎 駒形
厩橋	八崎 白井 上白井 沼田
政所	月夜野 布施 熊谷より秩父

駿河の國は。西大井川を以て遠江に堺し。東は相模伊豆の二國に接し。北部は一帶東山道の甲斐、信濃に連なる。而して南は一面駿河灣に臨む。面積二百餘方里ありて之を静岡市、駿東郡、富士郡、庵原郡、安倍郡、志太郡の一市五郡に分ち静岡縣の管轄に屬す。地形をいへば。甲斐の國は北より其中部に突入して。殆ど東西に分せんとし。其代として。西北の一隅長く伸びて甲斐、信濃の間に分け入り。極めて不整なる凹字形をなせり。北境には我國第一の高山なる富士山あり。東方には有名なる箱根峠あり。されば地勢の險峻なるは言ふを俟たされども。南方沿海の地は意外に平坦にして。殊に地味肥え農産に適せり。駿河灣は前章に於て述べたる如く。遠江の御前崎と伊豆の石廊崎との。東西相對して抱ける一大灣にして。灣の西岸に三俣崎の突出せ

第七章 駿河

濱名納豆 葛粉 松茸 椎茸 石灰
石腦油 茶 砂糖 墨表 蒲葦
大井川の石斑魚 濱名灣の鰻
などの類最も著名なりとす。

熊谷	小前田	矢那瀬	金崎	大野原
坂本	増尾	菅谷	高坂	
本庄	長瀬	藤岡	吉井	福島
富岡	一宮	南蛇井	下仁田	本宿
初島屋	追分			
倉賀野	倉賀野より日光			
倉賀野	玉村	五料	芝	堺
木崎	太田	八木	梁田	天明
大伏	茂呂	富田	栃木	合戦場
金崎	楡木 <small>壬生道</small>	鹿沼	文挾	
板橋	今市	日光		
高崎	高崎より越後寺泊			
高崎	金古	澁川	横堀	中山
塚原	布施	須川	淺見	二居
三俣	湯澤	關	鹽澤	六日町
五日町	浦佐	堀内	川口	妙見
十日市	長岡	與板	地藏堂	寺油
高崎	高崎より伊香保及信州善光寺			
高崎	箕輪	柏木	伊香保	五町田
中ノ條	原町 <small>四萬温泉道</small>	原町 <small>湯温泉道</small>	郷原	大戸

る外。海岸に大なる凸凹なし。三保崎は。駿河灣の西部より遙に突出せる長洲にして。無數の青松は白砂の上に立ち並び。遠く之を望めば。一帯の松林海上に浮べるが如く。其風景實に筆紙に盡すべからず。之を三保の松原といふ。三保崎を天然の波止場としたる港を清水港なれ。國これ内海に其港にして。横濱神戸間を往復する汽船。其他伊豆相模等へ定期航海する船舶常に輻湊し。隨うて市街の商況日にますます繁盛を極む。近年特別輸出港に指定せられたり。

三保崎より南に進めば。海岸の白砂球を敷きたるが如く。前には遠江の御前崎あり。左には伊豆の半島深砂とて見へ隠れ。風景極めてよし。此間を有度濱と稱へ。古來詩歌に賞したるもの多し。天人の天降りて羽衣を松に掛けたるといふ空想傳の傳へらるるも此處なりとす。

有度濱の近傍に草薙神社あり。日本武尊を祭る。尊の賊難に遭ひて草を薙ぎ給ひしはすなはち此處なりといふ。

また三保崎より北を轉じて北に向へば。奇岩怪石海中に立ち並びて寄せ来る荒波を防ぎ。海水浴に最も適當せる處に至る。これを清見瀨とす。此地海水浴に適するのみならず。南は三保の松に對し。後

須賀尾	長野原	中居	大前	大登
田代	仁禮	眞田	竹花	屋代
松代	川田	福島	長野	善光寺
追分	追分より善光寺を経て越後高田			
追分	小踏	田中	海野	坂木
下戸倉	屋代	篠井	丹波島	
善光寺	牟禮	柏原	野尻 <small>(信濃)</small>	
越後境	關川	田切	關山	松ヶ崎
荒井	高田			
鹽尻	鹽尻より飯田を経て妻籠			
鹽尻	小野	松島	殿村	伊奈部
宮田	上穂	飯島	片桐	大島
市田	飯田	一之瀬	大平	廣瀬
妻籠				
洗馬	洗馬より松本を経て善光寺			
洗馬	郷原	村井	松本	刈谷原
會田	青柳	麻績	桑原	稻荷山
篠井	丹波島	善光寺		
篠原	篠原より飛騨高山			
篠原	萩曾	奈川	野麥	中宿
黍生谷	甲村	高山		

には富士の高嶺の千秋の雪を戴いて舞ゆるあり。東は山部赤人の歌を以て有名なる田子の浦に連なりて。頗る眺望に富めり。

山にてまづ第一にいふべきは富士山なり。富士山は國の北境にありて甲斐の國に跨り。海面より高きこと一萬二千三百七十尺。實に本土第一の高山にして。頂上の雪は四時融くることなく。他の山脈に連ならずして獨立し。何れの方面よりみてもしく樹林を伏せたる如く同じ形に見ゆるなり。此山古へは火山なりしが故に。金山麓石より成りて樹木生せず。頂上には舊噴火坑ありて。外郭の周圍五十町。内郭の周圍三十町あり。以て其大なるを思ふべし。坑底には千秋不盡の雪を滿たし。其高潔なる實に名狀すべからず。噴火坑の南には國幣中社淺間神社ありて。木花咲耶姬に瓊々杵尊、大山祇命を併せ祭る。

明治二十九年の冬野中至氏。此絶頂に氣象觀測所を設けて年を越へんと企てしが。中途病にかかりて遂に下山せり。氏は再び登山して素志を遂ぐべしといへば。其成功の日は大に氣象學を益することなるべし。

山には東西南北に登り口あり。且山麓より頂上までを十合に分ち。一合目毎に石室ありて。宿泊飲食の需めに應ずるが故に。登山者

中津川	苗木	福岡	田瀬	付知
加子母	御馬野	乗政	湯島	萩原
小坂丁	久々野	高山		
太田	上川邊	大塚	荒張	金山
下原	三關	保井戸	塚田	湯島
萩原	小坂丁	久々野	高山	
大井	大井より名古屋を経て伊勢桑名			
池田	竹折	釜戸	土岐	高山
津島	内津	坂下	勝川	名古屋
太田	佐屋	桑名		
太田	太田より上加納			
關村	苅見	岩田	上加納	
鷲沼	鷲沼より名古屋を経て三河平坂			
平針	大山	小牧	勝川	名古屋
西尾	上伊田	四郷	翠母	矢矧
加納	上加納	岐阜	高宮	西郷
上長瀬	名禮	谷汲	長良	島村

には極めて便利なり。下山道は登山の道と異なり。すべりと稱へて小砂利の上を這り上るゝが故に。一步に數尺二歩に一丈。飄々とし風に乘じ空中を飛ぶが如く。絶頂より山麓まで僅一時間にして達することなれば其快いふべからず。されども富士山は遠方より見ることを上けれ。登山すれば其大に打たれて却つて意外の思ひ多し。富士山の麓なる一帯の曠野を富士の裾野といふ。曾我兄弟の父の仇を報いて芳名を千載に留めしは此處なり。史に曰く。建久四年五月二十七日征夷大將軍源頼朝富士の裾野に巻狩を催す。曾我十郎五郎は之を機として。父の仇工藤経経を討ち取らんと欲し。母にはそれとなく別を告げて立ち出で。諸士にまじりて待すを見せ。経経の姿をのみ求めけるが。遂に得る能はざりしかば。志を決して其夜経経の待館に討ち入り。勇ましく本意を遂げたり。さて兄の十郎は頼朝が手のものに斬られ。弟の五郎は捕へられしがこれもまた殺されたりと。二人の墓は裾野の一部なる鷹岡村福泉寺内にあり。地僻せるがため詣づる人も少なく。今は墓の道に草生ひ茂りぬ。富士山に次ぎて高きは。相模の境にある足柄山なり。されどもこれは相模の草に覆り久能山に移らん。久能山は三保崎の西南にあり。山甚だ高からねど山上に久能神社の

八幡	赤坂	垂井より高須を経て桑名		
垂井	高田	石畑	柏尾	桑名道
福岡	高須	香取	桑名	
關原	關原より木本を経て若狭小濱			
木本	玉宿	藤川	春照	伊部
楠林	下餘香	柳瀬	刀根	匹田
甘笠	坂尻	氣山	三方	倉見
鳥居本	鳥居本より木本			
木本	下矢倉	米原	長濱	速見
鳥居本	鳥居本より彦根八幡を経て守山			
江頭	彦根	伊庭	香之庄	八幡
京都三條	大津	草津	守山	
武佐	越智川	宮高	鳥居本	中仙道に
米原	長濱	速見	木本	中郷
柳瀬	椿市	中河内	板木峠	近江
越前境	板取	今庄	湯尾	鯖波

あるを以て名あらはる。久能神社は徳川家康を祭れるところ。は七め元和二年家康薨せし時。遺骸を此山上に葬りて一祠を建てしが。翌年更に上野の日光山に改葬して東照宮の神號を賜はりし時。久能山のも同じく東照宮と改稱せり。今の久能神社すなはち是なり。山上より眺むれば富士の高嶺は足柄山と相對して東北に峙ち。田子の浦、清見瀨、三保の松原等相連なりて眼下にあり。富士山上の眺望は壯大にして。久能山よりの眺望は清美なりといふべし。久能山の南に當りて賤機山あり。山は極めて低けれども。眺望のよきと今川義元の古城跡なるを以て名高く。其南麓は即ち静岡市なり。其他富士山の南方に愛鷹山あり。久能山の北方に龍爪山あり。其西北には大無間山あり。甲斐の身延山に連なりたる白根山あり。信濃に跨りたる赤石山あり。いづれも頗る高し。川にて最も名高きは富士川なり。源を甲斐の國より發し。國の四部より流れ入りて遂に駿河灣に注ぐ。兩岸には奇石並ぶ峙ち。水流の速なること比類なし。これに羽前の國の最上川、肥後の國の球摩川を合せて日本の三急流と稱す。慶長年中徳川家康此川を開鑿して河口に近き富士川村より甲斐の國歐澤といふ所まで。十八里間の水

藤本	今宿	府中	請江	長泉寺
水落	江尻	浅水	福井	飛騨高山
森田	長崎	金澤	柿原	細呂木
(越前加賀境)	立花	大聖寺	動橋	
月津	小松	寺井	粟生	水島
松任	野々市	金澤	津幡	竹橋
(加賀越中境)	俱利迦羅峠	今ゆするぎ		
立野	高岡	小杉	追分	富山
滑川	魚津	三門市	浦山	船見
泊宿	(越中越後境)	市振	外浪	
遠海	糸魚川	梶原敷	能生	名立
有馬川	長濱	五智	中屋鋪	高田
春日新田	黒井	片町	柿崎	
鉢崎	近江川	鮎波	柏崎	宮川
榎谷	石地	出雲崎	佐渡津	海上
山田	寺泊	彌彦	岩室	赤塚
新編	津島	沼垂	松崎	次第濱
築地	桃崎	鹽谷	岩船	村上
津津	鹽田	武動	大澤	中村
田中	大川	(越後羽前境)	鼠ヶ關	
湯見	玉瀧	大山	濱中	(羽前)

路を作りたれば。大に交通の便を增せり。素より急流の事なれば。沂る時は綱にて曳きのぼすかため二晝夜を要し。舟子の勞甚だ大なれども。下る時は急奔矢を射る如く。六時間にて達することを得。此川の河口がかし。平維盛の水鳥に驚かされて身法の名を萬世に流しつるは。史に曰く。源賴朝伊豆より起りて近國を平け。相模の鎌倉に軍を留めて。勢甚だ盛なるよし聞えければ。清盛大に驚き。嫡孫維盛を大將とし大軍を率ひて往いて討たじめたり。賴朝も之を聞きて鎌倉を出で。駿河に入り。富士川を狹みて對陣せしが。其夜平軍水鳥の群立つ羽音に驚き。取はずして遁れ去れり。國の西境を流る。大井川の事は。前章遠江の部に述べたればこゝにはいはず。富士川と大井川との中間を流る。安倍川は。源を國の北部に發し。萬科川、足久保川等の諸流を合せ。静岡市の西南を過ぎて海に入る。流程十六里餘。下流には東海道鐵道の鐵橋あり。此他の小流には。國の東部に狩野川あり。沼津町の東を流れ。中央部には興津川あり。興津町の東を流る。西部には瀬戸川あり。瀬戸村を過ぎて海に入る。國内最も繁華の市街を静岡市とす。國の西南部にありて。戸數殆ど

飛騨境	酒田	吹浦	小砂川	鹽越
木浦	平澤	本庄	松ヶ崎	道川
新屋	秋田	土崎	此川	大川
一日市	鹿渡	森岡	豊岡	檜山
鶴形	飛根	荷揚場	小繁	綴子
川口	大館	釋迦内	(羽後陸奥境)	
磯園	弘前	藤崎	女鹿澤	新城
油川	蓬田	蟹田	平立	母衣月
今別	三厩			

(九)北國街道より諸方へ分道
 大津より比良を経て今庄
 唐崎 下坂本 絹川 榎木
 木戸 比良 小松 大溝 河原市
 今津 海津 山中 駄口 疋田
 榎原 新保 二屋 今庄
 福井より飛騨高山
 福井 大野 飯野 門原
 下山 鷺 餅穴 羊原 白鳥
 保木鳥 向ひすみ、野々俣 新瀧
 黒谷 もまい なつま 三日市 高山
 富山より飛騨高山

八千五百。實に東海道中屈指の都會なり。徳川氏の時此地に國府を置き。駿府又は府中と稱せしが。明治維新に至りて今の名に改め縣岡縣廳を遷かる。舊城趾は市の東北部にあり。天正年中徳川家康の築きし所にして結構壯麗なりしが。寛永十二年類焼にかたり。今存するは本丸、二の丸、三の丸のみなり。鐵道の便によれば東京へは七時間餘。神戸へは十四時間餘にして達するを得べし。且つ三里餘の東には清水港ありて海運の便も極めてよし。國の東部には沼津町あり。狩野川其東を流れ。富士、愛鷹の高峰其背部に峙ち。南は風光明媚なる駿河灣に臨む。戸數は二千餘ありて國內第二の都會なり。此地今川義元の居城ありしが。廢して今は遺蹟だに存せず。國の東北部に東海道鐵道の御殿場停車場あり。御殿場の名は。古へ徳川家康の遺骨を當國久能山より下野の日光山に移すとき。此地に旅館なかりしため。後に御殿を設けしに起れりといふ。富士登山者は多く此處より下車す。當國各停車場の近傍には。名勝舊跡極めて多し。まづ御殿場より佐野、三島、沼津の三停車場を過ぐれば錦川に至る。其西方四里の處に大宮町あり。舊甲州街道にして。富士山表口に餘るものは必ず此

富山	大宮	大くつ	笹津	乘原
鹿谷	片掛	湯谷	蟹寺	加賀澤
小豆澤	杉原	空穂	三川原	落合
大むかり	野口	古古	廣瀬	追分
保木	高山			
	新潟より岩代若松			
新潟	木崎	新發田	五十公野	
米倉	山口	赤谷	綱木	新谷
行地	津川	天満	野村	燒山
福取	八田	古川	白坂	野澤
高田	舟渡	塔寺	坂下	高久
若松				
	新潟より羽前米澤			
新潟	木崎	直野	橋地	中條
黒川	大島	關	沼澤	玉川
小國	野々市	白子澤	午ノ子	松原
小松	米澤			
	(十)東京より陸方への道川越を			
	經て三峰山			
東京	板橋	上板橋	下練馬	白子
藤野	大和田	大井	松郷	川越

處よりするなり。此地に著名なる淺間神社あり。木花咲耶姫命に
 理々神尊と大山祇命とを合祀し。社務は國幣中社なり。富士山上
 のは即ち此社の奥院なり。
 興津町は。東海道五十三次の一にして。鈴川より停車場二つ隔てた
 る處にあり。清見洞の絶景は即ち此海濱にして。清見寺は沿津の古
 きよりも寧ろ眺望を以て世に著る。日蓮宗の遺蹟あり。其地は古
 鐵道は前記の東海道線が東より西に貫通せるのみ。
 物産にて著名なるは。
 富士石 黒水晶 馬蹄石 興津鯛 膳橋木綿
 竹細工 茶 藍 砂糖 鹽
 松茸 椎茸 麥菓細工
 の類なり。

第八章 甲斐

甲斐の國は。南駿河の國と大牙の如く相交はり。西北は信濃の國に。
 東北は武藏の國に接し。東は相模の國に連なる。其駿河の境には富
 士山、白根山あり。信濃の境には駒嶽、八嶽あり。武藏の境には雲
 取山あり。四面高峻なる山を廻らし。實に我國第一の山國なり。面

高坂	菅谷	小川	安戸	坂本
三澤	大宮	熱川	大輪	三峰山
	飯能通り			
東京	四谷	柳澤	所澤	黒嶺
飯能	我野	小丸	茅久保	大宮
	大倉隆越を經て甲斐府中			
東京	新宿	成子	森窪	田無
小川	新町	青海	澤井	棚澤
米川	小河内	鴨澤	丹波山	この間大善
小田原	於曾	井尻	栗原	石和
府中				
	成田を經て銚子			
東京	行徳	舟橋	大和田	白井
佐倉	酒々井	成田	加茂	本古
八日市場	成田	松岸	本庄	銚子
	常陸鹿島道			
東京	市川	八幡	釜ヶ谷	白井
龜成	木風	安食	滑川	源太
佐原	小見川	笹川	小舟木	これより
鹿島				
	安房洲崎			

積殆ど三百方里。これを分ちて、甲府市、東山梨郡、西山梨郡、東
 八代郡、西八代郡、南巨摩郡、中巨摩郡、北巨摩郡、南都留郡、北
 都留郡の二市九郡とし。山梨縣廳の管轄に屬す。
 山國なれば地勢の險峻なることは當然なり。然れども中央はや、平
 坦なる高原にして。殊に富士川の沿岸には農作に適する土地多し。
 白根山は西方信濃の境に突起し。海面より高きこと二萬二百十二尺。
 實に富士山に次ぐの高山なり。
 白根山より南に當り。駿河の國境に近き處に七面山あり。海面より
 高きこと七千二百尺餘。其脈東に伸びて一支峰を起す。これ即ち身
 延山にして有名なる久遠寺のある處なり。
 久遠寺は日蓮宗の總本山にして。身延山の南麓にあり。日蓮の傳に
 曰く。文永十二年日蓮諸方を教化しつゝ甲斐の國に來りしに。波木
 井の城主南都實長深く其教旨に感じ。身延山を寄進したりければ。
 日蓮やがて一草庵を營みてここに居たり。後堂宇を建て久遠寺と
 稱せしが。日蓮の死後其高弟日朝寺を山の南麓に移して大伽藍を造
 立したりと。この日朝遺營の伽藍は先年焼失して。今のは近年の新
 築に係れり。規模の宏大彫鏤の精巧。實に人目を驚かすに足る。
 身延山の絶頂に上れば。安房上總の山々一目の下に集り眺望極めて

東京 行徳 舟橋 馬加 檢見川
 登戸 千葉道 寒川 曾我野 濱野 八幡
 野州小浜 五井 姉崎 木更津 貞本
 佐貫 湊 金谷 本郷 加知山
 那古 北條 館山 大賀 洲崎
 (十一) 中國街道
 京都 朱倉川 中島 淀川 山崎
 (山城攝津地) 芥川 氷室 十日市
 郡山 牧落 瀬川 石橋 大鹿
 昆陽 西宮 中村 生田 神戸
 兵庫 長田 西須磨 (攝津播磨境)
 大瀬谷 明石 大久保 加古川 魚橋
 姫路 諸方(道) 下野 正條 片島
 原田 有年 (播磨備前境)
 西片上 吉井 一日市 藤井 岡山
 一宮 (備前備中境) 宮内 板倉
 (備中備後) 川邊 矢野 七日市 高屋
 (備中備後) 下御嶽 川北 神戸
 山手 今津 尾道 三原 (備後)
 安藝境) 本郷 田高里 西條 上野野
 海田市 府中 廣島 川田 皆賀

上。久遠寺の本堂より斧心と五十間あり。此處に奥の院、思親閣、東照宮などあり。思親閣は、日蓮此山に籠りける時、しばし此峰に上りて、遙に故郷の安房を望み、父母を思ふの情切なりしより、後人の命せし名なりといふ。

白根山の北方に重疊せる高山を數ふれば、鳳凰山は海面を插ぐこと八千八百餘尺、鷹岳は九千九百餘尺、八岳は九千九百餘尺、金峰山は八千五百五十尺なり。金峰山の通東南には天目山あり。山高からずといへども、武田勝頼の戦死せし古跡なるを以て著名なり。史に曰く、天正十年織田信長兵を率ゐて甲斐に入る。勝頼迎へ戦ひて遂に敗れ、天目山に逃れ入りて自殺せりと。山麓なる長徳院には武田氏の靈を祭り、其時代の遺物今も尙殘れり。

富士川は國內第一の大河にて、南流して駿河の國に入る。其水源三つあり。一を釜無河といひ、一を片川といひ、一を富吹川といひ。三河合して初めて富士川の名あり。日本三急流の一なること。および舟運の便あり。故に、前章駿河の節に於ていひおぼしめし、中央の山嶺、富士川は、源を東南の山中湖に發し、管子川、櫛川、境川等の諸川を合せ、南流して東流して相模の國に入り、馬入川(一名相模川)と名かゝる海に注ぐ。

甘藷市 宮内 玖波 (安藝周防境)
 關戸 玖珂 高森 今市 呼坂
 久保市 花岡 久米市 徳山 富田
 福川 富海 宮市 西佐波合
 小郡 (周防長門境) 山中 船木
 厚狭布 吉田 小月 清末 豊浦
 前田 赤間關 同南部海上三層 (長門)
 豊前境) 小倉 (豊前筑前境) 尾倉
 黒崎 木屋瀬 直方 飯塚 瀬戸
 内野 山家 朝日 原田 (筑前)
 肥前境) 官浦 田代 森木 中原
 吉田 田手 神崎 境原 佐賀
 周長瀬 牛津 同新町 山口 上小田
 志外 鹽田 馬場 下村 嬉野
 彼杵 千綿 江串 松原 今津
 大村本町 同田町 永昌 小船越 貝津
 矢上 日見 長崎

(十二) 中國街道より諸方へ分道
 瀬川より有馬を経て播磨坂
 本
 瀬川 池田 多田院 中山寺 安倉

其他尙小川多しといへども、いづれも富士川と桂川との支流なれば。類はしむ名を列挙せず。

桂川の水源なる山中湖は、富士八湖の一にして、東西二里二十八町、南北十二町、周圍三里十二町あり、國の東南隅にありて富士山よりは東に當れり。

山中湖より西北、富士山よりは正北に當りて河口湖あり。富士八湖中最も大なるものにして、東西二里、南北一里、周圍殆ど五里あり。湖中にある一小島を鷓鴣島といひ、富士の眺望に最も適せり。

河口湖の西南に當りて精進湖、西湖、本栖湖あり。共に富士八湖の一にして、精進湖は東西一里、南北二十町、周圍二里半、西湖は東西一里十五町、南北三十町、周圍三里半あり。傳へるに、此二湖古へは相連續せしが、貞觀六年富士の噴火と共に地變を生じて二つに分れたりと。本栖湖は東西一里、南北一里餘、周圍三里餘あり。本栖湖より西北富士川の上流に近き處に蝦蟇あり。其絶頂に直徑十三町周圍一里の圓形の湖あり。いはゆる四尾連湖にして、これまた富士八湖の一なり。此山の半腹には村上義清の城趾と武田信玄烽火臺との跡あり。

甲府市は國の中央にあり、山梨縣廳の所在地にして、戶數殆ど七千

湯山	道場	三田	廣野	上相野
立杭	清水寺	上鴨川	上三草	社村
繁昌	坂本	坂本	國包	太郎太夫
姫路	畑村	淡河	西尾	湯山
三木	三木	淡河	西尾	湯山
姫路	東中島	仁豊野	新町	前之庄
安志	山崎	下三河	口長谷	平福
(播磨美作境)	注堂	古町	坂根	
(美作因幡境)	駒蹄	知頭	用ヶ瀬	
奥田	谷一木	鳥取	同新田治	
徳尾	吉岡	志加奴	鷲峰	(因幡)
備前境)	門前	倉吉	岡田	國府
上伊勢	赤崎	波田井	大山	尾高
豊田	手野	津山	及米子	を経て松江
下手野	飾西	追分	嘴崎	千本
三日月	乃井野	下徳久	佐用	早瀬
(播磨美作境)	土居	樽原	北山	
野間田	野介代	津山	院在	坪井

二百。街衢端正にして商業繁盛に。山國には珍しき都會なり。此市はまた鐵道の敷設ありすといへども。甲州街道、秩父街道、駿河街道、信濃街道等の諸道ありて。四方への交通には大なる不便を感せず。東京へは三十五里、静岡へは二十七里、信濃の長野へは四十三里あり。

甲府城は淺野長政の居城なりしが。後移りて徳川氏の將柳澤吉保其城主たり。今は天主閣を壊ちて僅に石垣を殘せるのみ。

甲府市より北八町許の處に武田氏の城址あり。永正年間武田信虎の築きたる所にして。傳へて信玄勝頼に至り。遂に織田信長に壞たれり。此處草莽茫茫たる間に信玄の墓あり。

甲府市より東北三里餘の處に。笛吹川の清流を前に扣へ。後に一帯の兵隊を容れひたる極めて幽邃の場所あり。此處を差出の磯といふ。川の兩岸には櫻樹を植ゑ。夏季には無數の鶯を生ずれば。甲府より來り遊ぶもの多し。

甲府市より西北一里餘の蘆崎村に新府城址あり。此城武田勝頼の築きし處なるが。織田信長の將川尻鐵吉のために奪はれ。幾もあらずして廢滅したり。水涸れたる堀の跡。今も尙人をして懐古の情を起さしむ。

久世	藤山	本郷	神代	美甘
新庄	(美作伯耆境)	坂井原	根雨	
二部	溝口	四日市	車尾	米子
陰田	(伯耆出雲境)	門生	安來	
意東	根屋	八幡	津田	松江
吉井	吉井より美作津山			
坂根	和氣	福田	周匝	
大戸	津山			
岡山	岡山より金川を経て津山			
建部	北方	小山	金川	菅村
福渡	北庄	西幸	津山	
板倉	門前	井手	井尻野	穴粟
高梁	今津	片岡	下中津川	
河口	小坂部	上熊谷	新見	下神代
矢田	東城			
下御領	下加茂	新市	中市	行藤
上下町	鴨賀	吉舎	三五	見羅坂
南島敷	三好	布野	横谷	赤名
酒谷	九日市	濱原	小原	別府

駿河の岩淵より富士川に依りて水路を開かれたる駿河は。甲府の西南四里半の處にあり。戸數一千に満たずといへども。交通の要衝に當れるを以て割合に繁華なり。富士川舟の事は前章駿河の部に述べたれば之を略す。

河口湖の南に上吉田村あり。富士山の北口にして。此處より絶頂まで七里餘あり。

物産の著名なるものは。

甲斐絹	葡萄酒	水晶	石材	生絹
梨	栗	紙	煙草	

などの類なり。

第九章 伊豆

伊豆の國は。東海道の中中央より遠く海中に突出せる半島にして。北の一部のみ駿河と相模とに連なれり。此國西は遠江の御前崎と相對して駿河灣を抱き。東は相模の三崎半島を向ひ立ちて相模灣をなす。面積殆ど百方里。これを分つて賀茂郡、田方郡の二郡とし。静岡縣の管轄に屬す。

伊豆の名は『出づ』の意義なりともいひ。或は『出湯』の約りたるも

佐摩	下御領より出雲石塚	井關	東油木
下御領	下加茂	服部	本村
新免	東城	見登	正原
川北	比和	湯川	新市
原田	木次	日井郷	給下
石塚	廣島より新庄を経て佐摩	給下	上郷
廣島	北庄	可部	下町屋
廣追	中山	新庄	出羽市
八色石	川本	祖式	白坏
宮内	友田	津田	大原
七日市	柿木	津和野	六日市
宮内	友田	津田	龜尾川
廣内	須万	金峰村	油木
廣平	野谷	船路	引谷
宮野	小郡より山口を経て鹿野	引谷	仁保
小郡	山口	小鯖	下右田
			奈美

のともいふ。前のは海中に突き出でたるよりいひ。後のは温泉の多きを意味す。

此國の南方遠く海中に散在せる七つの島あり。大島、利島、新島、神津島、三宅島、御倉島、八丈島これなり。之を伊豆の七島といふ。然るに文祿年間七島の南に更に一群島を發見したり。小笠原島これなり。故に今は七島に小笠原島を加へて豆南諸島と合稱す。而してこれらの諸島は。行政上の便宜にて半島より分離し。東京府に管轄せらる。なほ後文に詳説すべし。

地勢は。西北駿河の境に近き處のみや、平坦なれども。其他は險山重疊して。農作に適する部分極めて少し。

海岸の屈折は多けれども。下田を除く外其港灣極めて少し。

下田港は。國の南端石廊崎の東方にあり。熱海へは陸路十八里。横濱へは海路七十四里。神戸へは二百七十里。實に東海屈指の良港にして。戸數僅に一千なれども。港内には漁船の往復間斷なく。商業の殷盛なること熱海に譲らずといふ。

國の東海岸には細代港あり。西海岸には戸田港あり。共に小良港なり。

國內第一の高山なる天城山は。國の中央よりや、東に發え。直立四

仁寶知	堀村	伏野	串鱈	仁保
鹿野	小郡より石見を行て松江	徳目	生雲	
小郡	山口	宮野	徳谷	
地福	徳佐	津和野	宿谷	
横田	須子	益田	木部	
岡崎	折居	長濱	濱田	
土有福	市山	谷住郷	三原	
佐摩	久利	行恒	大田	
波根西	波根東	島津屋舖	田儀	
外村	大池	板津	神西	
鹽屋	今市	石塚	神立	
庄原	伊志見	尖道	白石	
布志名	乃木	松江	湯町	
吉田	吉田より萩を行て鷹巣	秋吉	赤郷	
明木	小野	大嶺	秋吉	
福井	椿郷西分	萩	椿郷東分	
小月	生雲	地福	鷹巣	
小月	小月より三隅を行て萩	地吉	湯町	
田部	矢田	地吉	湯町	
三見	三隅	萩	椿郷西分	

千五百餘尺あり。其山脈四方に廣がり。東北に走るものは洞笠、矢筈、大室、巖雲、日金等の諸峰を起して。相模の境なる箱根山に連なり。西南に伸びたるものは淺茅山、鳥帽子山の諸峰となり。西に分れたるものは彌見、達磨の諸山となる。

日金山は箱根山の南に峙ちたる高峰にして。絶頂に上れば。豆南諸島は手に取る如く。房總の諸島は杓々として燈波の間に隱顯し。而して脚下には熱海の市街手に取る如く。實に國內無双の眺望地たり。

日金山の西南海岸に近く立てるは達磨山なり。田子浦、三保松原等駿河灣内の絶景一望の下に集り。また日金山に劣らざるの眺望地なり。

半島國なれば大川のあるべき理なし。其中最も大なるものを狩野川とす。源を天城山より發し。湯島に至りて湯島川とよばれ。猫見川を合せて北に流れ。更に大見川、修善寺川、境川を合せて。駿河の國に入る。沼津町の東より海に注ぐもの即ちこれなり。此外はいかにも足らぬ小流のみ。

日金山の麓なる熱海町は。國內第一の繁華なる地にして三面山に包まれ。東南の一面のみ波靜なる相模灘に臨めると以て。冬は暖

小倉より熊本を行て鹿兒島
 小倉 新村 徳力 呼野 探銅所
 香春 下香春 猪藤 (豊前筑前境)
 大隈 東千手 下秋月 上秋月 千手
 依井西口 同新町 (筑前筑後境) 松崎
 下岩田 平方 八町島 府中 上津荒木
 一條 羽犬塚 願高 上小川 原町
 (筑後肥後境) 關村 山鹿 滴水
 熊本 川尻 宇土 松橋 北小川
 宮原 岡中 片野川 横手 八代
 麥島 奈其木 日奈久 二見 小田浦
 佐敷 湯浦 陣内 (肥後薩摩境)
 米浦 高尾 野田 阿久根 西方
 大小略 向田 申水野 市來 伊集院
 大迫 鹿島
 木屋瀬より福岡及唐津を行て
 名護屋
 木屋瀬 植木 赤間 畝町 青柳
 濱男 香椎 松崎 多田羅 箱崎
 博多 太宰府道 福岡 鳥飼 鹿原 肥前田平
 姪濱 下山川 今宿 波多江 前原

に夏は涼しく。其上初島の小島は。水程三里を隔て、近く見渡され。風景極めてよし。されども熱海の名高きは氣候風景のよきがためにならずして。温泉の涌き出づるが故のみ。古は熱海の七湯とて。湯の沸くところは七箇所のみなりしが。次第に其數を増して今は二十餘湯となれり。
 熱海町と相模の小田原と四里の間には。人車鐵道の設ありて交通には大なる不便なし。
 町内に熱海公園および授翁和尚(藤原藤房のこと)の草創にかゝれりといふ温泉寺あり。寺門に築ゆる一株の古松は。授翁の手植なりといふ。
 熱海温泉より十數町の北に當りて伊豆山温泉あり。天然の眺望決して熱海に譲らず。
 熱海より南五里を隔て、伊東の温泉あり。曾我兄弟の復讐に名を知られたる伊東麻績の領地はこゝなりき。
 國の中央天城山の西麓には湯島温泉あり。狩野川其前を流れ。山中の一勝地たるのみならず。氣候極めて温和にして。避暑といへども寒暖計八十度以上に上らず。嚴冬にも五十度を下らずといふ。故に避暑避暑を兼ねて遊浴するもの多し。

神社 松末 大入 福井 鹿家
 瀨上 濱崎 満島 唐津 佐志
 馬都 名護屋
 飯場 曲淵 三崎 西松瀬山
 川上 東山田 岡村 楠里
 別府 殿木 馬場 山本 徳末
 大川野 宿山 今嶽 伊萬里
 大里 今福 調川 志佐 御厨
 田平
 山家より竹田を経て熊本
 山家 中牟四 依井 甘木 三奈木
 山田 志波 久喜宮 高野 渡里
 日田 豆田町 竹田隈町 續木 出口
 宮原 小里 内牧 大津 隈府
 山鹿 滴水 熊本
 (十三)京都より諸方への道
 大坂へ
 淀 美豆 橋本 枚方 八幡
 守口 今市 大坂
 龜岡を経て久美濱

湯島温泉の西北連磨山の東に修善寺温泉あり。修善寺の名は。大同年中僧空海の此村に一寺を建てたるに起れり。南北山に挟まれ。中間には修善寺川(一名桂川)の清流滾々として流れ。人家はすべて川の兩岸に立てり。而して温泉は數箇所に沸き出づ。
 駿河の國との境にある三島町は。戸數千六百餘あり。東海道五十三次の一にして。これより東は箱根峠の登坂なり。箱根驛へは三里半。熱海町へは五里。駿河の沼津町へは四里なり。近頃此町と南方五里なる南條との間に敷設せられたる鐵道あり。これ最近の開通にして。此國の鐵道はたゞこれあるのみ。
 三島、南條間にある原木驛は韮山村の内にして。天正年中北條氏規の據りて豊臣氏に抗せし所。其舊城址今も存せり。源頼朝の流竄せられしによりて有名なる蛭が小島は。原木驛を距ること十餘町の處にあり。
 物産には。
 石材 白土 木材 炭 海苔 魚類
 鹽節 打鐘 紙
 などあり。島嶼の産物は次にいふべし。
 大島は伊豆七島中の最大なるものにして。東京よりは海路七十裡。

京都	朱雀	櫻木原	老坂	龜岡
千原	八木	鳥羽	園部	須知
檜山	栗野	山家	梅迫	田邊
上福井	桑飼下	河守	天田内	宮村
小田	宮津	弓木	峯山	二箇
佐野	坂井	久美濱		
京都	小野を経て鳥羽			
殿田	今出川	千束	小野	浮井
京都	鳥羽			
京都	木津を経て奈良			
京都	長池	伏見	木津	奈良
京都	歌姫を経て郡山			
京都	伏見	長池	玉水	木津
加茂	北笠置	北大河原	島ヶ原	
上野	平田	平松	長野	久居
津	郡山			
京都	若狹小濱を経て敦賀			
京都	八瀬	石をり	途中	防村
細川	村井	朽木	保坂	山中
熊川	一瀬	天徳寺	日笠	小濱
あかり	くらみ	相田	氣山	佐柿

下田港よりは二十五里あり。島の周囲八十里餘。全島の戸數千七百餘あり。波浮港、新島港を以て島中の良港とす。

島の中央に火山あり。三原山といふ。相模灘沿岸の各地より遙に之を望めば。硫煙盛に立ち上りて壯觀極りなし。大島の西南四里の處に利島あり。周囲二里餘にして七島中の最小なるものなり。戸數五十戸に足らず。

利島の南二里の處に新島あり。周囲六里半にして戸數殆ど五百。新島の西南一里許の處に式根島および二三の小島あり。式根島は周圍三里にして利島より大なれども。全島無人なるを以て新島の屬島とし七島の列に加へず。

神津島は式根島の西南二里の處にあり。周圍五里戸數三百餘。三宅島は神津島の東南八里餘の處にあり。周圍殆ど八里戸數は千に近し。

御倉島は三宅島の南方四里餘の處にあり。周圍殆ど五里。戸數は七十餘あり。此島黃揚木を産出すること多し。

御倉島の南方二十里の處にあるを八丈島とす。大さ殆ど大島に同じ。島の西方に飯峯あり。形富士に似たるを以て八丈富士の名あり。八丈嶺は此島の名産なり。

關	金山	敦賀	大坂	松原
	(十四)大坂より陸方への道			
	奈良を経て伊勢大神宮			
大阪	松原	小瀬	奈良	丹波市
柳木	芝村	三輪	櫻井	多武峰
島之庄	上市	吉野	清水谷	土佐
今井	南八木	櫻井	初瀬	萩原
髭無	名張	阿保	伊勢地	
入道垣外	大村	八太	市場庄	松坂
本明星	小俣	山田	宇治	
	高野及本宮を経て田邊			
大坂	川邊	國府	富田村	三田市
天見	橋本	かひろ	紙谷	高野
大瀧	水ヶ峰	大股	上西	松平
三浦	矢倉	山口	八丁茶屋	
櫻茶屋	本宮	新宮	濱宮	那智
大雲取	舟屋茶屋	地藏茶屋		山口
櫻茶屋	石とぎ	松はた	本宮	湯峰
湯川	野中	近つゆ	十丈峠	鹽見峠
止みす	田邊			
	和歌山を経て田邊			

以上はいはゆる伊豆の七島にして。居民は大抵漁業を力め。八丈島にては女子の養蠶機械に服するもの多し。言語風俗いづれも伊豆と大差なし。

八丈島の南百二十里の處に。更に一群島あり。小笠原島これなり。大小殆ど九十の島嶼より成り。其最も大なるものを父島、母島とし。兄島、弟島、姉島、妹島これら圍み。數十の小島其間に點在せり。文祿年間小笠原貞頼初めてこれを發見せしかば。其姓を以て島名とせしなり。位階勲章帶圖中にあるを以て。暑熱焦くが如しといへども。人類の生活に適せざるほどにあらず。發見の當時は無人居なりしが。おひく移住するものありて。今は六十餘の戸數あり。大村といふ所に小笠原島廳ありて東京府の管轄に屬せり。

小笠原島の物産には。櫻欄 鮫 山羊皮 などの類なり。其他動植物には内地に産せざるもの又は巨大なるもの極めて多し。

第十章 相模

相模の國は。西駿河に接し。西南は伊豆に。西北は甲斐に。東北は

大坂	堺	高石	岸和田	貝塚
倉邊	山中	山口	和歌山	日方
藤白	鴨谷	宮原	湯淺	井關
五瀬	原谷	東光寺	小松原	鹽屋
いなみ	みなへ	田邊		
	奈良を経て高野			
大坂	深江	神立	龍田	郡山
奈良	二階堂	田原本	八木	土佐
戸毛	五條	橋本	(以下前にあり)	
	西宮へ			
大坂	神崎	尼崎	西宮	
	有馬温泉へ			
大坂	神崎	伊丹	小濱	生瀬
平田	湯山	(十五)四國街道		
	阿波撫養より琴平神社			
撫養	引田	白鳥	三本松	町田
田づら	長尾	佛生山	十三塚	瀧宮
琴平	讃岐津田より高松を経て丸龜			
津	志渡	高松	笠居	青海

一帯武藏の國に連なる。而して南と東の一部とは海に臨む。面積は百餘里にて之を。三浦郡、鎌倉郡、高座郡、中郡、足柄上郡、足柄下郡、愛甲郡、津久井郡の八郡に分ち。神奈川縣の管轄に屬す。

國の東部は遙に海中に凸出せり。之を三浦半島といひ。其末端を劍崎といふ。

三浦半島は鈍三角形をなし。西は安房の半島と相對して相模灘を抱き。東に突出せる觀音崎は。上總の富津崎と共に東京灣の咽喉をなせり。東京灣と相模灘と相通せる處。即ち三浦半島東部の海を浦賀海峡といふ。國の西部は有名なる箱根山にして。地勢極めて高峻なれども。其他は概ね平坦にして農作に適せり。たゞし三浦半島は其脊骨をなす山脈ありて。低地少し。

此國鎌倉幕府の所在地なりしと。箱根の險を扣へたる形勝の地なるを以て。歴史上の古跡に富めり。

箱根山は國の西部駿河の境にあり。群峯其高きを競へるが如き中に。最も峻峭なるを猪鼻嶽とす。其北に當りて足柄山あり。新羅三郎義光の。月夜に笛を吹きて風流の名を千載に響かしたるは此の絶頂なり。

宇足津	丸龜	丸龜より伊豫松山		
丸龜	取坂	本山	觀音寺	和田
川之江	土佐高知	三島	津根	關崎
泉川	降下	西條	大町	小松
丹原	北新町	櫻井	今治	大井
菊間	北條	柳原	堀江	松山
三濱	川之江より土佐高知			
川之江	水ヶ峰	馬立	笹ヶ峰	立川
川口	本山	穴内	比江	高知
	(十六)九州街道			
	熊本より日向を経て大隅濱市			
熊本	重留	西上野	金内	矢部
大野	鞍岡	椎葉山	十根川	
下松尾	上松尾	神門	坪屋	山陰
才脇	瓜生	都濃社	高鍋	佐土原
鹿野田	本庄	南方	紙屋	野尻
藤生田	田口	内村辻	濱市	
	肥後湯浦より鹿鹿島			
湯浦	久木野	大口	湯尾	中之村

箱根山の絶頂に湖あり。蘆湖といふ。形を南北に倒したる如くに。周囲は殆ど五里。湖の東には駒嶽、冠嶽並び時ち。公時山は北にあり。西は遙に富士山に對して白扇の影を湖面に浮べ。南の一部のみや、平坦の地を發せり。此處に五十三次の一なる箱根驛あり。古へは繁華の驛路なりしが。今は僅に戸數二百の小村落となれり。箱根山中には温泉極めて多く。古へは湯本、塔の澤、堂が島、宮の下、底倉、木賀、蘆の湯を箱根の七湯と稱へしが。次第に其數を増して今は十餘湯にも及べり。

箱根山の東南伊豆の境に近く峙てるは石橋山なり。これ源頼朝の大庭景親と戦ひて敗れたる古戰場なる。史に曰く。治承四年源頼朝以仁王の令旨を奉じて兵を伊豆の國にあげ。目代平兼隆を滅して進んで石橋山に陣す。從兵僅に三百人。頼朝は義朝の子にして平治の亂に捕へられしが。人の救ふによりて死一等を減じて伊豆の經小島に流されたり。此に於て兵を起し、なり。相模の人々大庭景親兵數千を率いて之を撃ち大に石橋山に戦ふ。頼朝遂に打ち敗れ。身を以て木のうるに逃げ入りしが。景親の客將梶原景時。知らざるまねして見逃がしければ。頼朝やうやく安房の國に渡ることを得たりと。

箱根山の東北。國の中央に位せる高山は大山なり。海面より高きこ

有川	加治木 脇本 鹿兒島
日向佐土原より加久	
佐土原	妻方 尾泊 小川谷
津留谷	免田 間村 大畑 加久藤
	筑前山家より肥後滴水
山家	中牟田 松崎 下岩田 平方
八町島村	宮地 久留米 上野 柳河
藤吉	今古賀 中島 江浦 三池
平山	高瀬 桃田 滴水
	(十七)北海道諸道
	函館より札幌
函館	中島郷 横下 ● 森村 室蘭
幌別	白老 苦小牧 千歳 札幌
	札幌より函館
札幌	鏡箱 小樽 忍路 興市
岩内	磯谷 歌楽 黒松 長萬部
黒岩	山越内 落部 鷺木 大野
函館	
	札幌より鏡箱通を経て宗谷
札幌	鏡箱 石狩 厚田 濱益
増毛	留萌 鬼鹿 苫前 風連別

と殆ど四千尺。山頂に雨降神社あり。祭神は大山祇命にして。神體は一つの岩なり。傳へいふ。古へ日本武尊東夷を征し給ひし時。登山して憇ひ給ひし岩なりと。夏季に至れば富士山と同じく。白衣を纏ひて登山する参拜者多し。

三浦半島の中央に一山あり。衣笠山といふ。其脈南北に伸びて半島の脊骨をなし。一見形勝の地たるを知るに足る。こゝに三浦長門守爲道より玄孫大介義明に至るまで四代間の居城ありしが。治承四年島山重忠のために滅ぼされて。今はたゞ巖者たる老松の間に。城廓の痕跡を認むるのみ。山の東南に三浦義明の墓あれども。訪ふ人少なればいと荒れはてたり。

川の最も大なるものは馬入川(一名相模川)なり。源を甲斐の國富士八湖の一なる山中湖に發し。(第八章を参照せよ)國の北境より入りて。東流し南流し。相模灘の灣底に注ぐ。流程およそ三十里なり。

酒匂川あり。源を國の西境に發し。しばし屈曲して相模灘に入る。東海道線の鐵道は此川に沿ひて敷かれ。川を横ぎること前後七回に及べり。

青砥關が十文の錢を拾ひたる話によりて有名なる滑川は。源を鎌

天鹽	雅咲 跋海 宗谷
	根室より北海道通を経て宗谷
根室	厚薄別 冠海 野村 標津
中割	浦生 斜里 網走 常呂
雄別	紋別 澤喜 幌内 枝幸
斜内	猿拂 宗谷
	札幌より千歳通を経て根室
札幌	千歳 勇拂 沙流 新冠
静内	三石 浦河 様似 幌泉
猿留	廣尾 當縁 ● 十勝 尺別
白糖	釧路 昆布森 仙鳳路 厚岸
古邊別	厚邊別 根室

○内外航路運數

至	自	横濱
横濱	香港	一、五六〇
新嘉坡	嘉坡	三、〇〇〇
ポイントデガール		四、五一〇

横濱英國伯來謀間直航路

倉の東北部に發し。西南に流れて海に入る。極めて小流なり。國中第一の都會は小田原町なり。箱根の湯本温泉より東北一里半の處にありて。戸數三千二百餘あり。西北は山を負ひ。南は波靜なる相模灘に向ひ。海水浴に最も適す。

此地西は箱根の險を控へ。關東無双の要害なるを。北條早雲まつ察してこゝに城づき。數世を経て氏政に至り。豊臣秀吉のために滅ぼされたり。數年の間に天下を一統したる豊臣秀吉も。此城の要害は如何ともすること能はずして。しばし度外に措きしが。のち天下の兵を擧つてやうやく抜くを得たり。北條氏滅びて後。秀吉關東八州を徳川家康に與へしかば。家康、大久保忠隣を此の地に封じ。以て明治維新に至りぬ。

小田原町の東一里半の處に國府津村あり。小田原と同じく北は山を負ひ。南は海に濱し。海水浴に適せり。戸數五百に満たざる小市街なれども。東海道線鐵道の停車場あり。且箱根、伊豆の温泉路なるを以て。來往の旅人多く日に繁盛に赴かんとす。

小田原町より東北四里半の海岸に大磯町あり。東海道五十三次の一にして。戸數殆ど千五百。海水浴に最もよく適せるため貴顯紳士の別邸を構ふるもの多し。町の西端に一の丘陵あり。磯打つ波の音は

至	自	新嘉坡	香港
亞丁	亞丁	六、六四四	六、六四四
蘇門答臘	蘇門答臘	八、〇二四	八、〇二四
日里	日里	八、一一一	八、一一一
巴來	巴來	九、〇五一	九、〇五一
馬來	馬來	一〇、〇三一	一〇、〇三一
新嘉坡	新嘉坡	一一、〇八一	一一、〇八一
香港	香港	一、五六〇	一、五六〇
新嘉坡	新嘉坡	一、四四〇	一、四四〇
亞丁	亞丁	二、九五〇	二、九五〇
蘇門答臘	蘇門答臘	五、〇八四	五、〇八四
日里	日里	六、四六四	六、四六四
巴來	巴來	六、五五一	六、五五一
馬來	馬來	七、四九一	七、四九一
新嘉坡	新嘉坡	八、四七一	八、四七一
香港	香港	九、五二二	九、五二二

松風の聲に通ひて。いと物さびしく感ぜらるゝ處なるが。これ西行法師が。心なき身にもあはれは知られけり。鴨立の澤の秋のゆふぐれ。とよみたる古跡なりとて。今も此あたりを鴨立澤とぞいふ。大磯より更に海岸に沿うて東に進めば。三浦半島に近き處に鎌倉あり。これ源頼朝勲業の跡にして。今こそ荒れたる一小村なれ。古へは關東の大都會にて。大小の政令悉く此處に發し。長くも京都の内裏さへ其支配を受け給ひしほどなれば。歴史上には最も關係多く。從ひて著名なる古跡極めて多し。鎌倉の海濱より三四町の北に鶴岡八幡宮あり。祭神は應神天皇、神功皇后、大仲媛神にして。社格は國幣中社なり。源義經の妾靜が頼朝の命によりて法樂の舞をまひしは。此社前なり。また社前なる石階の側に大なる銀杏の樹あり。これ僧公曉が源實朝を弑せし時に身を隠しつるものなりといふ。史に曰く。建保六年實朝右大臣となる。あぐれば承久元年正月夜を以て拜賀の禮を鶴岡の社前に行ひ。舉つて石階を下らんすとす。人あり銀杏の木陰より現はれ出で、實朝を刺し。呼ばつて曰く。我は公曉なり。父の仇を報

至	自	新嘉坡	香港
亞丁	亞丁	三、〇〇〇	三、〇〇〇
蘇門答臘	蘇門答臘	一、四四〇	一、四四〇
日里	日里	一、五一〇	一、五一〇
巴來	巴來	三、六四四	三、六四四
馬來	馬來	五、〇二四	五、〇二四
新嘉坡	新嘉坡	五、一一一	五、一一一
香港	香港	六、〇五一	六、〇五一
新嘉坡	新嘉坡	七、〇三一	七、〇三一
亞丁	亞丁	八、〇八一	八、〇八一
蘇門答臘	蘇門答臘	二、一三四	二、一三四
日里	日里	三、五一四	三、五一四
巴來	巴來	三、六〇一	三、六〇一
馬來	馬來	四、五四一	四、五四一
新嘉坡	新嘉坡	五、五二一	五、五二一

する事と。其首を取り關にまぎれて去る。北條義時三浦義村に命じて公曉を捜索し獲て殺さしむ。公曉は頼朝の子にして。嘗て鶴岡別當たりしが。義時に欺かれて。父の幽死を實朝の所爲なりと信じ。遂に此に及べるなり。時に年十九と。鶴岡八幡宮の東北數町の町に鎌倉宮あり。官幣中社にして大塔宮眞親王を祭る。社殿の後は親王の曾て幽閉せられ給ひし。而して遂に其内に毒刃にかゝり給ひし土の窟屋あり。史に曰く。親王、足利尊氏、および弟直義の姦惡をにくみ給ひ。之を除かんとて私に命を諸國に下して將士を徵し給ふ。尊氏かくと泄れ聞き宮女に由つて親王を謀せしめ。誣ふるに謀反を以てす。天皇驚き怒り遂に之を捕へて鎌倉に下し。直義に附して護衛せしめ給ふ。直義殘酷にも之を窟屋の中に幽し奉れり。親王憂憤書を上りて冤を訴へんとし給へども。守護ために之を奏せずして止みぬ。後北條時行の亂に遭ひて直義鎌倉を逃るゝ時。心に思へらく。時行恐るゝに足らず。他日の憂は親王なりと。依つて淵邊義博をして害せしめ奉らんとす。義博行いて窟屋を窺へば。親王燈火に對して齋經しかはします。親王その人影を認め。何者かと問ひ給ふ。義博白刃を提げて進めば。さては殺したるたるとて。之を奪はんとし給ふを。さはさせじとて御勝

伯來謀	六、五七一
至	
自	
亞丁	六、六四四
新嘉坡	五、〇八四
香濱	三、六四四
蘇士	二、一三四
馬他	一、三八〇
日巴拉	一、四六七
伯來謀	二、四〇七
至	
自	
蘇士	二、三八七
香濱	四、四三七
新嘉坡	八、〇二四
香濱	六、四六四
新嘉坡	五、〇二四
亞丁	三、五一四
蘇士	一、三八〇

を斬り。遂に御首をかき奉れり。窟屋の廣さは八疊敷ばかりにて。見るも物凄きまじなり。一度之を拜して涙を落さざるものはあらざらん。

鎌倉宮の東敷町の處には頼朝の屋敷跡ありて。其の北の山腹に墓あり。

源氏に代りたる北條氏が佛教を奨励したる結果として。鎌倉には佛寺の大なるもの少なからず。其中最も有名なるもの五つを五山と稱し。建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨明寺これなり。中にも建長寺は北條時頼、圓覺寺は北條時宗の創建にて規模最も大なり。

八幡宮前面の海濱を由比が濱といふ。青松白砂相映じ。海は遠淺にして海水浴に適せり。

由比が濱の西に突出したる岬あり。其東側を鹽山崎といふ。西側を稻村崎と稱す。史に曰く。元弘三年五月新田義貞はじめて勤王の兵をあげ。鎌倉に向つて進軍せしに。稻村崎に至りて。懸崖海に迫りて人馬の通路なし。義貞即ち佩く所の金刀を海に投じ。潮の退かんことを祈りしに。潮は見る間に遠くひきたり。一軍神助なりと信じ。勝利疑なしとて躍躍して鎌倉に攻め入り。遂に高時を誅滅せり。蓋し義貞兵士の勇氣を鼓舞せんとして。豫め干潮の時刻をはかりお

伯來謀	三、〇五七
至	
自	
蘇士	一、〇二七
馬他	二、〇〇七
日巴拉	三、〇五七
伯來謀	八、一一一
至	
自	
蘇士	六、五五一
香濱	五、一一一
新嘉坡	三、六〇一
亞丁	一、四六七
蘇士	八七
馬他	九四〇
日巴拉	二、九〇七
伯來謀	九、〇五一

き。かく太刀を投じて神助に托せしならん。

稻村崎より西には。また風光明媚なる一帯の海濱あり。之を七里濱といふ。寶徳年中足利成氏の土杉憲忠、上杉顯忠等を戦ひたる處なり。七里の名は六町を一里として計算なりといふ。

七里濱の背部にある一村を腰越村といふ。こゝに満福寺といふ寺あり。傳へいふ。源義經の腰越村は此寺にて草せしなりと。史に曰く。文治元年五月義經すでに昨年を以て平氏を全滅したれば。一度兄頼朝に對顔せんとして。京都を發して鎌倉に向ひしに。頼朝梶原影時の讒言を信じて義經に異心ありとし。鎌倉に入るを差止めたり。義經時に腰越村にあり。直ちに陳情の書を書して其冤を訴へたり。世に之を腰越村といふ。

腰越村西南の海中に一小島あり。江島これなり。海濱を去ること數町なれども干潮の時は徒歩して渡るを得べし。周圍殆ど二十町。全島斷崖より成り。上には老松鬱蒼として茂り。遠く之を望めば晝中のもの、如し。島内江島神社あり。興津宮、中津宮、邊津宮の三祠に分ち。多紀津姬命、市杵島姬命、紀理姬命をまつる。此島參詣の人よりも寧ろ遊覽に来るもの多く。島内には旅館商家軒をならべ。商家にては多く貝細工を賣ぐ。此近海には貝の美麗なるもの極めて

廣東	一八	八五
雞龍	六一九	五〇七
淡水	六三三	三九
社寮	七九九	一八九
澎湖	七八〇	五八

漢江航路

自		至	
漢江口	漢江口	カンジョ	ポチネー
カンジョ	五	五	四九
ボチネー	九	四	九
カンパオン	一八	一三	九
シニクコル	二二	一七	一三
エンチヤン	三二	二六	二二
楊花渡	三四	二九	二五
漢江口	一八	二二	三四
カンパオン	一三	二六	二九
シニクコル	一七	二二	二五
エンチヤン	二二	二六	二九
楊花渡	二九	三二	三六

を流れて下總の堺に來り。此處にて三つに分れ。本流は去りて下總、常陸の堺を限り遂に海に入る。之を利根川といひ。支流は武藏、下總の堺を限りて東京灣に注ぐ。江戸川すなはち是なり。隅田川は上流を荒川といひ。源を西部の秩父山中に發し。東流し南流して東京市の東部を貫き。遂に東京灣に入る。流程七十四里。古へ此川を以て武藏、下總兩國の堺とせしこと前にいへるが如し。橋の名に兩國橋といふがあるも此故ぞかし。(東京市のところ参照せよ)

鮎の産出を以て東京附近に有名なる多摩川は。源を信濃の國に發し。東流して東京灣の西部に注ぐ。下流にては六郷川の名あり。流程殆ど四十里。兩岸には數千株の櫻樹を植う。花時の光景いはん方なし。小金井の柳花即ちこれなり。東京市の水道多摩川上水は實に此水を引けるなり。(東京市のところを参照せよ)

東京市は國の東南。東京灣の底部に位し。我國の主都にして皇城のある處なり。市街の廣さ東西殆ど二里半。南北三里餘。面積五方里餘あり。之を麹町區、神田區、日本橋區、京橋區、芝區、麻布區、赤坂區、四谷區、牛込區、小石川區、本郷區、下谷區、淺草區、本所區、深川區の十五區に分つ。此地古へは江戸を稱し武藏野の一部にして。曠漠たる原野なりしを。後花園天皇の長祿元年太田道灌此地の形勢に富めるを察して城を築きたり。これ予東京の開くる初めなりける。北條氏關東八州を占領せしより。此城も其有に歸せしが北條氏は小田原を本據として。此地に重きを置かざりけり。のち秀吉北條氏を滅して。領地を悉く徳川家康に與へしに。家康直ちに移りて此處に居り。慶長年間幕府を開くに及びて更に大に修築を加へ諸侯の邸宅は壘を並べて其周圍に立ち。商家の數は日にますく多きを加へ。遂に我國第一の大市街となりしこと。道灌其初を開くといへども。家康の力最も多きに居る。明治維新徳川慶喜政權を奉還するに及び。今上天皇都を此處に移させ給ひ。江戸を改めて東京と稱し給ふ。爾來世運の進歩と共に。東京の繁昌はいよぐ甚しく。維新の際まで八百八街の稱ありしものが。今は殆ど千四百街となるに至る。また驚くべきにあらずや。戸數は三十萬に餘り。人口は百三十五萬を有す。

皇城は舊江戸城にして麹町區の中央にあり。明治六年五月炎上せしを以て。明治十七年より新築の工を起されしが。二十二年に至つて全く落成し。二重橋を其正門と定めらる。二重橋とはもと西丸の大御門にかゝれる書院門橋の事なるが。遂に拜すれば橋の二重に重なる

自		至	
上海	寧波	福州	廈門
汕頭	香港	馬關	長崎
五島五ノ浦	一五二	七四	八五
壹岐郷ノ浦	七七	八二	五四
對馬竹敷	一一五	一一五	五一
朝鮮釜山	一二四	一二四	三〇七
元山津	三八八	四八八	三二五
浦鹽斯德	五七〇	六七〇	

上海香港間航路

自		至	
上海	寧波	福州	廈門
汕頭	香港	馬關	長崎
上海	一三四	四〇〇	五八五
寧波	一三四	二六六	四五一
福州	四〇〇	二六六	一八五
廈門	五八五	四五一	三三二
汕頭	五八五	四五一	三三二
香港	七六三	四九七	三二二

手門にかゝれる書院門橋の事なるが。遂に拜すれば橋の二重に重なる

至	自	漢江口	濟物浦	豐島	金浦島	水島	シングル島	草蘭島	太郎島	巨文島	壹岐沖	馬關	神戶	横濱		
至	自	漢江口	濟物浦	豐島	金浦島	水島	シングル島	草蘭島	太郎島	巨文島	壹岐沖	馬關	神戶	横濱		
漢江口	濟物浦	豐島	金浦島	水島	シングル島	草蘭島	太郎島	巨文島	壹岐沖	馬關	神戶	横濱	漢江口	濟物浦		
二二〇	一九七	一七二	一四〇	五〇	九八六	六三三	三九九	三九九	二〇九	一八九	一五九	一四〇	五四	六八	九三	一六
一七〇	一四七	一二二	五四	五〇	一〇五四	七〇一	四六七	三九七	二七七	二五七	二二七	一七二	一二二	六八	二五	四八

蜘蛛の巣の如く空に通じ。無数の瓦斯、電氣燈は街頭を照らして夜尙晝の如し。殊に京橋區銀座通より日本橋の通を経て下谷區上野公園に至る間。および日本橋區本石町より淺草橋を渡りて淺草公園に至る間を最も盛なりとす。此間鐵道馬車通じて絶えず循環往復せり。

市内の公園は十餘箇所あれども。其大なるものは上野公園、芝公園、淺草公園の三なり。

上野公園は下谷區にあり。園の廣さ殆ど十七萬坪ありて宮内省の直轄に屬す。園内には老樹森々として茂り。數百株の櫻樹其間を點綴し。花時の好景實に形容の言葉もなし。園内には徳川家康の創建にかゝる東叡山寛永寺あり。維新の際兵燹にかゝりて堂宇は大半焼失したれども。尙其壯麗なりしさまを推知するに足る。其他東照宮、觀音堂、大佛、五重塔、兩大師、彰義隊の碑、博物館、動物園、美術學校、音樂學校、圖書館等の建物あり。

明治元年の上野戰爭は實に此園内に行はれ。彰義隊の碑は即ち其戰死者の墓標なり。史に曰く。徳川慶喜伏見鳥羽の戰に敗れて江戸に逃げ歸りしが。官軍追撃すべく急なり。慶喜遂に敵すべからざるを知り。上野寛永寺に入りて謹慎の意を表す。勅して慶喜の死一

至	自	漢江口	濟物浦	豐島	金浦島	水島	シングル島	草蘭島	太郎島	巨文島	壹岐沖	馬關	神戶	横濱
至	自	漢江口	濟物浦	豐島	金浦島	水島	シングル島	草蘭島	太郎島	巨文島	壹岐沖	馬關	神戶	横濱
漢江口	濟物浦	豐島	金浦島	水島	シングル島	草蘭島	太郎島	巨文島	壹岐沖	馬關	神戶	横濱	漢江口	濟物浦
二二三	二二五	九三	一四七	一九七	二五二	二八二	二七七	三九七	四六七	七〇一	一〇七九	一〇二	七四九	一〇二
二二三	四八	一七〇	一七〇	二二〇	二七五	三〇五	三二五	四四五	五一五	七四九	一〇二	一〇二	七四九	一〇二

太沽白河浜航路

至	自	太沽	葛沽	天津	通州	陸路北京
至	自	太沽	葛沽	天津	通州	陸路北京
太沽	葛沽	天津	通州	陸路北京	太沽	葛沽
一六	一六	五〇	四〇	一五一	一六	一六
一六	一六	三四	二四	一三五	一六	一六
一六	一六	三四	二四	一三五	一六	一六
一六	一六	三四	二四	一三五	一六	一六

等を減じて水戸に居らしめ。江戸城を致し軍器を納れ。城内居住の家臣を悉く外に移さしむ。慶喜謹んで目を奉じ一も違ふところなし。幕臣不平を懐くもの多く。皆曰く。主辱められ臣死すとは此時なり。遂に同志相集りて彰義隊と稱し。東叡山の法主輪王寺宮(後に北白川宮)を奉じて大將となし。上野に據りて兵を擧ぐ。勢極めて猖獗なり。官軍よりて閏四月十五日を以て上野を圍み攻む。硝煙彈雨天ために暗し。幕兵遂に敗れて上野陥り。歿せざるものは奥羽に走る。之を上野の戰爭といふ。公園の樹木に今尙彈丸の痕を止めたるものあり。殊に今博物館に用ひたる黒門と。東照宮の側に建てたる黒門とは。當時の紀念にして。指を入るゝほどの彈痕數へがたく。甚しきは蜂巢の如き箇所あり。以て戰爭の激烈なりしを察すべし。

此地古へ忍岡と稱せしが。藤堂高虎此處に邸宅を置き。地形伊賀の上野に似たりとて改めて命名せしなり。高虎は家康寛永寺を建つる時他に移されたり。

上野の西に不忍池あり。周圍殆ど一里。中に小島あり辨財天を祭る。滿池蓮を植ふ。毎年七八月には紅白の花競ひ開き。極めて美觀なり。淺草公園は淺草區にありて。舊淺草寺の境内なり。園内の重なる建

通州	四〇二四	九〇	—	—
陸路北京	五〇三五	二〇二	—	—
通州北京間も海里を以て算す				

遼河汽航路

自	遼河汽航路			
	河口	管子	砲臺	牛莊
遼河(燈船)	—	一七	三〇	三三
管子	—	—	一七	二〇
砲臺	—	—	—	一六
牛莊	—	—	—	—
到達	三三	二〇	一六	三
自	—	—	—	—
橫濱	—	—	—	—

物は淺草寺觀音堂、五重塔、凌雲閣等なり。中にも淺草寺の觀音菩薩は數百里の遠きより參詣するもの引きも切らず。園内常に之がために喧騒を極む。

鐵道馬車は此處より上野および新橋停車場へ通せり。

芝公園は芝區にありて。もと増上寺の境内なり。松杉鬱々として茂り。丘あり池あり。幽閑の點は上野に過ぐ。されども地僻して交通の便少きため遊覽する人上野の如くならず。これ却つて此公園の特色を保つ幸たるか。園内の重なる建物は。増上寺の外東照宮。徳川氏靈廟、能樂堂、東京府勸工場なり。また園の東南隅なる圓山には我地理學に大功ある伊能忠敬の頌功碑あり。碑は唐銅製の三角柱にして。中に忠敬の用ひたる測量器械を納めたり。

市の東部を流れたる隅田川は。前にいへる如く利根川の分れたるものなるか。海水と通せるを以て流れ極めて緩漫にして潮の満干にも伴ふ。川には小蒸氣船、運送船往復間斷なく。また吾妻橋、靨橋、兩國橋、新大橋、永代橋の五大橋を架して。兩岸市街の聯絡を通せり。吾妻橋は淺草公園の東に架したる鐵橋にて。此川上は即ち有名なる向島なり。堤の兩側に立ち並びたる數百千株の櫻樹は。殆ど一里の長きに及び。花の多きこと實に都下第一なり。されば花の頃には堤

聖彼得堡(露西亞)	一二、七三八
阿無斯提(和蘭)	一一、五八〇
基督亞尼諾(威)	一一、五九〇
哥本哈根(丹)	一一、九八八
士篤(瑞)	一一、三五八
桑港(北米)	四、九三〇
萬古(北米)	四、三三〇
哈勒(北米)	一一、七〇一
新約(北米)	一一、三三三
蒙德的南(米)	一五、四三一
悉德(南米)	四、六一四
泰普(南米)	五、一一四
波羅(南米)	九、六六〇
魯能(南米)	三、六〇〇
巴斯(南米)	六、七五〇
孟買(印度)	五、四七〇
甲谷(印度)	四、五六二

英佛米郵便船航路運數(自橫濱)

至神戶	佛船にて	三三〇
至上海	同上	一、〇八五

上殆ど人を以て埋められ雜開いふばかりなし。

吾妻橋より數町の下流には靨橋あり。更に其下流十町許の處に架せられたるは兩國橋なり。堅牢なる木橋にて長さ九十間幅七間。或人曰く。晝間兩國橋の上に五十輛の車絶ゆる時なく。深夜といへども必ず一輛は通行せりと。以て往來の頻繁なるを察すべし。

兩國橋を東に渡れば。其正面は本所區の回向院なり。史に曰く。明曆三年江戸大火あり。燒死せしもの十萬八千人に及ぶ。是に於て其追福のため。自信上人をして兩國回向院に大法會を營ましむ。此院内に於て毎年二回相摸の興行あるは知らざる人なかるべし。また境内の墓地に歌人橋千蔭の墓あり墓側に植ゑたる一株の橘は詣づるものをして何となく古を忍ばしむ。

兩國橋の下流十町許の處に新大橋あり。また同じほどの距離を隔て架せられたるは永代橋なり。此橋しばしば架してしばしば流失せしが。明治三十年堅牢なる鐵橋を新に造營して。五大橋中最も壯觀なるものとなれり。

市内の神社を數へんには。まづ指を靖國神社に屈せざるべからず。靖國神社は始め招魂社といひ。維新の際王事に斃れたる舊藩諸士の靈。西南の役に戰死したる官軍の諸士。および明治二十七八年の役

至香港	同上	一、九五五
至香港	〔英船にて神戸及長崎を経て〕	一、八〇二
至西貢	〔又作柴棍 佛船にて〕	二、八七〇
至新嘉坡	〔佛船にて西貢を経て〕	三、五〇七
至新嘉坡	〔英船にて西貢を経て〕	三、二九九
至馬尼刺	〔佛船にて西貢を経て〕	三、八〇〇
至海防	同上	三、七〇〇
至波太比亞	〔佛船にて新嘉坡を経て〕	四、〇五七
至比南	英船にて	三、六二〇
至哥倫波	佛船にて	五、〇七七
至哥倫波	英船にて	四、八九八
至ボンシチエリ	佛船にて	五、四三七
至馬度刺斯	佛船にて	五、七二五
至馬度刺斯	〔英船にて哥倫波を経て〕	五、五〇八
至哥爾加太	佛船にて	六、〇九七
至哥爾加太	〔佛船にて哥倫波を経て〕	六、二七八

に戦死したる人々の靈を合せ祭りたる別格官幣社にして。宮城の西北九段坂の上にあり。毎年五月十一月の招魂祭には。勅使参向して幣帛を賜ひ。ついで陸海軍人参拜の式あり。其盛況他の神社に絶えて見ざる所。男兒死して此社内に祭らるゝことを得ば。また餘榮ありといふべし。境内は廣潤にして數百株の櫻を植ゑ鳥居の前面には大村益次郎の銅像あり。また本社西には遊就館ありて。今古の兵器武具を陳列す。

靖國神社につきて著名なるは神田神社なり。萬世橋外にありて。大己貴尊に少彦名命を合祀す。社殿清麗にして境内老樹鬱茂しいと神さひたり。

芝區の愛宕神社は愛宕山上にありて。市内の眺望に適するため。本所區の龜戸神社は。鎌起の古きと藤棚などあるため。参拜するもの常に多し。

市内にまた二つの離宮あり。一を赤坂離宮といひ。一を濱離宮といふ。赤坂離宮は赤坂區の北部にありて。皇太子殿下の御所なり。濱離宮は芝區東部の海濱にありて。多く外國貴賓等の旅館に當てらる。内部の結構等共に御臣の窺ひ知るべきにあらず。

芝區の西南部。荏原郡の品川町に近き處に泉岳寺あり。淺野長矩お

至アデアライド	〔英船にて同上〕	九、二九五
至墨爾坡倫	同上	九、七八〇
至悉德尼	同上	一〇、三四〇
至孟買	英船にて	五、七七三
至亞丁	佛船にて	七、一七二
至亞丁	〔英船にて孟買を経て〕	六、九九一
至亞丁	〔英船にて孟買を経て〕	七、四三七
至蘇士	佛船にて	八、四八〇
至蘇士	英船にて	八、二九九
至ポルトサイド	佛船にて	八、五六七
至ポルトサイド	英船にて	八、三八六
至亞歷山德利	同上	八、五一九
至亞歷山德利	佛船にて	八、七二七
至プリンヂシ	〔英船にて亞歷山德利を経て〕	九、三四四
至アノコナ	同上	九、六一四
至威尼斯	同上	九、七三九
至トリエスト	同上	九、八〇四
至馬爾太	英船にて	九、三三一

よび其臣四十七士の墓あり。史に曰く。赤穂城主淺野長矩、吉良義英のために辱められ。怒りに堪へずして殿中に之を傷つく。由つて死を賜ふ。其臣大石良雄以下四十七士義英の邸に討ち入りて其首を取り。芝高輪の泉岳寺に至りて主君の墓前に供し。亡靈を慰む。時に元禄十五年十二月十四日なり。世稱して義士といふ。寺には義士遺物の存するもの多し。

東京市各部のことは大略右にいへり。なほ市全體につきて少しくいはざるべからず。此地をも武藏野と呼べりしかど。素より坦々たる平地にはあらず。沼もありしならん。澤もありしならん。また丘もありしならん。是等を均して初めて平地とせしなり。隨うて埋立地の多きは無論なり。晴天の砂塵と雨天の泥濘とは何よりの證なり。されば牛込區、小石川區等の山手は暫く措き。神田區、日本橋區、京橋區等に至りては。地を掘ること幾十丈に及ぶも絶えて清水を得ることなし。これ此地の住民にとりて最も大なる不幸なり。徳川氏代々の將軍も此飲用水の事につきては大に意を碎き。遂に水道を以て供給することとせしなり。此水道從來は木製の伏樋なりしかど。近年鐵管に改め。全部の成功年を論えざるべしといふ。

市内より起れる鐵道は四線あり。其起點は京橋區の新橋。下谷區の

至那布爾	佛船にて	九、四〇五
至馬耳塞	同上	一〇、一三五
至馬耳塞	英船にて	九、九七一
至チブルタル	英船にて	一〇、三〇二
至プリマウス	同上	一一、三五六
至龍動	英船にてプリマウスを經ずして	一一、六〇一
至龍動	英船にてプリマウスを經ずして	一一、六五一
至ホノル	米船にて	三、四五〇
至桑港	米船にてホノルルを經ずして	四、五四〇
至桑港	米船にてホノルルを經ずして	五、五五〇
至ヴァンクーバー	英船にて直航	四、三三四

○國縣里道延長 (明治二十六年一月一日調査)
 (高知縣は國道及縣道の調を缺く)

上野。麹町區の飯田町。本所區の柳原町(本所停車場といふ)これなり。其各線路の事は。後文武藏國內の鐵道を一括して述べんとす。東京市は我國の主都にして皇城のある處なれば。此市の地理史談は最もよく知らざるべからず。讀者其詳に涉りたるを怪しむ勿れ。東京市の南方芝區の高輪につゞきて。荏原郡の品川町あり。戸數殆ど四千。これ東海道五十三次の第一驛にして。東に品川灣あり軍艦の碇泊に適す。灣中には七個の砲臺あり。今その一を缺く。品川町より南。流車時程二十分の處に川崎町あり。五十三次の第二驛なり。こゝに有名なる川崎大師堂あり。弘法大師を祭る。川崎町より西南。流車にて二十五分の處に横濱市あり。五港の一にして我國互市場の第一に位す。港内の廣さ東西二十三町南北一里五町。内外の船舶日夜輻湊して外國貿易の盛なること東洋にも多く其比を見ず。戸數は三萬四千餘ありて神奈川縣廳此處に置かる。第一師團歩兵第一聯隊の兵營あり。各要所への道程は。東京へ流車にて一時間。神戸へ九時間半。海路にては伊勢の四日市へ二百哩。神戸へは三百四十七哩。外國航路は。香港へ千五百六十哩。新嘉坡へは三千哩。桑港へは四千五百四十哩なり。横濱より五里餘の南に金澤あり。方一里許海水の灣入したる處にし

神奈川	國道	四四・二二・一七
縣道	一六〇・二四・五一	
里道	一、六四八・二六・五一	
埼玉	國道	三四・二六・四七
縣道	一五〇・一七・四七	
里道	一、七三五・〇五・三八	
千葉	國道	一一・三一・四七
縣道	一七七・二八・四七	
里道	三二六・〇六・五八	
茨城	國道	四〇・〇九・〇二
縣道	二五六・二一・三四	
里道	二、四五一・一五・一四	
栃木	國道	三〇・二三・一四
縣道	二四八・三〇・一〇	
里道	六四六・一四・二五	
群馬	國道	四二・三二・五七
縣道	一九三・〇六・五八	
里道	五九二・〇四・四三	

て。遠く房總の淡山を望み近く野島、夏島などの小島浮び。風光實に畫の如し。八景は近江の琵琶湖のに擬へて撰びたるものなり。金澤八景の一に稱名寺の晚鐘といふあり。北條實時の本願により其子顯時の建立せしものなり。此寺の境内に金澤文庫の古跡あり。史に曰く。建治三年北條實時金澤文庫を設立す。後次第に頽廢に赴きしを上杉憲實憂ひ慨きて之を再興したり。戰國時代兵亂の打ち續きし間にも。和漢群書の散滅し盡さざりしは此文庫與つて大に力ありと。東京市の西北に飛鳥山公園あり。市の紅塵を離れ且眺望よきを以て來遊するもの多し。學生の運動會などには最も好地なりとす。飛鳥山の麓を流る、瀧の川は荒川の支流にして。兩岸に楓樹多く。紅葉の眺望向島の櫻花と好對をなす。東京の西北流車にて四十分の處に浦和町あり。埼玉縣廳の所在地にして。戸數殆ど千五百。此地も中仙道の一驛にて極めて寂寥なりしが。明治九年縣廳を置かれしより次第に繁盛に赴けり。浦和の西北には大宮町あり。戸數千に満たざる小市街なれども。鐵道の要衝に當れるを以てますます繁盛を加ふ。此町の東北數町の處にある氷川神社は。官幣大社にして素戔鳴尊、大己貴尊、奇稻田姫

長野	國道	七三〇〇・三〇
	縣道	二四五・一一・一三
山梨	國道	一八三四・一二・五四
	縣道	一七〇六・〇〇四
静岡	國道	八四・一五・二〇
	縣道	七四四・〇三・五七
愛知	國道	四七・〇〇・四八
	縣道	一一四・二〇・一八
三重	國道	二、二四五・二九・一七
	縣道	四二・一六・三六
岐阜	國道	一九六・〇四・〇三
	縣道	二、一一七・一五・四二
滋賀	國道	四〇・一〇・二七
	縣道	八六・一四・二五
福井	國道	四、〇四七・二八・二八
	縣道	三九・〇一・一五
石川	國道	一、二二四・一四・一五
	縣道	三九・〇一・一五
富山	國道	四四・三一・二一
	縣道	三九・〇一・一五
新潟	國道	一九〇・五・三五
	縣道	九五・〇二・三三
福島	國道	九二五・三五・二三
	縣道	二〇・一四・五八

命を祭り。武藏の國の一の宮を稱す。近年此神社の境内を修飾して公園とす。極めて幽閑なり。

川越町は國の中央に位し。四里餘を隔て、浦和町と東西相對す。戸數殆ど三千五百。此地に太田道灌の城寨ありしが今は僅に其痕跡を認むべし。

青梅綿の産出を以て世に知られたる青梅町は。川越町の西南に位し。多摩川の北岸にあり。千餘の戸數を有す。

織物を以て名の聞へたる八王子町は。青梅町より南相模の境に近き處にあり。戸數殆ど五千ありて。商業の盛なること東京、横濱を除きては國內其比を見ず。町の西に古城址あり。北條氏照の前田利家に攻め落されし處といふ。

國內の鐵道はすべて九線あり。一は東京の新橋より横濱を経て相模に入るもの。いはゆる東海道線。二は其線の品川より別れて赤羽に至れるもの。三は東京の上野より大宮町を経て上野の國に入るもの。四は其線の大宮町より分れて下野の國に入るもの。五は田畑より上野線を別れて常陸に走れるもの。六は東京の飯田町より八王子町に至れるもの。七は其線の國分寺より分れて川越町に至れるもの。八は同じ線路の立川より別れ。青梅町を経て日向和田に至れるもの。

滋賀	國道	四四・三一・二一
	縣道	三九・〇一・一五
福井	國道	一九〇・五・三五
	縣道	九五・〇二・三三
石川	國道	九二五・三五・二三
	縣道	二〇・一四・五八
富山	國道	九六・三〇・一五
	縣道	五四〇・二三・二三
新潟	國道	三二・一一・五九
	縣道	三〇・三一・三四
福島	國道	八六・二〇・八一
	縣道	九九・二〇・一六
山梨	國道	三〇七・〇〇・三〇
	縣道	二、一三六・二七・一六
静岡	國道	七三・一七・三六
	縣道	一九二・二一・〇七
愛知	國道	二、一三六・二七・一六
	縣道	二、一三六・二七・一六
三重	國道	二、一三六・二七・一六
	縣道	二、一三六・二七・一六
岐阜	國道	二、一三六・二七・一六
	縣道	二、一三六・二七・一六
滋賀	國道	二、一三六・二七・一六
	縣道	二、一三六・二七・一六

るもの。九は東京の柳原町より下總に至れるものこれなり。

物産の著名なるものは。

袋物類	東錦繪	團扇	時計
紙卷煙草	菓子	紙	諸種の器械
諸種の細工	天麩羅	蕎麥	鰻蒲燒
佃煮	(以上東京市)		
八王子織	秩父絹	青梅綿	茶
多摩川鮎	海苔	煙草	

などの類なり。

第十二章 安房

安房の國は上總の國の南にありて。三面海に臨みたる半島國なり。此國上古は上總の一部分なりしが。元正天皇の養老二年割きて別に一國とせられしなり。面積三十六方里。もとは四郡なりしを近年合して安房郡の一郡とす。千葉縣の管轄に屬す。

地勢は概ね險阻にして平夷の部分少し。殊に北上總の境には。鋸山以下の諸山相連なり極めて高峻なり。

鋸山は山頂數峰に分れて恰も鋸の齒の形をなせり。海面を抽くこと

山口	國道	五七・一〇・一八
	縣道	一八六・三四・四九
島根	國道	一、五八七・一五・五二
	縣道	六六・〇六・一八
鳥取	國道	七八・一一・一八
	縣道	一、九四七・一六・二一
徳島	國道	五六・二五・〇八
	縣道	六八・〇五・五二
香川	國道	六五七・三三・五一
	縣道	二八・二七・二四
愛媛	國道	二七・二三・四四
	縣道	一、二四六・〇九・二九
山口	國道	一六・二八・〇九
	縣道	二四・一四・三一
山口	國道	一六八・〇七・二三
	縣道	三二・三四・二一
山口	國道	七三・〇二・四一
	縣道	一四〇七・三〇・一四

ばく分合せられて。元正天皇の養老二年遂に今の境域となれり。地勢は。北方下總に近き處および東西沿海の地は平夷なれども。中央より安房の境に至るに随ひ。ますく險峻なり。東海岸の中央に突出したる崎を大東岬といふ。これより北下總の北端に至るまで海岸の屈折極めて少し。いはゆる九十九里濱これなり。西南部には西に向つて突出したる岬あり。之を富津崎といひ。相模の觀音崎と東西相對して東京灣の口をなす。此間水底淺くして。干潮の時は遠く砂洲をあらはす故。或は之を富津洲ともいふ。軍事上要害の場所なる故。觀音崎と共に堅牢なる砲臺を設置せり。富津崎の南には。鋸山脈の盡くる處一の岬をなす。之を明金岬といふ。突兀たる斷崖に荒波の打ちよせて碎くるさま實に壯觀なり。傳へいふ。源賴朝石橋山の戰に敗れて安房に入る時。敵兵のため追はれて此に來り。岩穴にかくれて漸く免るゝことを得たりと。富津崎の北三里餘の處には木更津港あり。傳へいふ。日本武尊御東征の時海上俄に颶風起りしかば。龍姬橋姫身を以て尊の命に代らんと祈りて海に投じ給ひぬ。尊哀慕の情に堪へ給はず。此處につきて後數日去り給はざりしかば。時人此地を君不去とよびたり。木更津は其約語なりと。實に國內の良港にして。市街の戸數千五百餘あり。

高知	國道	一、三二一・二七・三五
	縣道	二〇〇・六・三一
長崎	國道	一、二九・二五・五一
	縣道	九九二・一一・二三
佐賀	國道	三〇、二〇・四六
	縣道	九六・〇六・〇六
福岡	國道	八四二・〇五・三五
	縣道	六九・三五・〇五
熊本	國道	一、三二・一五・〇七
	縣道	一、九三四・二四・三〇
大分	國道	四三・一八・二五
	縣道	一三五・二五・〇一
大分	國道	三四〇・〇六・一四
	縣道	三九・二八・一〇
大分	國道	一二〇・一六・三四
	縣道	二二四・二四・一八

東海岸の良港は勝浦を第一とす。九十九里濱の南數里の處にありて。船舶の出入常に絶えず。山の最も高きものは鹿野山とす。國の西南部にありて海面より高きこと千五百餘尺。其山腹にある神野寺は。聖徳太子の創建と言ひ傳へたり。其他國の中央には音信山あり。東南部には三石山鹿野山の西に鬼涙山寺あれどもいづれも千尺に満たざる小山なり。川の大なるものも少し。東海岸に流るゝものには。中央部に一宮川。其南に夷隅川。北境に栗山川あり。東京灣に注ぐものには。中央部に小瀬川。南部に小糸川。北部に養老川あり。流程いづれも二十里内外とす。市街にては木更津を第一とす。其他小瀬川の東岸に市場町あり。音信山の東北に鶴舞町あり。夷隅川の北岸に大多喜町あり。其川口に近く長者町あり一宮川の南岸に一宮本郷町等あれども其大なるものも七八百戸に満たざるほどなり。富津崎と明金岬との中間には造海城址あり。史に曰く。文明三年里見義成造海城を攻めしに。城主眞里谷道環。義成が文武の才を兼ねたるを聞き。之を試みんとて使を遣して曰く。此地の和歌百首を咏

地方	元標地名	里程	宮崎			鹿児島			總計		
			國道	縣道	里道	國道	縣道	里道	國道	縣道	里道
京都	三條大橋	一三一	四六・二七・四一	六一・一五・四九	九三七・一七・二七	四三・二九・〇三	一九五・〇〇・四八	一、八三六・〇九・二三	六、二九五・一一・二二	六一、二三〇・一六・四三	
大阪	高麗橋	一四四									
神奈川	横濱本町	八									
兵庫	神戸元町通	一五〇									
長崎	外浦町	三四四									
新潟	本町	一〇九									
埼玉	浦和宿	六									

○東京日本橋より府縣元標に至る里程

み給は、我れ甘んじて降参せんと。義成よりて鞍上直ちに百首をよみて贈りしに。道環驚嘆して遂に降れり。鐵道は。一線のみにて下總の千葉より來りて一宮本郷に止まれり。物産は。鱒、鱒、鱒、鱒、茶、煙草、蓮根、菅笠などを著名とす。

第十四章 下總

下總の國は。東は太平洋に面し。西は江戸川を以て武藏に堺し。南は半部上總に接し半部東京灣に臨む。而して北は坂東太郎の異名ある利根川を以て常陸を限り。東北の一小部上野、下野に觸る。面積百八十餘方里あり。之を九郡に分ちうち千葉郡、東葛飾郡、印旛郡、香取郡、匝瑿郡、海上郡の七郡は千葉縣に管治せられ。結城郡、茨城郡、北相馬郡の三郡は常陸の國と共に茨城縣の管轄に屬す。此國上古は上總、安房と共に總の國を稱へしこと。前章の初に述べたるが如し。地勢極めて平低にて國內一の山と稱すべきものなし。隨うて湖沼多

千葉	千葉町	一〇
茨城	水戸市縣廳前	二九
群馬	前橋連雀町	二八
栃木	宇都宮池上町	二七
奈良	奈良三條通り	一四〇
三重	津分部町	二二三
愛知	名古屋鐵炮町	九五
靜岡	吳服町	四六
山梨	甲府錦町	三四
滋賀	大津大京町	一〇八
岐阜	白木町	一〇四
長野	大門町	五九
宮城	仙臺大町	九二
福島	上町	九一
岩手	盛岡紺屋町	一四〇
青森	米町	一九二
山形	七日町	九五
秋田	大町	一五一
福井	照手上町	一三七
石川	金澤尾張町	一五九
富山	西町	一七六

く河津鐵橋に通じて。漕運の便大によし。川の最も大なるを利根川とす。源を上野の國に發し。國の境に入りて江戸川を分流し。本流はますく東に流れて。下野より來れる鬼怒川を合せ。常陸の境を流れて太平洋に注ぐ。流程七十一里にして坂東太郎の異名あり。利根川の河口には銚子港あり。東海岸の一要害なり。市街の戸數は四千餘。鱒の漁獲多きこと、銚子縮の製出地たることは。人のよく知るところなり。利根川口の東に突出したる岬を大吠崎といふ。燈臺あり。見渡すかぎり山影なく激浪打ちよせて岩を砕くかど怪しまる。大吠岬の四方には飯岡岬あり。これより南上總の大東岬に至るまでを九十九里濱といふ。利根川の分流なる江戸川は。武藏の境を流れて東京灣に入る。古へはこれより西武藏の隅田川まで下總の境域なりしこと。第十一章にいへるが如し。此の外なほ小流多し。いづれも源を近傍の山中に發して利根川に注ぐ。國の中央にある大沼は印旛沼なり。東西およそ二里、南北七里、周

鳥取	鳥取西町	一九四
島根	松江堅町	二二一
岡山	橋本町	一八六
山口	細工町	二二一
和歌山	大市町	二六六
徳島	京橋	一六一
香川	西横町	一七八
愛媛	高松常磐橋	二〇七
高知	松山札ノ辻	二二七
福岡	本町	二三四
佐賀	橋口町	三〇三
大分	白山町	二二四
熊本	破田橋	三二七
宮崎	新町	三二五
鹿児島	上野町	三六八
沖縄	山下町	三八一
北海道	那覇	五七四
	札幌	二七六

○郵便線路

國形を十二里あり。神崎川、鹿島川其他の小流此沼に注ぎ。沼の北端より利根川に流出す。國內第二の大沼を手賀沼といふ。東西三里南北殆んど一里あり。水源三あり。皆近傍の山中より發したる小流にして。下流は沼の東部より利根川に注ぐ。國の西北にある瓢形ひょうがたの沼は長沼なり。東西一里、南北十餘町。飯岡川、新妻川等の小流其水源となり。下流は沼の南部より利根川に會す。千葉縣廳せんせうの所在地なる千葉町は。國內第一の市街にて東京灣に臨み。戸數四千餘を有す。東京へは汽車一時間餘にて達するを得べし。町の東南には千葉氏累代の城址あり。之を猪鼻臺ぶなびだいといふ。千葉町の東北。汽車三十分にて達する處に佐倉町あり。戸數千五百餘ありて近衛歩兵第四聯隊の兵營あり。有名なる佐倉氏の産地なり。著名なる不動尊ふどうそんの所在地なる成田町は。佐倉町の東北汽車二十分餘の處にあり。不動尊は町内新勝寺に祭られたり。境内廣瀨ひろせにして老樹鬱茂し。堂坊の建築人の目を驚かすに足る。國の東北利根川の南岸に佐原町あり。千葉町より汽車にて一時四十

東京	普通道路	六七・七三
鐵道	六六・〇九	
普通道路	九一・六〇一	
鐵道	二〇八・六七六	
神奈川	普通道路	八〇・二五
鐵道	六三・七五	
普通道路	一一一・六七二	
鐵道	二〇〇・四四九	
埼玉	普通道路	一六一・八〇
鐵道	八〇・〇一	
普通道路	一七九・八一二	
鐵道	二六一・七一一	
千葉	普通道路	二八八・一六
鐵道	四〇・〇八	
普通道路	二九四・一〇四	
鐵道	五六・八九一	
茨城	普通道路	二七三・二一
鐵道	六五・七八	
普通道路	三六〇・六一四	
鐵道	一五三・三一四	

分を要す。北總第二の都會にして戸數殆んど千八百あり。町の東二里の處には官幣大社香取神社あり。經津主神に武甕槌神、天兒屋根命を合祀す。古書にしばしば見ゆる著名の神社なり。國の西北隅には。結城紬の製出を以て世に知られたる結城町あり。東京より水戸に通せる鐵道は之を過ぐ。古へ藤原秀郷支城を此處に築きてより。主こそかはれ城は存せしが。今は城堀の跡を認むるのみ。國の西南部武藏の境に近き處に國府臺とよぶ處あり。これ國府臺の戰の古跡なり。史に曰く。永祿七年里見義弘、北條氏の降人太田實正等と共に國府臺に據る。北條氏康子氏政と共に小田原より來り撃ちて大に之を破る。義弘遂に安房に走る之を國府臺の戰といふと。原野の大なるもの國內に二あり。一は小金原にして印旛沼の南部に位し。一は習志野といひて印旛沼の西南にあり。習志野の名は。明治六年今上天皇の親臨ましくして。近衛兵を練り習し給ひし時つけさせ給ひしなり。鐵道は五線あり。一は東京より來り千葉を経て佐倉に至れるもの。二は千葉より上總に入れるもの。三は佐倉より佐原に走れるもの。

栃木		群馬		長野		山梨		静岡	
數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實
普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道
一八二・三五五	一二六・七九	一八二・九〇三	三二〇・二五三	一八五・七四	五五・三四	一八八・三五九	一一九・八四二	三二四・四三	七二・七四
三四二・六八七	一〇九・八七七	一五五・〇〇四	一五四・六二三	三三三・一一	一一〇・一五	三三三・六七一	二五九・五二四		

四は同じく佐倉より銚子に至れるもの五は東京より水戸に通せる線が國の西北隅にて出入せるものこれなり。
物産には。

- 銚子縮 結城紬 野田醬油 佐倉炭
 - 葛西海苔 鹽 海上産
 - 生絲 流山味淋 鹽
- などを著名とす。

第十五章 常陸

常陸の國は東海道之東端に位し。南は利根川を以て下總と堺し。北は東山道の磐城に西は下野に接し。東部は一面太平洋に臨む。面積は三百三十方里あり。之を水戸市、東茨城郡、西茨城郡、那珂郡、久慈郡、多賀郡、鹿島郡、行方郡、新治郡、筑波郡、稻敷郡、眞壁郡の一市十一郡に分ち。茨城縣の管轄に屬す。
地勢は。南部および沿海の地を除く外。山嶽重疊して險阻なり。山の最も高きものを筑波山とす。よく和歌によまると有名の山なり。國の中央部よりや、西南に位し。高さ三千餘尺ありて峯二つに分れたり。其東なるを男體山といひ。西なるを女體山といふ。山腹には

愛知		三重		岐阜		滋賀		福井	
數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實
普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道
二七〇・四五	一〇三・二〇	三七一・九〇九	二〇五・〇五〇	二二九・二〇	六七・七一	二八七・三八五	一六二・九三九	三三六・七五	二二・五五
三三三・一一	三三三・六七一	二五九・五二四						九一・七四	一三五・八六一
								八三・一七	二四二・一三八
								一五六・七〇	一五八・五八〇
								八・五三	一八・四一四

筑波山あり。山間に似ざる繁華の市街なり。
筑波山の北には其支峯なる加波山あり。北部には高鈴山、花園山あり。其他尙多けれども何れも著名ならず。
東部海岸の中央に突出したる岬あり。之を大洗岬といふ。大洗磯前神社あり。人のよく海水浴にゆくところ。これより南利根川口に至るまで海岸の屈折少きこと九十九里濱に似たり。此間の海を鹿島灘といふ。
國の東南部に一大湖あり。霞浦といふ。東西七里、餘南北六里餘、周圍三十四里餘あり。其東に北浦あり。兩水相通じて利根川に注ぐ。
國內の大河は那珂川、久慈川の二つなり。那珂川は源を下野の國に發し。水戸市の北を流れて大洗岬の北より海に注ぐ。川口には淺町の良港あり。
久慈川は磐城の國より發し。南流し東流して那珂川の北數里の處より海に入る。川口には久慈の港あり。
國內第一の都會なる水戸市は。那珂川の南岸にありて殆ど六千の戸數を有す。茨城縣廳は此市にあり。東京へは汽車四時半にて達することを得べし。市内に二公園あり。第一公園（一名常盤公園）は。

石川		富山		新潟		福島		宮城	
數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實
普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道
一七二・七七	一九二・〇八七	一四〇・六四	一三五・二三八	四六五・九六	二二・八九	四九二・四七七	三二・九五七	四六一・四一	七一・八五
								二二二・三九	八四・五九
								二八三・一五二	一八六・九三九

舊藩主徳川齊昭の遊園とせし跡にて好奇を極めたり。園の東なる常盤神社は。舊藩主徳川光圀および齊昭を合祀せるものにて別格官幣社なり。第二公園はもと弘道館(齊昭の開きたる漢學の講堂)のありし處にて。其建物今も残りあり。

水戸市につぐべき市街は。霞浦の西岸にある土浦町とす。水陸の運送便利なれば商業甚だ盛なり。此地の名産に醬油あり。

水戸市より正北五里許の處に太田町あり。其町より十町許西にある西山は。徳川光圀の閑居せし遺跡にしていと静なり。

太田町の北一里の處には。水戸藩主累代の墳墓地なる瑞龍山あり。光圀が建てたる朱舜水の碑も此處にあり。

國內の鐵道は三線あり。一は東京より來り國の中央なる友部を経て水戸に至り磐城に走れるもの。二は友部より下野に至れるもの。三は水戸より久慈川に至れるものこれなり。

物産の重なるものは。

石材 煙草 鱈 鮎 木綿
半紙 酒 醬油 葛粉

の類とす。

山形		秋田		岩手		青森		京都	
數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實
普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道
三〇二・七三	二九五・七五二	三一六・九九	三五七・五二四	三〇四・〇五	一一八・二九	三三三・一六九	二〇四・一〇二	二二〇・九七	二六七・七〇五
								三三三・一四	九〇・五六〇

第三編 東山道

東山道は。畿内の東北より起り。東海道と北陸道との間を東北に走りたる長大の地域にして。地勢上之を二つに分ち。中仙道および奥羽とす。中仙道は東海道と北陸道との間に挟まれ。西の一部は畿内および山陰道に連なり。北は即ち奥羽につづく。四面山にして海に臨まず。奥羽は中仙道の北に連なり。東は太平洋に西は日本海に臨み。北は津輕海峡を隔て、北陸道に對す。

中仙道を近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野の六箇國に。奥羽を磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後の七箇國合せて十三箇國に分ち。滋賀、岐阜、長野、群馬、栃木、福島、宮城、岩手、青森、秋田、山形の十一縣之を分轄す。

その地勢。中仙道の中央部は。山嶽重疊して我國第一の高原をなし。奥羽も沿海の地と北上川および阿隈川の沿岸とを除けば概して峻險なり。

鐵道の通せるものすべて十七線あり。其一は東京より來りて陸奥の青森に至れるもの。其二は東京より上野の前橋に來れるもの。其三は前橋より下野の小山に至りて青森線に連接せるもの。其四は上野

大 阪		奈 瓦		和 歌 山		兵 庫		岡 山	
數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實
普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道
九五・五九	四四・〇六	一七二・七一	二四・二九	三〇〇・九四	三〇〇・六六五	三三三・三七	一〇六・二九	三〇二・六三	五七・五一
一五六・五八七	一六四・九三六	一五三・〇九三	六五・三五七			四三五・一七三	三二八・二八四	三四九・五二〇	一四五・二四八

の高崎より越後に走れるもの。其五は高崎より同じ國の下仁田に通せるもの。其六は下野の小山より常陸磐城を貫きて陸前の仙臺に至り青森線と連接せるもの。其七は同じ下野の越前と葛生との間に。其八は同國の宇都宮と日光との間に通せるもの。其九は陸前の仙臺と鹽釜との間に。其十は陸奥の尻内と浪との間に其十一は青森と碓氷との間に。其十二は岩代の福島と安治川口との間に通せるもの。其十三は東海道の尾張より入り。近江の米原、彦根、草津等を経て山城に走れるもの。其十四は米原より越前の國に入るもの。其十五は彦根と愛知川との間に通せるもの。其十六は草津より伊勢に至れるものこれなり。

航路は。陸前の石巻港より。西は東海道の諸港へ。東は青森へ。青森よりは北海道の函館および北陸道の諸港へ通じて。海船の往復絶えず。北上川、阿隈武川は。沿岸の諸國に交通の便を興ふること大なり。

第一章 近江

近江の國は。西は山城の國に接し。南は伊勢、伊賀に。東は美濃に連なり。北は若狹、越前に接す。而して西北の一小部丹波に連なり。

面積は三百餘方里。之を分ちて滋賀郡、栗太郡、野洲郡、甲賀郡、蒲生郡、神崎郡、愛知郡、大上郡、坂田郡、東淺井郡、伊香郡、高島郡の十二郡とし。滋賀縣に管轄せらる。

近江の國名は淡海より出づ。淡海とは湖水の古語にて。此國に琵琶湖あるが故のみ。もとは遠江に對して帝都の近國なるが故に「ちかづかみ」と稱へしがため。文字にのみ近の意味を殘せるなり。

琵琶湖は國の中央にあり。我國第一の大湖水にして周圍七十三里。湖邊の勝地八つを擧げて之を近江八景と名づく。すなはち比良の暮處。三井の晚鐘、栗津の晴嵐、瀬田の夕照、石山の秋月、唐崎の夜雨、堅田の落雁、矢走の歸帆これなり。湖中には四つの島ありて。其最も名高きものを竹生島といふ。湖の南端より流れ出づる川は勢田川にして。山城に入りて宇治川とよばるものなり。湖の沿岸は地平夷なれども。國境に逼るに隨ひて地勢ますます險峻となる。

山城の境には比叡山あり。其南方にはよく歌によまると、逢坂山あり。比叡山の北方には近江八景の一に數へらる、比良山あり。

北部には有名なる賤岳あり。史に曰く。羽柴秀吉山崎の戦に明智光秀を誅してより。威名日に高し。柴田勝家之を嫉みて遂に兵をあげ。近江の柳瀬に陣す。秀吉時に大垣にありしが。怒つて直ちに軍

廣 島		山 口		島 根		鳥 取		徳 島	
數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實
普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道
三七四・八三	六八・五八	二九二・一六	三六〇・四六〇	三四一・四一	三五三・六八五	一一六・九五	一四五・二六七	一五八・九七	一七五・七二三
四〇六・一七五	一七三・三五三								

光秀を誅してより。威名日に高し。柴田勝家之を嫉みて遂に兵をあげ。近江の柳瀬に陣す。秀吉時に大垣にありしが。怒つて直ちに軍

香川		愛媛		高知		長門		佐賀	
數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實
鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路
一〇〇、八〇八	二二〇、六六七	二五〇、九二六	二七〇、五八	二六二、七九七	二二六、七一	二三八、二八三	八四、〇〇九	一一一、〇八一	六九、五六五

を進め。賤岳に取つて大に之を破る。此時加藤清正以下七人最も功あり。世に之を賤岳の七本鎗といふと。

賤岳の東南。美濃との境に立てる高山は伊吹山（賤吹とも書く）なり。日本武尊の毒氣に犯され給ひしは此山なり。

姉川は源を賤岳近傍の山中より發し。南流して琵琶湖に入る。史に曰く。元龜元年織田信長徳川家康と兵を合せて姉川の南岸に陣す。淺井長政、朝倉景健大兵を率えて來り襲ふ。信長敗色あり。家康苦戰して遂に大に之を破る。姉川の取即ちこれなりと。

國內第一の都會は大津町なり。琵琶湖の南岸にありて戸數殆ど六千。滋賀縣廳は此處に置かる。また第四師團の分營あり。町の西にある三井寺は。天安二年勅願により建立せられしものにて。古書にもしばしば見ゆ極めて有名なり。

町の西には。天智天皇の志賀の郷の址なりといふ滋賀村あり。古歌にいはく。

さゝなみや志賀の都はあれにしを
むかしながらの山さくらかな

琵琶湖の東北岸。大津より海軍にて一時半の處に彦根町あり。陸には鐵道。湖には漁船ありて交通の便よく。商業繁盛なり。櫻田門外

福岡		熊本		大分		宮崎		鹿児島	
數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實	數里延	數里實
鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路
一六六、六六八	二七二、八三三	二九二、九一四	二七四、七四	二九〇、四五〇	二六九、一三	二九六、〇七三	三五〇、九六	二九六、〇七三	三五〇、九六

に殺されたる井伊直弼は此地の藩主なりき。

長濱縮緬の製出を以て世に知られたる長濱町は彦根より北方の同じ沿岸にありて。涼車にて二十分間に着すべし。

鐵道は。東海道線の美濃なり入りて山城に去れるものと。天津の東なる草津より分れて伊勢に至れるものと。彦根の北なる米原より分れて越前に走れるものと三線なり。而して琵琶湖上には絶えず漁船の往復ありて。國內の交通極めて便なり。

物産の重なるものは。

長濱縮緬 伊吹艾 大津繪 鮎 鯉
青花紙 竹 信樂陶器 茶

の類とす。

第二章 美濃

美濃の國は西近江に接し。南は伊勢、尾張、駿河に。北は飛騨に。西南は越前に連なり。東は信濃に隣りす。面積およそ三百二十餘方里。之を分ちて岐阜市、稲葉郡、羽島郡、海津郡、老養郡、揖斐郡、不破郡、安八郡、本巢郡、山縣郡、武儀郡、郡上郡、加茂郡、加兒郡、土岐郡、惠那郡の一市十五郡とし。岐阜縣に管轄せらる。

度六二明	年十治	里延	里實	鐵道	普通道路	總計		北海道		沖繩	
						里延	里實	里延	里實	里延	里實
度七二明	年十治	里延	里實	鐵道	普通道路	里延	里實	里延	里實	里延	里實
度六二明	年十治	里延	里實	鐵道	普通道路	里延	里實	里延	里實	里延	里實
度七二明	年十治	里延	里實	鐵道	普通道路	里延	里實	里延	里實	里延	里實
度六二明	年十治	里延	里實	鐵道	普通道路	里延	里實	里延	里實	里延	里實

地勢は。西南部木曾川の沿岸は平夷にして。いはゆる濃尾平原の一部をなせども。其他は概ね高峻にして。殊に北方飛騨の境は山嶺相重なりて我國第一の高地に連なれり。

東信濃の境には惠那山、三國山の高山あり。北越前の境には鷲岳、烏帽子岳あり。西近江の境には國見山、伊吹山等あり。いづれも國內著名の山とす。

名高き養老の瀧は國の西南部に獨立せる養老山中にあり。瀧の高さ九丈餘。幅殆ど一丈。九天より直下して飛沫の散亂するさま頗る壯觀なり。傳へいふ。曾て此國に至幸なる一樵夫あり。家貧しくして父の好める酒を買ふこと能はざるを悲しみけるが。一日此瀧の水の酒なることを發見し。日々汲み歸りて父に勸めけり。靈龜三年九月元正天皇此處に幸し給ひ。瀧の名を養老と賜ひ。樵夫をば厚く賞し給へりと。

岐阜縣廳の所在地なる岐阜市は。國の西南部尾張の境にあり。具原益軒曾て此地を京都に似たりといひしが。具に街衢整然として市内清潔なり。六千二百餘の戸數を有す。流車時程東京へは十四時間。名古屋へは一時間に満たずして達するを得べし。

岐阜の西南流車にて二十分餘の處に大垣町あり。國內第二の都會に

度三二明	年十治	里延	里實	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路
度五二明	年十治	里延	里實	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路
度六二明	年十治	里延	里實	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路	鐵道	普通道路

して殆ど四千の戸數を有す。

大垣の西南流車にて二十五分の處に關原驛あり。此近邊一里餘の原野を關が原といふ。史に曰く。石田三成等徳川家康の威名を嫉み。豊臣秀頼の命なりと偽りて兵を擧ぐ。家康時に上杉景勝を討たんとて下野の國まで進軍せしが。報を聞いて直ちに軍を返し。東西の軍關原に於て大に戦ふ。西軍遂に大に敗れ。三成等皆斬られたりと。

鐵道は東海道線の尾張より入りて。國の南部を過ぎたる一線のみ。されど木曾川の支流縱横に通じて大に運送の便あり。

物産の著名なるものは。

岐阜提灯 團扇 養老酒 茶 煙草
 烏帽子縮緬 生糸 畫絹 枝柿
 松茸 陶器 美濃紙

などの類なり。

第三章 飛騨

東京	線路延長
線路延長	四一・六七
線路延長	二六九・四四

飛騨の國は。南信濃に接し。東は信濃に。西は越前および加賀に隣し。北は越中に界す。面積およそ三百餘方里あり。之を分ちて大野郡、益田郡、吉城郡の三郡とし。岐阜縣の管轄に屬す。

秋田	線路延長	一〇二・二九
岩手	線路延長	二二二・二二
青森	線路延長	九六・四四
京都	線路延長	二四五・四三
大阪	線路延長	一一一・五〇
奈良	線路延長	三五三・六〇
和歌山	線路延長	六六・九六
兵庫	線路延長	三一四・七一
岡山	線路延長	二九・三五
広島	線路延長	二二四・五六
山口	線路延長	一五・二四
島根	線路延長	一六・八四
鳥取	線路延長	六三・〇四
徳島	線路延長	六六・九五
香川	線路延長	一三八・七三
愛媛	線路延長	六九四・四〇
高知	線路延長	七九・三六
長崎	線路延長	三九六・四二
佐賀	線路延長	八二・五三
福岡	線路延長	四二一・〇〇

南部駿河の境には赤石山あり。高さ御嶽に譲らず。赤石山の西方に亘りたる一帯の山脈は。有名なる木曾山脈にして。極めて急峻なり。源義仲の生長せしは此山中なるが故に木曾殿と呼ばる。

東部上野の境にある淺間山は。我國の火山中最も著名のものなり。高さ八千二百餘尺にして。頂上なる噴火坑は直徑一千尺に及ぶ。此坑より常に白煙の立ち昇るのみなれども。時には山嶽鳴動して砂石泥灰を噴出し。山麓の諸村ために害を被ることあり。

淺間山の東には碓氷峠あり。有名なるアプト式鐵道は此時を貫きて上野より来る。山上の輕井澤驛は海面より高きこと三千八百尺にして。極めて清涼なるが故に。夏日避暑に行くもの多し。

月見の名所として著名なる姥捨山は。國の北部にある小山なり。東に千曲川の流を隔て、鏡臺山と相對す。鏡臺山の頂より月の出づる時。其影田の水にうつりて數の月を現はすを賞し。呼びて田毎の月といふ。其南に高く聳ゆる山あり。冠着山と名づく。古へ姥捨山または更科山と稱へしは此方ならんとの説もあり。

姥捨山の北方に遠く見やらるゝは飯綱山、戸隠山なり。共に山上に神社ありて。登山するもの多し。平惟茂の戸隠山にて鬼神を退治

山口	線路延長	八八・二八
島根	線路延長	四九七・八三
鳥取	線路延長	八一・八二
徳島	線路延長	一五一・〇三
香川	線路延長	四六・二四
愛媛	線路延長	九三・一七
高知	線路延長	三三・二五
長崎	線路延長	四一・四〇
佐賀	線路延長	三五・一〇
福岡	線路延長	一一九・八六
福岡	線路延長	六六・二六
福岡	線路延長	一七六・九八
福岡	線路延長	六〇・五五
福岡	線路延長	八八・九四
福岡	線路延長	五七・九五
福岡	線路延長	二四一・九二
福岡	線路延長	四九・九八
福岡	線路延長	三〇七・九〇
福岡	線路延長	七五・一三
福岡	線路延長	四三四・九七

せしといふ物語は。諸典作者の筆に入りて人の普く知るところ。川の北流せるものは千曲川と犀川となり。千曲川は源を甲斐の國に犀川は國の南部に發し。相合して越後に入り。初めて信濃川の名を得。其二川の相合したる中洲を川中島といふ。戰國時代の兩雄上杉謙信、武田信玄の相戦ひし跡なり。

南流せるものは天龍川にして源を諏訪湖に發し。遠江の國に流れ入る。

天龍川の源なる諏訪湖は國中無二の大湖水にして。東西一里半。南北殆ど一里に及ぶ。湖中には鯉、鮒、鰻、蜆の類を産し。冬は堅氷を結びて人馬其上を往來す。湖水の傍には上諏訪神社、下諏訪神社あり。共に官幣中社にして武神と仰がれ給ふ。

長野縣廳の所在地なる長野町は。國の北部川中島に近き處にあり。戸数は五千四百餘ありて。國內第一の都會なり。町の北端に有名な善光寺あり。本堂の高さ十丈。垂木の數六萬本といふにて。構造の壯大を思ひやるべし。

長野町の南二里半の處に松代町あり。とも眞田氏の城邑にして。養蠶の業盛に開け。近世の豪傑佐久間象山の出でし地なりとす。

長野より南。汽車にて一時間の處に上田町ありて、も養蠶製絲の業

熊本	線路延長	八九・三七
大分	線路延長	一九〇・一九
宮崎	線路延長	七九・九七
鹿兒島	線路延長	一四九・一六
沖繩	線路延長	六三・一六
北海道	線路延長	一一〇・九六
總計	線路延長	五八・〇三
明治廿	線路延長	九九・六六
明治廿	線路延長	五九五・九七
明治廿	線路延長	一一七三・九六
明治廿	線路延長	三、八八一・四九
明治廿	線路延長	一一、二二二・二九
明治廿	線路延長	三、八四六・〇五
明治廿	線路延長	一一、五〇二・七九
明治廿	線路延長	三、七〇九・四六
明治廿	線路延長	一〇、二二三・〇六
明治廿	線路延長	三、四五五・七七
明治廿	線路延長	九、九二〇・九九

盛にして。上田綱上田綱の名こと世に知らる。上田町の西南十一里の處には松本町あり。戸數殆ど長野町に匹敵す。此地もと小笠原氏(後松平氏に移る)の城邑にして。今尙天主閣を殘せり。鐵道は。上野の國より碓氷峠を越えて入り來り。上田、長野等を過ぎて越後に去れる一線のみなり。篠井より分れて松本に赴かんとす。線路は。既に工を起したれども。未だ其成を近日に見る能はず。物産は。

- 蕎麥 上田綱 生糸 眞綿 柿
- 杏 栗 元結 材木 石材
- 鯉 石腦油

第五章 上野

上野の國は東下野に接し。西信濃に連なり。南は武藏に。北は越後に界す。而して東北の一小部岩代に續けり。面積三百餘方里。之を分ちて前橋市、群馬郡、勢多郡、多野郡、北甘樂郡、碓氷郡、吾妻郡、利根郡、山田郡、新田郡、邑樂郡、佐波郡の一市十一郡とし。

明治廿	線路延長	三、一四二・九四
明治廿	線路延長	九、一一三・六〇
明治廿	線路延長	三、二四二・六二
明治廿	線路延長	九、二五〇・三五

陸軍管區

師管聯隊區	警備隊	管 府 縣
近 本 郷	警備隊	東京の内五區三郡
宇都宮	警備隊	埼玉の内四郡
佐 倉	警備隊	栃木、茨城の内二郡
水 戸	警備隊	千葉
麻 布	警備隊	茨城の内一市十一郡
横 濱	警備隊	東京の内十區五郡及び伊豆七島
高 崎	警備隊	神奈川の内一市九郡、山梨
長 野	警備隊	群馬、埼玉の内五郡
小笠原島	警備隊	東京の内小笠原島

群馬縣に管轄せらる。此國上古は下野の國と共に。毛野の國と稱へしが。後分ちて上毛野、下毛野とし。それより今の文字に改めたり。地勢は北部最も高峻にして。南方に至るに隨ひ次第に低下し。殊に東南の一部は武蔵平原に連なれり。されば河流は悉く南流して武蔵に入る。

山の高きものは。西北越後の堺に岩家山あり。東北には駒嶽、刀根嶽あり。其南に武尊山あり。されど其最も著名なるものは榛名山、赤城山、妙義山とす。之を國中の三名山と稱す。

榛名山は國の中央部にありて。高さ三千五百尺。山中奇岩怪石頗る多く。突兀として柱の如く聳ゆるあり。扁平にして莖を伸べたるが如きあり。而して松杉鬱々として其間に茂り。奇觀いふべからず。山腹には榛名神社あり。

赤城山は榛名山の東北にあり。山中には古歌によくよまれたる石垣沼(今は大沼といふ)あり。頂上よりは關東の八州を一目に見下し眺望極めてよし。

妙義山は榛名山の南部に聳え。赤城山と共に三方鼎立の狀あり。山上には四つの大なる石門あり。殊に其第一門は巨巖高く中天に峙ち。

第	二	第	三	第	四	第	五	第	六	第	函館			
仙臺	福島	新發田	柏崎	佐渡	名古屋	津	豊橋	静岡	大坂	和歌山	大津	京都	廣島	尾道
宮城の内一市十三郡	福島の内十五郡	新潟の内一市七郡	新潟の内八郡	新潟の内佐渡	愛知の内一市五郡	三重の内一市十三郡	愛知の内九郡。静岡の内二郡	静岡の内一市十郡	大坂の内四區一市六郡	和歌山。奈良の内二郡。兵庫の内二郡	滋賀。三重の内二郡	京都の内二區八郡。奈良の内八郡	廣島の内一市八郡	廣島の内九郡。岡山の内十一郡

之に大なる洞穴を生じて天然の石門をなす。實に鬼神の工鑿といふべし。第二、第三、第四、共にやゝ小なれども。突兀たる巖腹に洞門の通せる状は皆同じ。山麓なる妙義町は三百五十餘の戸數を有し町の西には妙義神社あり。

西信濃の境にある碓氷峠は。アプト式鐵道を通せること。前章信濃の處にいへるが如し。

川には阪東太郎の異名ある利根川あり。源を刀根嶽より發し。片品川、薄根川、赤谷川の諸流を合せ。武藏、下總の境に入る。鮎と鯉とを此川の名産とす。

群馬縣廳の所在地なる前橋市は。國內第一の都會にして。生糸の賣買殊に盛なり。戸數は六千餘ありて。東京へは汽車にて三時間。長野へは五時半なり。市の西には厩橋の城址あり。長尾宗賢の築きし處なれども今は其跡もなし。前橋の字も古へは厩橋なりといふ。

前橋の西南にあって。國內鐵道の中心點となれるは高崎町なり。戸數五千餘ありて市内の繁盛前橋に譲らず。町の中央に城址あり。和田氏の居城なりといふ。今は歩兵第三聯隊の兵營となれり。

前橋より東。汽車にて一時間の處に桐生町あり。織物の製造最も盛にして。上州絹の名天下に高し。町の名は。桐生三郎爲顯といふ。

山口	濱田	隠岐	熊本	大村	鹿兒島	宮崎	大島	沖繩	五島	對馬	札幌	函館
山口の内十郡	島根の内一市十二郡。廣島の内五郡	島根の内四郡	熊本の内一市九郡	長崎の内一市六郡	鹿兒島の内一市八郡	宮崎。鹿兒島の内二郡	鹿兒島の内大島	沖繩	長崎の内一郡	長崎の内二郡	北海道的内一區三十三郡。石狩一區九郡。後志の内七郡。釧路の内七郡。天鹽六郡。北見の内四郡	北海道的内一區十七郡。渡島一區六郡。後志の内十郡

の此地に居城を構へし故なりといふ。

此國温泉礦泉の湧き出づる處極めて多し。其最も著名なるものは。温泉にて伊香保、草津。礦泉にては磯部、霧積とす。

國內の鐵道は。東京より來り高崎、前橋、桐生を経て。下野に至れるものと。高崎より安中磯部等を経て碓氷峠を越え信濃に入れるものと。高崎より西南下仁田に至れるものとあり。

- 生糸
 - 織物
 - 燧石
 - 砥石
 - 鮎
 - 桑苗
 - 煙草
 - 米
 - 麥
- などの著名とす。

第六章 下野

下野の國は西上野の國に連なり。北は岩代に隣し。東北は磐城に。東は常陸に。南は下總に接す。面積三百餘方里。之を分ちて宇都宮市、足利郡、安蘇郡、上都賀郡、下都賀郡、河内郡、芳賀郡、鹽谷郡、那須郡の一市八郡とし。栃木縣の管轄に屬す。

古へは上野の國と共に毛野の國と稱へしこと。前章にいへるが如し。地勢は北方に高く南方に低し。故に河流は皆南流して常陸に入る。

神戶	第 七	第 八	第 九	第 十	第 十 第
根室	弘前	盛岡	秋田	山形	金澤
北梅道の内二十四郡(根室五郡。北見の内四郡。釧路六郡。千島九郡)北海道の内十四郡(十勝七郡。日高七郡)青森。岩手の内二郡岩手の内十一郡宮城の内三郡秋田山形石川	富山。岐阜の内二郡	福井の内一市七郡岐阜の内七郡岐阜の内一市八郡愛知の内五郡京都の内十一郡兵庫の内八郡。福井の内三郡	兵庫の内一市六郡大阪の内二郡。ならびに三島郡の内	岡山	高知
齋振の内一郡)				香川	徳島
				愛媛	松山
				高知	高知
					久留米
					佐賀

山の最も著名なるものは日光山(一名二荒山)とす。國の西方に峙ち。其脈西北に伸びて黒髪山の高峰を起せり。山麓にある東照宮は徳川家康を祭りたる社にして。結構精緻を極め。實に我國美術の粹を悉く此社に萃めたるの觀あり。諺に「日光を見れば結構を語るな」といふは故なきにあらず。

日光山中には中禪寺湖あり。周圍五里餘。湖畔の眺望極めてすぐれ。また瀑布多く。中にも其名を天下に轟かしたるは霧降、裏見、華嚴の瀧とす。

山麓なる日光町は戸數千餘の小市街にして。此處より東京へは汽車五時間にて達す。

中禪寺湖の南方には足尾山あり。有名なる銅の産地なり。其他西方には奇勝を以て名ある庚申山あり。北方には那須嶽の火山あり。西南には岩船山太平山あり。いづれも山は高からねど山上の眺望を以て世に聞ゆ。

源實朝の歌に。

武士の矢やみつくるるを籠手の上に
 戦たばしる那須の篠原

とよまれたる那須野の原は。那須嶽の山麓より磐城の境に至る一帯

久留米	大分	小倉	第 十 第	十	第 十 第
佐賀	大分	小倉	高知	岡山	姫路
福岡の内一市十二郡佐賀。福岡の内三郡	大分の内八郡。熊本の内三郡	福岡の内五郡。大分の内四郡。山口の内二郡	高知	岡山の内一市十八郡。鳥取の内三郡	兵庫の内一市十郡。鳥取の内一市三郡。岡山の内二郡
					齋島上郡

の平原の稱なり。此近傍に我國第一の古碑として有名なる那須國造の碑あり。高さ四尺許の自然石にして草叢の中に埋没せしむ。元祿年間徳川光圀古跡の滅びんことを憂ひて之を修葺したり。

此邊温泉多く中にも湯本温泉最も名あり。温泉の近傍には世俗に狐の化したりといひ傳ふる殺生石あり。事は謠曲に見ゆ。

川の著名なるものは鬼怒川、渡良瀬川、那珂川なり。

鬼怒川は源を西北境なる鬼怒沼に發し。東流し南流して常陸に入り。渡良瀬川は源を日光山の西方に發し。西流して上野の國に入り。屈折して再び此國に入り。南流して下總に入る。二川共に遂には利根川に注げり。

那珂川は源を北境なる那須嶽の近傍に發し。南流し東流して常陸に入り鹿島灘に注ぐ。

栃木縣廳の所在地なる宇都宮市は。日光の東南汽車にて一時半の處にあり。五千餘の戸數を有し。市街の繁華國內に冠たり。東京へは汽車三時間にて達す。

宇都宮の西南。渡良瀬川の北岸に一市街あり。足利町これなり。有名なる足利絹の産地にして。また有名なる足利學校も此地にあり。足利學校は淳和天皇の朝小野篁の建設にかゝるといひ傳ふるもの

隊	號	聯隊區
近衛歩兵	第一聯隊	水戸
同	第二聯隊	横濱
歩兵	第三聯隊	宇都宮
同	第四聯隊	麻布
同	第五聯隊	仙臺
同	第六聯隊	新發田
同	第七聯隊	弘前
同	第八聯隊	秋田
同	第九聯隊	名古屋
同	第十聯隊	豊橋
同	第十一聯隊	金澤
同	第十二聯隊	岐阜
同		大坂
同		大津
同		福知山
同		姫路
同		廣島
同		濱田
同		九龍

にして。校内和漢の珍書を藏し。金澤文庫と共に。戦國兵亂の際文教維持に與つて大功あり。足利尊氏は此地より出でしなり。宇都宮の南。汽車にて五十分の處に小山町あり。戸數千三百餘にして。國內鐵道の中心たり。小山の西北。汽車にて十數分の處に栃木町あり。栃木縣廳はもと此地に置かれしを。近年宇都宮に移されしなり。戸數三千餘ありて。養蠶の業盛なり。國內の鐵道は小山町を中心として。南は東京へ東は常陸へ。西は上野へ北は磐城へ分派せり。而して別に其支線として。宇都宮より日光へ通せるものと。越谷より葛生へ通せるものとあり。物産の重なるものは。足尾の銅 足利絹 日光羊羹 挽物細工 生糸 真綿 木綿織 陶器 麻 干鰯の類なり。

第七章 磐城

磐城の國は。西岩代と大牙の如く相交はり。南は常陸に。西南は下

同	第二十二聯隊	松山
同	第二十三聯隊	熊本
同	第二十四聯隊	小倉
同	第二十五聯隊	久留米
近衛歩兵	第二聯隊	本郷
同	第四聯隊	佐倉
歩兵	第十五聯隊	長野
同	第三聯隊	高崎
同	第二十九聯隊	福島
同	第三十聯隊	柏崎
同	第三十一聯隊	盛岡
同	第三十二聯隊	山形
同	第三十三聯隊	津島
同	第三十四聯隊	静岡
同	第三十五聯隊	富山
同	第三十六聯隊	敦賀
同	第三十七聯隊	和歌山
同	第三十八聯隊	京都
同	第三十九聯隊	神戸
同	第四十聯隊	岡山

野に接し。北は陸前と、羽前とに連なる。而して東は一面太平洋に臨み。面積は四百餘方里。之を十郡に分つ。うち東白川郡、西白川郡、石川郡、田村郡、石城郡、雙葉郡、相馬郡の七郡は福島縣に管轄せられ。刈田郡、亘理郡、伊具郡の三郡は宮城縣の管轄に屬す。此國上古は陸奥に屬せしが。養老二年割かれて石城と稱せられ。同時に石背(今の岩代)の國をも置かれたり。されを間もなく舊に復してまた陸奥に屬せしが。明治元年再び割かれて磐城、岩代となれり。地勢は。沿海の地および北部阿武隈川の沿岸はや、平坦なれども。其他は山嶽相重なれり。海岸は鈍き弓形をなし。數箇の港灣なきにあらねど。いづれも大船を泊するに足らず。山の高きものは。南部に甲子山あり。海面より高きこと六千餘尺にして。山中には瀑布および温泉多し。西北部には日山、月山、靈山あり。相並びて上野の界を限る。阿武隈川は此國の南境より發し。北流して岩代の境を過ぎ。遂に岩代に入る。

同	第四十一聯隊	尾の道
同	第四十二聯隊	山口
同	第四十三聯隊	徳島
同	第四十四聯隊	高知
同	第四十五聯隊	鹿児島
同	第四十六聯隊	大村
同	第四十七聯隊	大分
同	第四十八聯隊	佐賀

○陸軍配備

(京東)團師一第	第一旅團(東京)	第一聯隊	東京
		第二聯隊	同
		第三聯隊	同
		第四聯隊	同
	第二旅團(松本)	第一聯隊	東京
		第二聯隊	同
		第三聯隊	同
		第四聯隊	同
(京東)團師衛近	第一旅團(東京)	第一聯隊	東京
		第二聯隊	同
		第三聯隊	同
		第四聯隊	同
	第二旅團(同)	第一聯隊	東京
		第二聯隊	同
		第三聯隊	同
		第四聯隊	同
	東部都督部(東京)		

其他東流して海に入る川には。新田川、小高川等あれども。いづれも極めて小さい。國の南部にある一市街を白河町とす。戸數殆ど二千を有し。商業殷盛なり。能因法師の歌に。都をばかすみと共に立ちしかと。めき風を吹く白河の關とよまれたる白河關は。實に此町にありしなり。町の北にある城址は。南北朝時代に結城親朝の居城なりしが。明治元年會津の兵此處に據りて官軍に抗せしかば。官軍遂に火を放つて之を陥れたり。極めて要害の城なりといふ。白河の北方にある三春町は。秋田氏の舊城邑にして。名高き馬の産地なり。千餘の戸數を有す。國の北方常陸の境には。有名なる勿來の關あり。源義家の。吹く風を勿來の關と思へども。道もせにちる山さくらかなとよみて風流の名を留めしは此處なり。鐵道は常陸より入りて勿來驛を過ぎ。海濱に沿ひて仙臺に走れるものと。西北と東北の一部とを經過せるいはゆる青森線とあり。

(京東)團師二第(仙臺)	第三旅團(仙臺)	第四聯隊	仙臺
		第五聯隊	同
		第六聯隊	同
		第七聯隊	同
	第十五旅團(新發田)	第一聯隊	新發田
		第二聯隊	同
		第三聯隊	同
		第四聯隊	同
(幌札)團師七第	第十三旅團(未定)	第一聯隊	未定
		第二聯隊	同
		第三聯隊	同
		第四聯隊	同
(前弘)團師八第	第四旅團(弘前)	第一聯隊	弘前
		第二聯隊	同
		第三聯隊	同
		第四聯隊	同
	第十六旅團(秋田)	第一聯隊	秋田
		第二聯隊	同
		第三聯隊	同
		第四聯隊	同
(名古屋)團師三第	第五旅團(名古屋)	第一聯隊	名古屋
		第二聯隊	同
		第三聯隊	同
		第四聯隊	同
	第十七旅團(豊橋)	第一聯隊	豊橋
		第二聯隊	同
		第三聯隊	同
		第四聯隊	同
師四第	第七旅團(大阪)	第一聯隊	大阪
		第二聯隊	同
		第三聯隊	同
		第四聯隊	同
	第八旅團(大阪)	第一聯隊	大阪
		第二聯隊	同
		第三聯隊	同
		第四聯隊	同

物産には。三春駒、杜馬焼、生糸、織物、桑苗、蜂蜜、鮭、鯛、柿、栗などを著名とす。

第八章 岩代

岩代の國は。東磐城の國と交錯し。西は越後に堺し。北は羽前に。南は下野に連なる。而して西南の一小部上野に接す。面積四百九十餘方里あり。之を分ちて信夫郡、伊達郡、安達郡、安積郡、岩瀬郡、南會津郡、北會津郡、耶麻郡、大沼郡、河沼郡の十郡とし。福島縣に管轄せらる。此國古へ陸奥の一部たりしこと。前章磐城のところにいへるが如し。地勢東部阿武隈川の沿岸はや、平夷なれども。西部は山勢險峻なり。國の中部には猪苗代湖あり。周圍十三里半の大湖水にして。中に島あり。松影水に映じて風光瘴の如し。湖上には汽船の往復頻繁にして大に運送の便を助く。猪苗代湖の北に聳えたる山を磐梯山といふ。此山大同年中に噴火せ

<p>第九旅團(伏見) 第九聯隊 大津</p> <p>第三六聯隊 伏見</p>	<p>第六旅團(金澤) 第七聯隊 金澤</p> <p>第三五聯隊 同</p> <p>第十八旅團(敦賀) 第十九聯隊 敦賀</p> <p>第三三聯隊 鯖江</p>	<p>第八旅團(姫路) 第十聯隊 姫路</p> <p>第四一聯隊 鳥取</p> <p>第二十旅團(福知山) 第三二聯隊 福知山</p> <p>第三九聯隊 姫路</p>	<p>第九旅團(廣島) 第十二聯隊 廣島</p> <p>第四二聯隊 同</p> <p>第二十一旅團(山口) 第三一聯隊 山口</p> <p>第四三聯隊 山口</p>	<p>第十一旅團(熊本) 第十三聯隊 熊本</p> <p>第四四聯隊 鹿見島</p> <p>第二十三旅團(大村) 第三三聯隊 熊本</p> <p>第四六聯隊 大村</p>	<p>第十旅團(松山) 第十三聯隊 高知</p> <p>第四四聯隊 同</p> <p>第十旅團(松山) 第十三聯隊 高知</p> <p>第四四聯隊 同</p>	<p>第十一旅團(小倉) 第十二聯隊 小倉</p> <p>第四一聯隊 同</p> <p>第二十四旅團(久留米) 第三四聯隊 福岡</p> <p>第四六聯隊 久留米</p>
---	--	---	--	---	---	---

しこと史上に見ゆれども。いつしか烽火せしに。明治二十一年七月俄に噴火して山麓の村落ために埋没せられ。死傷者五百人に及びたり。

磐梯山の東北には吾妻山あり。此山も火山脈に當れども。これまで未だ噴火せしこと無かりしに。明治二十六年五月轟然破裂して水蒸氣、泥灰を噴出し。今に至つて尙熄むことなし。

火山ならぬ高山には。東北部に安達太郎山あり。高さ五千四百尺。西南下野の境に燧岳あり。高さ六千八百餘尺。其他五千尺内外のものも多し。

川の大なるものは阿武隈川なり。源を磐城の旭岳に發し。北流して國の境を過ぎ。遂に此國の東部に入りて。再び磐城に流れ去る。

阿武隈川に亞ぐ大河は。阿賀川なり。源を猪苗代湖に發し。西流して越後に入る。

福島縣廳の所在地なる福島町は。國の東北部にあり。國內第一の都會にして殆ど三千五百の戸數を有す。東京へは汽車にて九時半。宇都宮へは六時半にて達す。

福島町の西北に大島城あり。國人此處を佐藤館と呼ぶ。治承年中信夫の庄司佐藤元治の據りし古跡なり。元治は繼信、忠信の父にして頼朝の藤原泰衡を伐ちける時。戦死せし人なり。

福島町より南。汽車にて五十分の處に二本松町あり。製糸の業盛にして。市街の繁盛福島に繼ぐ。町の東方阿武隈川を渡りたる處に。いはゆる安達原あり。

猪苗代湖の西部にある若松町は。繁盛や。福島町に劣るといへども。戸數は却つて多し。明治戊辰の役に會津藩士の據りて官軍を拒ぎたる瀧澤峠は。近く町の西方にあり。白虎隊の戦死を以て有名なる飯盛山も。其近傍にあり。

鐵道は南部磐城より來りて。國の東部を貫き。再び磐城を過ぎて東北へ走る。

物産の著名なるものは。

生糸	煙草	銀	信夫摺	二本松紬
蠟燭	會津塗	木材	藍	

の類なり。

第十師團(龜九) 第十一師團(倉小)

第二十二旅團(丸龜) 第十三聯隊 丸龜

第十三聯隊 同

第十旅團(松山) 第十三聯隊 高知

第十四聯隊 同

第十二旅團(小倉) 第十四聯隊 小倉

第十四聯隊 同

第二十四旅團(久留米) 第三四聯隊 福岡

第四六聯隊 久留米

○憲兵管區

第一	東京 神奈川 群馬 千葉 山梨 茨城 栃木 長野 埼玉
第二	宮城 新潟 青森 秋田 福島 岩手 山形
第三	愛知 石川 三重 富山 靜岡 岐阜 福井
第四	大阪 京都 兵庫 和歌山 滋賀 岡山 奈良 鳥取

第九章 陸前

陸前の國は南磐城に接し。西は羽前に接し。北は陸中、羽後に連なる。而して東は一面太平洋に臨めり。面積は四百餘方里。之を分ち

第五	廣島 愛媛 山口 高知 島根 香川 徳島
第六	熊本 長崎 福岡 鹿児島 宮崎 佐賀 沖繩
第七	北海道

○海軍管區

- 第一 横須賀鎮守府
軍港位置(相模國三浦郡横須賀) 海岸延長里程(一、〇五七)里
管 陸中國九戸。下閉伊郡界より紀伊國南牟婁。東牟婁郡界に至る海岸海面。及び小城 笠原諸島海岸海面
- 第二 吳鎮守府
軍港位置(安藝國安藝郡吳) 海岸延長里程(二、〇六七)里
管 紀伊國南牟婁。東牟婁郡界より石見。長門國界に至り。また筑前。豊前國界より九州東海岸に沿ひて日向。大

て一市十四郡とし。うち仙臺市、柴田郡、名取郡、宮城郡、黒川郡、加美郡、志田郡、玉造郡、栗原郡、遠田郡、登米郡、桃生郡、牡鹿郡、本吉郡の一市十三郡は宮城縣に管轄せられ。氣仙郡の一郡のみは。岩手縣の管轄に屬す。

此國も陸奥の一部なりしが。明治元年磐城、岩代等と共に一國と定められたり。

地勢は。西羽前の境のみ山脈連亘して險阻なれども。東部沿海の地は一帯に平坦なり。

山の高きものは北境に駒岳あり。西境に荒神山あり。南方に蕃城山あり。されど其最も著名なるものは金華山とす。

海岸は屈折極めて甚しく。中央部には南に向つて半出したる小半島あり。之を牡鹿半島といひ。其南に抱かれたる灣を仙臺灣といふ。牡鹿半島極端の海中に。突兀たる險山の島となりて峙てるあり。これ著名なる金華山なり。周圍十里餘にして高さ殆ど二千尺あり。山中には清泉湧き金沙生じ。實に國內第一の勝地なり。山腹にある黄金神社は延喜式内に屬して。結構壯麗を極む。

牡鹿半島の西部には大河あり。之を北上川といふ。源を陸中の北部に發し。南流して此處に注ぐ。流程七十六里ありて。本土第三の長流なり。

北上川の河口には石巻港あり。市街は兩岸に跨りて三千百餘の戸數を有し。船舶常に港内に輻湊す。實に近海第一の要港なり。

北上川に亞ぐの大川を阿武隈川とす。源を磐城の南境なる旭岳に發し。北流して岩代に入り。再び磐城を過ぎて國の南部より海に注ぐ。流程五十里なり。

宮城縣廳の所在地なる仙臺市は。國の南部にあり。殆ど一萬五千の戸數を有し。奥羽第一の大都會なり。此地もとは戰國時代の豪傑伊達政宗の藩地にして。市と西端にある青葉城址は其跡なり。今は第二師團の營所となれり。此市より東京へは汽車にて十二時間。福島へは三時間を要すべし。

仙臺市の東方に一帶の廣野あり。これを萩の名所として知られたる宮城野とす。

仙臺市の西方に當りて多賀城址あり。古へ東夷の慄悍を防がんため に設けられし跡なりといふ。

我國三景の一として有名なる松島は。仙臺の東北松島灣内にあり。灣の廣さ東西三里南北二里半。數百の島嶼其内に散在し。一島一嶼毎に景を異にし態を變じて。風光筆紙に寫しがたし。賦に天下の

域 隅の國界に至り。ならびに四國の海岸海面。及び内海

- 第三 佐世保鎮守府
軍港位置(肥前國東彼杵郡佐世保) 海岸延長里程(一、四九七)里
管 筑前。豊前國界より九州西岸海に沿ひて日向。大隅の國界に至る海岸海面。及び壹岐。對馬。沖繩諸島の海岸海面
- 第四 舞鶴鎮守府(未開港)
軍港位置(丹後國加佐郡舞鶴) 海岸延長里程(一、〇五五)里
管 石見。長門の國界より羽後。陸奥の國界に至る海岸海面。及び隱岐。佐渡の海岸海面
- 第五 室蘭鎮守府(未開港)
軍港位置(膽振國室蘭郡室蘭) 海岸延長里程(二、二七六)里

域 隅の國界に至り。ならびに四國の海岸海面。及び内海

管轄 北海道及び陸奥。ならびに
陸中 中國北九戸。南九戸兩郡
の海岸海面

○陸軍軍人軍属總員

軍人	將	官	及	相	當	官	上	長	官	士
明治二十九年	明治二十八年	明治二十七年	明治二十六年	明治二十五年	明治二十四年	明治二十九年	明治二十八年	明治二十七年	明治二十六年	明治二十五年
八八	八二	七〇	六三	六四	六〇	九四	八八	六六	五七	五三
五、七五九	五、六一三	五、三三五	五、二七九	六、二六六	六、六六六	八、八八三	九、四〇六	三、八七〇	三、七二五	三、五八七

絶景なり。
松島灣の海濱には鹽釜町あり。此邊一帯の海を千賀の浦といひ。又鹽釜の浦ともいふ。
鐵道は。武藏より下野警城を経て仙臺に入り。直に陸中に走れる青森線と。仙臺より鹽釜に通せるもの。武藏より常陸警城を経て仙臺に来れるものもあり。
物産にて著名なるは。
仙臺平 八橋織 埋木細工 茶 米穀
麻 木材 馬 食鹽 生糸
眞綿
の類とす。

第十章 陸中

陸中の國は。南陸前と相接し。西は羽後と相背き。北は陸奥に連なる。而して東の一面は海に臨めり。面積およそ九百餘方里。之を分ちて一市十二郡とし。うち盛岡市、岩手郡、紫波郡、稗貫郡、和賀郡、江刺郡、鷹巣郡、西磐井郡、東磐井郡、上閉伊郡、下閉伊郡、九戸郡の一市十一郡は巖手縣に管轄せられ。鹿角郡の一郡は秋田縣

官	准	士	官	徒	下	士
明治二十七年	明治二十六年	明治二十五年	明治二十四年	明治二十九年	明治二十八年	明治二十七年
四、九〇六	三、八七〇	三、七二五	三、五八七	一、〇一〇	九、七二	三、三三一
四九	四九	四九	四七	四、〇〇四	二、三四七	二、二六二
二、〇六八	一、八七八	二、〇六八	二、一八一	二、〇六九	一、六五五	一、九八七
一、〇、五三四	一、六五四	一、〇、五三四	一、〇、五三四	一、〇、五三四	一、〇、五三四	一、〇、五三四

の管轄に屬す。
古へ陸奥の一部なりしこと。および明治元年分割せられて一國となりしことは陸前に同じ。
國の中央を南流せる北上川の沿岸は。地味肥沃の平野なれども。東西兩部は山勢急峻にして。殆ど人烟を絶つに至る。
山嶽には西北部に岩手山、駒岳あり。東北部に五葉山あり。其北に藥師岳あり。いづれも屈指の高山なりとす。
前九年の戦によつて其名高き衣川は。北上川の一支流にして國の南部にあり。今なほ柵を設けし舊跡の存するを見ん。史に曰く。奥羽の酋長安部頼時亂をなす。源頼義陸奥守となり。其子義家と共に行いて之を討つ。頼時衣川の柵を作りて防備極めて嚴なり。頼義、義家しばしば攻むれども柵固くして抜けず。すでにして出羽の豪族清原武則一萬の兵を率ゐ來つて頼義に屬せしかば。頼義の軍大に奮ひ。遂に進んで柵を攻む。是より前頼時流矢に中りて死し。其子貞任、宗任抗戦せしが。遂に出で奔りて厨川の柵を保つと。
厨川の柵は衣川より北方にして國の中央部に位す。史に曰く。貞任、宗任等厨川の柵に逃れ入りしが。頼義、義家追撃いよく急なりければ。遂に支へずして出て降りり。今尙柵の跡を殘せり。

卒		合		計	
明治二十九年	二五〇、三四一	明治二十九年	二八七、八五八	明治二十九年	二八七、八五八
明治二十八年	二三〇、一九〇	明治二十八年	二六〇、四〇二	明治二十八年	二六〇、四〇二
明治二十七年	二六五、二四七	明治二十七年	二九〇、一三七	明治二十七年	二九〇、一三七
明治二十六年	二五一、八四七	明治二十六年	二七一、六二三	明治二十六年	二七一、六二三
明治二十五年	二四五、九八三	明治二十五年	二六八、一一二	明治二十五年	二六八、一一二
明治二十四年	二五一、二五四	明治二十四年	二六七、八九五	明治二十四年	二六七、八九五

奏		任	
明治二十九年	一五六	明治二十九年	一〇六
明治二十八年	一三〇	明治二十八年	九三
明治二十七年	一〇六	明治二十七年	一〇七
明治二十六年	一〇七	明治二十六年	一〇七
明治二十五年	九三	明治二十五年	九三
明治二十四年	一〇六	明治二十四年	一〇六

巖手縣廳の所在地なる盛岡市は。厨川の東部にあり。戸數殆ど六千七百。北上川は市の西を流れ。鐵道は南北に通じて水陸運送の便共によるし。東京へは汽車にて十八時間餘。仙臺へは六時間にて達す。

其他國內の小市街をめぐれば。衣川の東北部に水澤町あり。盛岡と水澤との中間に花巻町あり。東部には遠野町等あり。

鐵道は陸前より來り。水澤、花巻、盛岡等を経て。陸奥に入れる一線の物産には、

牛	馬	南部縮緬	蠶種	魚粕
藍	硯石	磁石	煙草	苧麻

などの類を著名とす。

第十一章 陸奥

陸奥の國は。東山道の北端に位し。東は太平洋に面し。西は日本海に臨み。北は津輕海峽を隔て、北海道の渡島と相對す。即ち三面は海にして。南の一方のみ陸中、羽後の兩國に連なる。面積九百餘方

判		任		備		合		計	
明治二十九年	一、一四五	明治二十九年	二、一一二	明治二十九年	七四〇	明治二十九年	三、四一三	明治二十九年	一、六〇七
明治二十八年	九四五	明治二十八年	一、八一九	明治二十八年	七六七	明治二十八年	二、八九四	明治二十八年	一、五四四
明治二十七年	八八五	明治二十七年	九八三	明治二十七年	七六七	明治二十七年	一、九七四	明治二十七年	一、六三二
明治二十六年	七五八	明治二十六年	七一一	明治二十六年	八〇六	明治二十六年	一、六三二	明治二十六年	一、六三二
明治二十五年	六九五	明治二十五年	七一一	明治二十五年	七四〇	明治二十五年	一、六三二	明治二十五年	一、六三二
明治二十四年	六九五	明治二十四年	七一一	明治二十四年	八〇六	明治二十四年	一、六三二	明治二十四年	一、六三二
明治二十三年	七一一	明治二十三年	七一一	明治二十三年	七四〇	明治二十三年	一、六三二	明治二十三年	一、六三二
明治二十二年	七一一	明治二十二年	七一一	明治二十二年	七四〇	明治二十二年	一、六三二	明治二十二年	一、六三二
明治二十一年	七一一	明治二十一年	七一一	明治二十一年	七四〇	明治二十一年	一、六三二	明治二十一年	一、六三二
明治二十年	七一一	明治二十年	七一一	明治二十年	七四〇	明治二十年	一、六三二	明治二十年	一、六三二
明治十九年	七一一	明治十九年	七一一	明治十九年	七四〇	明治十九年	一、六三二	明治十九年	一、六三二
明治十八年	七一一	明治十八年	七一一	明治十八年	七四〇	明治十八年	一、六三二	明治十八年	一、六三二
明治十七年	七一一	明治十七年	七一一	明治十七年	七四〇	明治十七年	一、六三二	明治十七年	一、六三二
明治十六年	七一一	明治十六年	七一一	明治十六年	七四〇	明治十六年	一、六三二	明治十六年	一、六三二
明治十五年	七一一	明治十五年	七一一	明治十五年	七四〇	明治十五年	一、六三二	明治十五年	一、六三二
明治十四年	七一一	明治十四年	七一一	明治十四年	七四〇	明治十四年	一、六三二	明治十四年	一、六三二
明治十三年	七一一	明治十三年	七一一	明治十三年	七四〇	明治十三年	一、六三二	明治十三年	一、六三二
明治十二年	七一一	明治十二年	七一一	明治十二年	七四〇	明治十二年	一、六三二	明治十二年	一、六三二
明治十一年	七一一	明治十一年	七一一	明治十一年	七四〇	明治十一年	一、六三二	明治十一年	一、六三二
明治十年	七一一	明治十年	七一一	明治十年	七四〇	明治十年	一、六三二	明治十年	一、六三二
明治九年	七一一	明治九年	七一一	明治九年	七四〇	明治九年	一、六三二	明治九年	一、六三二
明治八年	七一一	明治八年	七一一	明治八年	七四〇	明治八年	一、六三二	明治八年	一、六三二
明治七年	七一一	明治七年	七一一	明治七年	七四〇	明治七年	一、六三二	明治七年	一、六三二
明治六年	七一一	明治六年	七一一	明治六年	七四〇	明治六年	一、六三二	明治六年	一、六三二
明治五年	七一一	明治五年	七一一	明治五年	七四〇	明治五年	一、六三二	明治五年	一、六三二
明治四年	七一一	明治四年	七一一	明治四年	七四〇	明治四年	一、六三二	明治四年	一、六三二
明治三年	七一一	明治三年	七一一	明治三年	七四〇	明治三年	一、六三二	明治三年	一、六三二
明治二年	七一一	明治二年	七一一	明治二年	七四〇	明治二年	一、六三二	明治二年	一、六三二
明治元年	七一一	明治元年	七一一	明治元年	七四〇	明治元年	一、六三二	明治元年	一、六三二
明治二十九年	二九一、二七一	明治二十九年	二九一、二七一	明治二十九年	二九一、二七一	明治二十九年	二九一、二七一	明治二十九年	二九一、二七一

明治二十九年

二九一、二七一

陸軍軍人軍屬員

通俗日本地理

一六五

里あり。之を分ちて一市九郡とし。うち弘前市、東津輕郡、西津輕郡、中津輕郡、南津輕郡、北津輕郡、上北郡、下北郡、三戸郡の一市八郡は青森縣に管轄せられ。二戸郡の一郡は岩手縣の管轄に屬す。國の東西兩部共に海中に斗出して半島をなす。其東なるは下北郡なるを以て之を下北半島と稱し。西なるは東津輕郡なるを以て之を東津輕半島と稱す。此兩半島相對して一大灣を抱き。其中央に夏泊崎の突出ありて灣を兩分せり。其東なるを野邊地灣といふ。灣中に野邊地港あるを以てなり。西なるを青森灣といふ。灣中に青森港あるを以てなり。

下北半島の東北に斗出せる岬を尻矢岬といひ。西北津輕海峽に斗出せるを大間岬といふ。

東津輕半島の西北に斗出して。渡島の白神崎と相對せるは龍飛崎なり。また其東北の一端。即ち下北半島と相對せる處を平館崎といひ其間の海峽を平館海峽とす。

山の著名なるものをめぐれば。國の西南部に岩木山あり。山頂富士の八峰に似たるを以て一名を津輕富士といふ。高さ五千二百餘尺あり。中央部には八甲田山あり。高さ六千餘尺に及ぶ。

下北半島には恐山あり。火山にして高さ殆ど三千尺なり。

四	合	卒	計	上	長	官	見	習	士	官	及	補	生	官	准	士	官	下	計
二、〇八一	一、九二三	四五	三五四	一四五	七九	一、〇一六	一〇、三七九	二、〇一八	四九	三九一	一九三	七六	一、二一七	一〇、四六二	二、三八八	六	九	二二	二一八

も鳥海山最も高峻にして。高さ殆ど七千尺。其形南より望めば恰も富士山の如し。川の大なるものは能代川、御物川、子吉川なり。能代川は源を陸中に發し。南流して能代港に注ぎ。御物川は源を國の南境に發し。北流し西流して土崎港に注ぐ。子吉川は鳥海山より發して古雪港に注げり。秋田縣廳の所在地なる秋田市は。御物川の北部にありて。六千六百餘の戸數を有す。地僻賑なれども極めて繁華なり。市内に秋田城址あり。慶長年間佐竹義宣の築きたる所にして。今は公園となれり。中古の歴史に秋田城など見ゆる秋田の地名は。秋田市とは異にて。市の北部なる寺内村(古名秋田村)なり。國人此處を勅使館といふ。蓋し征夷將軍の蝦夷鎮撫の勅命を奉じて此處に居るが故のみ。羽前の境に一瓦港あり。酒田港といふも酒井氏の城邑にして。港内船舶の輻湊常に絶えず。市街の戸數殆ど三千五百に近し。鐵道は未だ一線をも通せず。物産の重なるものは。

- 石材 生糸 春慶塗 蠶種 馬
- 畝織 菅笠 虎斑竹 秋田蔴 煙草

國

七	合	卒	計	上	長	官	見	習	士	官	及	補	生	官	准	士	官	下	計
二、四〇二	二、七四七	三〇六	二、四一七	一、一五七	四九七	七、二一一	七二、五六六	八四、一五四	六	七四	四四〇	一、二一一	一、六三二	三六	八二	一、二五二	一、二五二	一、二五二	一、二五二

第十三章 羽前

味噌の類なり。

羽前の國は。北は羽後に接し。東は陸前、城營に隣し。南は岩代に連なる。而して西部は。半ば越後の國に堺し。半ば日本海に臨む面積殆ど五百餘方里。之を山形市、米澤市、南村山郡、東村山郡、西村山郡、北村山郡、最上郡、東田川郡、西田川郡、西置賜郡、東置賜郡、南置賜郡の二市十郡に分ち。山形縣の管轄に屬す。古へは羽後と共に出羽の國と稱せしこと。前章にいへるが如し。地形恰も凸字を横にしたるに似たり。而して其頭部は海に面せる所なり。地勢峻阻にして。國中到る處に山嶽重疊せり。たゞ最上川の沿岸のみは平坦の沃野多し。最上川は國中第一の長流にして。源を東南隅なる吾妻山に發し。北流してゆく。羽黒川、野川、白川等を合せ。羽後の境に至りて酒田港内に注ぐ。流程六十四里なり。我國三急流の一なること東海道富士川の處にていへり。此川も富士川と同じく川舟の便ありて。兩

下	士	卒	合	計	奏
明治二十九年	二、二九二				
明治二十八年	二、〇二三				
明治二十七年	一、八八八				
明治二十六年	一、八三六				
明治二十五年	一、七七七				
明治二十四年	一、七五一				
明治二十九年	一五、五九七				
明治二十八年	一三、一五四				
明治二十七年	一一、四三二				
明治二十六年	一〇、二三三				
明治二十五年	九、二八三				
明治二十四年	九、四四一				
明治二十九年	二〇、〇二八				
明治二十八年	一七、一四〇				
明治二十七年	一五、二一七				
明治二十六年	一三、八三九				
明治二十五年	一二、九四九				
明治二十四年	一一、〇九八				
軍					五
屬					一

後酒井忠勝に移れり。其城址今も尙あり。此國歴史上の關係少なく。且小國にして。殊に鐵道の通せるものなく交通不便なれば。隨うて記述すべき事項も少なし。物産の著名なるものは。

- 若狹塗
- 藍
- 銅
- 平目魚
- 素麴
- 草蓆
- 鉄

の類なり。

第二章 越前

越前の國は。西若狹に連なり。南は近江、美濃に接し。東は飛驒に北は加賀に隣す。而して西北は海に臨めり。面積二百七十七方里餘にして。之を福井市、足羽郡、吉田郡、阪井郡、大野郡、南條郡、今立郡、丹生郡、敦賀郡、の一市八郡とし。福井縣の管轄に屬す。西部若狹の境に。立石崎の突出して敦賀灣を抱ける外。海岸に著しき屈折なし。南部には山嶽重疊して地勢頗る峻險なれども。北部に至つて漸次傾斜し。殊に九頭龍川の沿岸は土地膏腴にして農作に適せり。山の重なるものをあぐれば。飛驒の境に大日嶽あり。中央部に日野

任	判	任	備	合
明治二十八年	四二			
明治二十七年	四二			
明治二十六年	三六			
明治二十五年	三九			
明治二十四年	四一			
明治二十九年	五四〇			
明治二十八年	五二八			
明治二十七年	五〇八			
明治二十六年	四五七			
明治二十五年	四九八			
明治二十四年	四七四			
明治二十九年	五八一			
明治二十八年	五四六			
明治二十七年	五六四			
明治二十六年	五一四			
明治二十五年	四八七			
明治二十四年	四七九			
明治二十九年	一一七二			
明治二十八年	一一一六			
明治二十七年	一一一四			
明治二十六年	一〇〇七			

岳、文珠山、白椿山あり。美濃の境に權現山あり。いづれも數千尺の高さを有す。國內第一の大川なる九頭龍川は。源を東美濃の境に發し。西北に流れて海に入る。流程三十二里。其河口にある阪井港は。敦賀に亞ぐの良港なり。敦賀港は。國の西部にあり。海水深く灣入して大船の碇泊に便す。故に北陸道の近海を航行する船は。必ず此處に寄港す。市街の戸數殆ど三千あり。敦賀町の東部に氣比宮あり。御食津大神、仲哀天皇、神功皇后を合祀せる官幣大社にして。古來北陸の總社とす。仲哀天皇、神功皇后の熊襲征伐の事を圖り給ひし筈飯宮は。此あたりにありしといふ。敦賀町の西に青松白砂相映せる勝地あり。之を氣比の松原といふ。松林中に武田耕雲齋以下勤王の士の墓あり。史に曰く。水戸藩士武田耕雲齋、藤田小四郎等勤王の志士相共に兵を集めて水戸に入らんとせしかども。幕兵のために敗られて意を果すこと能はざりき。耕雲齋等よりて京都に入らんと欲し。道を北陸道に取る。加賀侯之を捕へて越前の敦賀に幽す。慶應元年正月遂に斬に處せられたり。

計	明治二十五年	一、〇二四
	明明二十四年	九九四

總計	明治二十九年	二一、二〇〇
	明治二十八年	一八、二六五
	明治二十七年	一六、三三一
	明治二十六年	一四、八四六
	明治二十五年	一三、九七三
	明治二十四年	一四、〇九二

○軍艦及乗組人員

常備艦隊(軍艦數……九)

須磨艦	艦材	二、七〇〇
	排水量	八、五〇〇
	馬力	二〇〇
	砲數	二〇
	速射砲	四一
	人員	二三八
	下士卒	二七九
	合計	二七九

敦賀町の北に突出したる岬は金崎にして。新田義親の城址ありし處なり。尊長親王の自害し給ひしも此城なり。史に曰く。延元元年新田義親、尊長親王を奉じて金崎城に據る。賊將高師泰、仁木頼章、足利高經等之を攻む。城中糧食乏しく。明年春に至りて城將に陥らんとす。義親親王の前に出で、泣いて曰く。臣力すでに盡きたり。今は、や最後の忠勤を遂ぐべきのみ。親王は願はくは落しらせ給へど。親王答へ給はく。我は元首にして汝は股股たり。股股なくして元首殘るも何かせん。我も共に自害せんと。遂に同じ刃に伏し給ひぬ。御弟の恒長親王は。遂に賊の手に捕はれ給ひて御幼弟成良親王と共に一室に幽せられ給ひけるが。虎狼の如き逆賊は遂に親王に毒藥を進め奉りぬ。成良親王早く曉りて捨てんとし給ふを。親王制して宣はく。たとひ此藥を飲ますとも。尊氏、直義いかでか我等とながらへさすべきと。終に飲みて薨じ給ひぬと。國人此處に宮を建て。尊長、恒長兩親王を祭る。明治二十三年金崎宮の號を賜ひ。官幣中社に列せられたり。此地に至るもの誰か懐古の涙に咽ばざるべき。

福井縣藤原の所在地なる福井市は。國の北部に位し。戶數一萬二百餘を有して。北陸第二の大都會なり。此地足羽山の北にあるを以て。

鎮遠號	艦材	七、三三五
	排水量	六、〇〇〇
	馬力	一四四
	砲數	四七
	速射砲	三八〇
	人員	四二七
	下士卒	四二七
	合計	四二七

松島艦	艦材	四、二七八
	排水量	五、四〇〇
	馬力	二七
	砲數	三九
	速射砲	三三三
	人員	三六二
	下士卒	三三三
	合計	三六二

扶桑艦	艦材	三、七七七
	排水量	三、六五〇
	馬力	一八四
	砲數	一八
	速射砲	一八

古へ北の庄と稱へしが。結城秀康城主となるに及びて。福井と改む東京へは汽車にて十七時間。敦賀へは二時間餘にて達するを得べし。

福井市の北數町の處に藤島村あり。新田義貞戦死の古跡なり。史に曰く。金崎城の陥るや義貞退きて杣山城を保ち。翌年六月進みて足利高經を足羽城に攻め。七月僅に五十騎を隨へて藤島の塞に向ふ。賊兵三百田中に之を圍み射撃すること極めて急なり。一矢遂に義貞の眉間に中る。乃ち自刎して死すと。今こゝに藤島神社を建て、義貞の靈を祭れり。社格は別格官幣社なり。

國內の鐵道は。近江の米原より來り。敦賀、福井等を経て加賀に入る一線あるのみ。

物産の著名なるものは。

奉書紙	奉書紙	蚊帳	生糸	石材
米穀	竹細工	鯛	鱒	章魚
雲丹				

の類なり。

第三章 加賀

千代		高雄	
乗組人員	砲數	乗組人員	砲數
將校	二五	將校	二六
下士卒	三三二	下士卒	一九三
合計	三〇四	合計	二一九
馬力	二、四三九	馬力	一、七七八
排水量	五、六七八	排水量	三、三三二
艦材	鐵骨木皮	艦材	鐵骨木皮
砲數	速射砲	砲數	速射砲
人員	將校	人員	將校
合計	三〇四	合計	二一九
排水量	六四〇	排水量	六四〇

加賀の國は。南越前に接し。東は越中、飛騨に接し。北は能登に連なる。而して西北は一面日本海に臨めり。面積百四十餘方里にして。之を金澤市、江沼郡、能美郡、石川郡、河北郡の一市四郡に分ち。石川縣の管轄に屬す。

此國古へは越前の一郡なりしが。弘仁十四年割かれて一國となれり。

國の東南隅には有名なる白山あり。其脈四方に伸びて。多くの高峰を起すといへども。西南沿海の地方には平野多く。農産に適せり。白山は。富士山および越中の立山と共に。我國の三山と稱せらるゝものにして。高さ殆ど九千尺に近し。山頂五峰に分れ。一峰には伊弉諾尊、伊弉册尊、菊理媛命を合祀したる白山比咩神社の奥宮あり。一峰には大日貴尊を。一峰には大山祇命を祭る。毎年夏季には。富士山の如く白衣を着て登山するもの多し。絶頂は焦石を以て蔽はれ。草木を生ぜず。谷には千秋不盡の積雪あることなど。すべて富士山に似たり。また山中には瀑布多く。大なるものは高さ二百丈に餘れるあり。十數丈のものは數ふるに遑めず。

白山に西には釋迦嶽あり。越中の境には笈嶽、俱利伽羅峙（これは越中の章にていふべし）あり。越前の境には大日嶽、旗野山あり。い

大島		摩耶		愛宕	
乗組人員	砲數	乗組人員	砲數	乗組人員	砲數
將校	一五	將校	二二	將校	一一
下士卒	一一	下士卒	一一〇	下士卒	八六
合計	二六	合計	一二〇	合計	九七
馬力	一、二一七	馬力	六二二	馬力	九六三
排水量	一、二一七	排水量	九六三	排水量	六二二
艦材	鐵骨木皮	艦材	鐵骨木皮	艦材	鐵骨木皮
砲數	速射砲	砲數	速射砲	砲數	速射砲
人員	將校	人員	將校	人員	將校
合計	二六	合計	一二〇	合計	九七
排水量	六四〇	排水量	六四〇	排水量	六四〇

づれも高峻なり。金澤市の西にある野田山は一小丘に過ぎざれども。前田利家以下累代の墓所なるを以て名を知る。

川の最も大なるものを手取川とす。源を白山に發し。北流し西流して海に注げり。

手取川の南に注ぐ安宅川（一名梯川）は。源を越前の境に發し。手取川に並行して海に入る。

安宅川の河口より北一里許の處に安宅町あり。戸數五百に充たざる小市街なれども。義經の北國落の時。關守に怪しまれて辨慶の杖にかゝりしといふ傳説により。極めて著名なり。されど其の關の跡は何處とも知られず。或はいふ。此邊の海岸次第に陥落して海となり。關のありし處も。今は海上二三里の彼方にありと。或は然らん。

石川縣廳の所在地なる金澤市は。國の北部に位し。二萬五千餘の戸數を有して。北陸第一の大都會なり。福井へは汽車にて三時間。東京へは二十時間にて達す。市の中央に城址あり。もと尾山城と稱せしが。前田利家城主となるに及び。大に増築して金澤城と名づけたり。其全形維新後までも存しわたりしを。明治十四年の火災にて一門を除く外悉く烏有に歸せしめしを惜しけれ。城内には今第九師團司令部を置かる。

計	
艦材	二四、一九一
排水量	三四、七〇三
馬力	二二
砲數	一一一
通常砲	二五
速射砲	一〇六
乗組人員	二、〇四〇
將校	二五
下士卒	二、〇一五
合計	二、二九四

横須賀鎮守府(軍艦數)……十一

平遠號	
艦材	二、一八五
排水量	二、三〇〇
馬力	二
砲數	三
通常砲	二
速射砲	一
乗組人員	二、〇四〇
將校	二
下士卒	二、〇三八
合計	二、二九四
艦材	鐵骨木皮
排水量	一、五〇二
馬力	一、六二二

其他國內の小市街をあぐれば。北部に津幡町あり。金澤の西南に松任町あり。其西南部には小松町あり。更に其西南部には大聖寺町あり。

大聖寺町の北一里餘の海濱に篠原村あり。一帯の松林長く連なれる中に。一箇の古墳あり。これ乃名高き齋藤實盛の首塚なる。史に曰く。壽永元年四月。平維盛、通盛、忠度等を追討使となして北陸道に入り源義仲を攻めしむ。其發せんとするや。齋藤實盛入つて宗盛に見えて曰く。越前は臣が郷なり。古人曰はずや錦を衣て郷に歸ると。臣君恩を受くる久し。今老いぬ。唯一死以て君に報するあるのみ。何予錦の直垂を賜はざる。臣衣て以て歸らば。死しても餘榮ありと。宗盛あはれみて其言の如くす。進んで義仲と篠原に戦ひ。平軍大に敗れ衆ことごとく退く。然れども實盛ひとり留まり戦ひしを。それと見るより。手塚光盛呼んで其名を問へば。實盛答へて。汝我首を斬りて木曾殿に獻せよ。必ず我を見知り給はんと。遂に相組んで馬より落ち。光盛實盛を刺して頭を義仲に獻じ。其狀を告げて曰く。單騎錦を衣て。其語は東音なりきと。義仲曰く。實盛にあらずやと。樋口兼光を召して見せしむれば。兼光左なりと曰ふ。義仲曰く。吾實盛が年の高きを知る。今その髪は黒きは何故ぞと。答へて曰く。

武藏艦	
砲數	八
通常砲	一
速射砲	七
乗組人員	二〇
將校	二
下士卒	一八
合計	二〇
艦材	木
排水量	九二六
馬力	七二〇
砲數	九
通常砲	二
速射砲	七
乗組人員	一四
將校	一
下士卒	一三
合計	一四
艦材	鋼
排水量	三、七〇九
馬力	七、六〇四
砲數	二
通常砲	二
速射砲	〇
乗組人員	三三
將校	三
下士卒	三〇
合計	三三
艦材	鋼
排水量	三、七〇九
馬力	七、六〇四
砲數	二
通常砲	二
速射砲	〇
乗組人員	三三
將校	三
下士卒	三〇
合計	三三

實盛嘗て臣と東國にて言へることあり。曰く。白頭にして軍に従はん時は。墨もて我髪を染むべし。然らずんば若武者と戦ひがたきを如何せんと。果して其言に背かざりきと。よりに其頭を洗はしむるれば。頭髮皆白し。義仲泣いて曰く。吾幼にして孤なりし時。此老のために育はれしかば。それをして來り歸せしめ。父とし事へんことを思ひしに。恩を重んじて死に就くは。義と謂はざるべけんやと。屍を收めて之を葬ると。

鐵道は。越前より來れり線の金澤まで通せるものと。能登の七尾より來りし線の津幡まで通せるものとあり。

- 九谷燒
- 加賀絹
- 象眼細工
- 木綿
- 生糸
- 杉原紙
- 米殻
- 杓子
- 石筆
- などを著名とす。

第四章 能登

能登の國は。北陸道の中央に位し。東西北の三面海に臨みたる半島國にして。南の一方のみ越中、加賀に連なれり。面積百二十二方里。之を分ちて羽咋郡、鹿島郡、鳳至郡、珠洲郡の四郡とし。石川縣の管轄

筑波艦		和泉艦		橋立艦	
砲數	馬力	砲數	馬力	砲數	馬力
速射砲	七	速射砲	二	速射砲	一
通常砲	五二六	速射砲	一四	速射砲	二九
合計	五三三	通常砲	一六	速射砲	一六
人員	二二八	人員	二一八	人員	二一八
將校	一	將校	一	將校	一
下士卒	二二七	下士卒	二一七	下士卒	二一七
合計	二二八	合計	二一八	合計	二一八
艦材	鋼	艦材	鋼	艦材	鋼
排水量	二、九六七	排水量	五、五七六	排水量	四、二七八
馬力	二、九六七	馬力	五、五七六	馬力	四、二七八

に屬す。山嶽重疊して海岸には絶壁多く。地勢頗る峻し。南方には平地なきにあらねど土壤薄瘠にして農産に適せず。人民の多くは漁業に従事せり。

山の重なるものをあぐれば。北端に寶立山あり。中央部に別所山、高爪山あり。越中の境に石動山、基石峰あり。いづれも二千餘尺の高度を有す。

此國の地形梨子打鳥帽子に似て。其折れたる所に灣をなせり。之を七尾灣といふ。灣中には能登島あり。三方に凸出部ありて七尾灣を三分す。其西なるを西灣といひ。南なるを南灣といひ。北なるを北灣といふ。

國內第一の良灣たる七尾は。南灣の底部にあり。東西一里南北三十町ありて。且港内水深く波穏かなれば。大船巨艦を泊するに足る。市街の戸數幾と二千五百。商業の繁盛また國內第一なり。

北部の海岸には輪島港あり。七尾に亞ぐの良港にして。市街の戸數は二千餘あり。素麺、漆器を此地の名産とす。

國內の鐵道は。七尾より加賀の津幡に通せる一線のみなり。物産の著名なるものは。

龍田艦		山八重	
砲數	馬力	砲數	馬力
速射砲	九	速射砲	二
通常砲	六	速射砲	一四
合計	一五	通常砲	一四
人員	一一二	人員	一四八
將校	一	將校	一
下士卒	一一一	下士卒	一四七
合計	一二二	合計	一四九
艦材	鋼	艦材	鋼
排水量	八六四	排水量	一、六〇九
馬力	五、〇六九	馬力	五、四〇〇

越中の國は。西北能登に接し。西は加賀に隣し。南は飛騨に。東は信濃、越後に連なる。而して北部は凹入して富山灣を抱けり。面積は二百六十餘方里。之を分ちて富山市、高岡市、上新川郡、中新川郡、下新川郡、婦負郡、射水郡、氷見郡、東礪波郡、西礪波郡の二市八郡とし。富山縣之を管轄す。

東西南の三面には山脈連亘して。地勢おのづから一國の區劃をなせども。北部富山灣に臨める地方は概ね平坦にして。三大河其間を流れ灌漑の便ある故。米作には適せり。

山の重なるものをあぐれば。東に大蓮華山あり。信濃および越後に跨り。高さ九千八百餘尺に及ば。其西南には有名なる立山あり。

立山は我國三山の一なること加賀の白山の處にいへるが如し。直立九千九百尺にして。やゝ大蓮華山より低しといへども。山頂に雄山神社を祀れると。登路の峻険にして奇勝多きとによりて著名なり。

第五章 越中

- 輪島塗
- 素麺
- 柚餅子
- 鯛
- 鮭
- 酒
- 牛
- 馬

鎮東號		鎮北號		計	
馬力	砲數	馬力	砲數	馬力	砲數
三五〇	三	三	三	一、八四七	一、八四七
通常砲	速射砲	通常砲	速射砲	通常砲	速射砲
乗組人員	將校	乗組人員	將校	乗組人員	將校
下士卒	合計	下士卒	合計	下士卒	合計
一、六九五	一、八四七	一、六九五	一、八四七	一、六九五	一、八四七
艦材	排水量	艦材	排水量	艦材	排水量
四四〇	三	四四〇	三	四四〇	三
鋼	馬力	鋼	馬力	鋼	馬力
三五〇	三	三五〇	三	三五〇	三
乗組人員	將校	乗組人員	將校	乗組人員	將校
下士卒	合計	下士卒	合計	下士卒	合計
一、六九五	一、八四七	一、六九五	一、八四七	一、六九五	一、八四七

全山突兀たる巖石より成り。一步を誤れば千仞の壑中に陥る如き危険の處少なからず。此山古へは火山なりしが。今は熄火せり。されども其西腹地獄谷と稱する所には。常に硫烟或は熱湯を噴出して。しばく禽獸の爛死せるを見る。

國の西部加賀の境には俱利伽羅峠(舊名礪波山)あり。源義仲の平軍を破りたる古戰場なり。史に曰く。源義仲兵を北國にあげてより勢頗る盛なり。清盛之を憂ひ維盛等をして兵十萬を率ゐて往いて討たしむ。維盛の軍進んで礪波山に陣す。義仲牛五百を集め。各々角に松明を結びつけ。火を點じて之を放つ。牛は頭の熱するに堪へかね。怒つて平氏の軍に走る。樋口兼光、今井兼平等二萬騎を率ゐ。鼓噪して其後に従ふ。平軍狼狽して度を失し。悉く俱利伽羅谷に陥る。死者五萬餘人と稱すと。

川の大なるものは三つあり。射水川、神通川、黒部川これなり。中にも射水川最も大にして源を飛驒に發し國の西部を北流して富山灣に注ぐ。流程四十里。其河口には、伏木港あり。近年特別輸出港となりしを以て。市街日にまし繁盛に赴けり。

古來歌人の筆に入りたる二上山は。伏木町の西にあり。頂上よりは日本海を見晴らし。西には近く能登半島あり。東には遠く佐渡の島あり。眺望極めてよし。

吳鎮守府(軍艦數……十二)

筑紫艦		吉野艦	
馬力	砲數	馬力	砲數
四、二二六	三六	一、三三七	九
通常砲	速射砲	通常砲	速射砲
乗組人員	將校	乗組人員	將校
下士卒	合計	下士卒	合計
四一六	四四七	四一六	四四七
艦材	排水量	艦材	排水量
二、四三三	九	二、四三三	九
鋼	馬力	鋼	馬力
二、四三三	九	二、四三三	九
乗組人員	將校	乗組人員	將校
下士卒	合計	下士卒	合計
一、七九七	一、九七	一、七九七	一、九七
艦材	排水量	艦材	排水量
四、二二六	三六	四、二二六	三六
鋼	馬力	鋼	馬力
四、二二六	三六	四、二二六	三六
乗組人員	將校	乗組人員	將校
下士卒	合計	下士卒	合計
一、七九七	一、九七	一、七九七	一、九七

あり。眺望極めてよし。

神通川も源を飛驒に發し。國の中部を貫きて富山灣に注ぐ。流程三十餘里なり。

黒部川は源を東南の國境に發し。國の東部を北流して富山灣に入る。流程殆ど三十里なり。

富山縣廳の所在地なる富山市は。神通川の東岸にありて國の中央部に位せり。戸數殆ど一萬四千の大都會にして。商業も繁盛なれども。殊に賣藥の行商最も盛にして。全國如何なる山間僻陬の地にも。富山の賣藥行商人を見ざる所なし。これ此市の盛大を來す所以なるか。

富山市の西五里半の處に高岡市あり。七千餘の戸數を有して國內第二の都會なり。前田利長の築きたる城閣ありしが。今は毀ちて公園となせり。

此國の鐵道は。高岡市より南方の小市街なる城端町に至れる一線あるのみ。

物産には。

- 賣藥
- 銅器
- 鐵器
- 縫針
- 硫黃
- 生糸
- 煙草
- 鮭
- 鱒
- 錫

巖島艦

砲數	速射砲	三〇
人員	將校	二七
人員	下士卒	四一〇
合計		四三七

比叡艦

砲數	通常砲	一三
砲數	速射砲	二五
人員	將校	二七
人員	下士卒	二七九
合計		三〇四

鳳翔艦

砲數	通常砲	二二
砲數	速射砲	五
人員	將校	八
人員	下士卒	五二
合計		六〇

猪 龍膽
などを著名とす。

第六章 越後

越後の國は。北陸道の北端に位し。西は越中に隣し。南は上野に連なり。東は岩代、羽前の二國に接し。西北は一帶日本海に臨む。面積殆ど七百七十里に達し。北陸道中第一の大國なり。之を分ちて新潟市、東蒲原郡、西蒲原郡、中蒲原郡、南蒲原郡、北蒲原郡、三島郡、古志郡、北魚沼郡、中魚沼郡、南魚沼郡、刈羽郡、東頸城郡、中頸城郡、西頸城郡、岩船郡の一市十五郡とし。新潟縣之を管轄す。

國境には山脈連亘すと云へども。海岸に近づくに隨ひ次第に低下し。殊に信濃川、阿賀川の二川ありて。其間に灌漑の便を興へ。農作には極めて適せり。然れども。南に山を繞らして南風を遮り。北國より來る寒風をのみ受くる事なれば。冬季は寒氣極めて強く。道路の雪は積りて軒より高きに至る。山の重なるものをあぐれば。羽前の境には高根山、鷹巣山あり。岩代の境には高陽山、駒形山あり。上野の境には鶴嶽、割引山あり。

鎮邊號

砲數	通常砲	三
砲數	速射砲	七
人員	將校	五〇
人員	下士卒	五七
合計		一〇七

金剛艦

砲數	通常砲	二
砲數	速射砲	一
人員	將校	一四
人員	下士卒	一八六
合計		二〇〇

天龍艦

砲數	通常砲	一
砲數	速射砲	七
人員	將校	一
人員	下士卒	一五
合計		一七

信濃の境には苗場山、妙高山あり。いづれも峻はしくして高し。信濃川は源を信濃に發し。信濃の部を參照せよ。苗場山の西部より。國の中央を貫きて海に入る。流程百四里。實に本土第一の大河なり。信濃川の河口には新潟港あり。東海の諸港に比すれば良港と稱するに足らねど。港灣少き北海にありては最も重要な港なり。故に早くより五港の一に數へられ。外國との互市場たり。市街の戸數一萬餘あり。新潟縣廳は此處にありて。越後および佐渡を管轄す。信濃川および阿賀川の疏通ありて。大に水運の便を極む。阿賀川は源を岩代に發し。ゆくゆく諸流を合せて。信濃川の東部より海に入る。川の南岸に津川町あり。此地より新潟市に至るまで十里餘の間舟楫の便あり。新潟市の東七里餘の處に新發田町あり。羽前街道の要衝に當れるを以て。市街や繁盛なり。戸數二千二百餘。町の北に城址あり。豊臣秀吉の巨溝口秀勝の築きし所にして。明治維新まで天主閣も存せしが。後毀たれて。今は第十五旅團の營所となれり。新潟市よりは信濃川に沿ひて溯れば。十餘里にして長岡町に達す。戸數三千八百餘ありて。國內屈指の市街なり。新潟市との間には。日々汽船の往復あり。

合計

二、三六六

佐世保鎮守府(軍艦數……十一)

葛城艦		操江號		海門艦		高千穂		洲秋	
艦材	排水量	馬力	砲數	人員	乘組	艦材	排水量	馬力	砲數
鐵骨木皮	一、五〇二	一、六二二	七	二〇	一九八	鋼	三、一五〇	八、五一六	一、九
速射砲	四	七	二	二一八	二〇	鋼	七、六〇四	三、七〇九	一、九
通常砲	七	七	一	二〇	二〇	鋼	三、七〇九	三、七〇九	一、九
將校	二	二	一	一〇	一〇	鋼	七、六〇四	三、七〇九	一、九
下士卒	一九八	二一八	二	六七	六七	鋼	七、六〇四	三、七〇九	一、九
合計	二〇	二一八	二	七七	七七	鋼	七、六〇四	三、七〇九	一、九
人員	二一八	二一八	二	七七	七七	鋼	七、六〇四	三、七〇九	一、九
乘組	一九八	二一八	二	七七	七七	鋼	七、六〇四	三、七〇九	一、九
將校	二〇	二一八	二	七七	七七	鋼	七、六〇四	三、七〇九	一、九
下士卒	一九八	二一八	二	七七	七七	鋼	七、六〇四	三、七〇九	一、九
合計	二〇	二一八	二	七七	七七	鋼	七、六〇四	三、七〇九	一、九
人員	二一八	二一八	二	七七	七七	鋼	七、六〇四	三、七〇九	一、九
乘組	一九八	二一八	二	七七	七七	鋼	七、六〇四	三、七〇九	一、九
將校	二〇	二一八	二	七七	七七	鋼	七、六〇四	三、七〇九	一、九
下士卒	一九八	二一八	二	七七	七七	鋼	七、六〇四	三、七〇九	一、九
合計	二〇	二一八	二	七七	七七	鋼	七、六〇四	三、七〇九	一、九

金の三分の一は此處に出づといふ。また盛なりといふべし。眞野灣の沿岸にある眞野村には眞野宮あり。承久の亂に逆臣北條義時のために。此國に遷され給ひし順徳天皇を祭れる處にして。参拜するもの暗涙に咽ばざるはなし。史に曰く。御船佐渡に着き給ひし時の御製。

いづらは磯打つ浪にこそいはん

隠岐の方には何事かある

蓋し隠岐には後鳥羽上皇のおはしますを以てなり。かくて泉村の黒木の御所に憂き年月を送らせ給ふこと二十二年。仁治三年九月十二日を以て崩りましぬと。

同じ眞野村に。また南朝の忠臣日野資朝の墓あり。其子阿新九が父の仇を報いしも此あたりなるべし。

- 金 銀 無名異燒 和布 鹽鱈
- 干砲 章魚 海鼠 鑄物細工
- など著名なり。

第五編 山陰道

山陰道は。本土の西部に位し。東は北陸道、畿内に接し。西及び南とは山陽道に包まる。而して北は一面日本海に臨み。面積は千百餘方里あり。之を分ちて丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、隠岐の八箇國とし。京都府、兵庫、鳥取、島根の一府三縣に分轄せらる。地勢はやや北陸道に似て。南方には山脈連亘し。海に至るに従うて低下せり。されど平地は北陸道より多少なり。

丹波を除けば。七國すべて海に臨むとす。北海の特色として海岸の屈折極めて少なく。たゞ丹後、出雲に小港灣あるのみ。鐵道の通せるはたゞ但馬の一國にして。それも南方生野町より播磨の姫路に至れる線なれば。國內を通過せる間は極めて短し。鐵道此の如くにして海には良港なし。交通の不便知るべきのみ。

第一章 丹波

丹波の國は。東は山城、近江に接し。北は若狹、丹後に連なり。南は攝津に堺し。西は播磨、但馬に隣す。面積は二百餘方里あり。之を分ちて七郡とし。うち多紀郡、氷上郡の二郡は兵庫縣の管轄に屬

洲秋		高千穂		海門艦	
艦材	排水量	馬力	砲數	人員	乘組
鋼	三、一五〇	八、五一六	一、九	二一八	二〇
速射砲	七	七	二	二一八	二〇
通常砲	七	七	二	二一八	二〇
將校	二	二	一	一〇	一〇
下士卒	一九八	二一八	二	六七	六七
合計	二〇	二一八	二	七七	七七
人員	二一八	二一八	二	七七	七七
乘組	一九八	二一八	二	七七	七七
將校	二〇	二一八	二	七七	七七
下士卒	一九八	二一八	二	七七	七七
合計	二〇	二一八	二	七七	七七